

空襲葬送曲

海野十三

青空文庫

父の誕生日に瓦斯マスクの贈物

「やあ、くたびれた、くたびれた」家中に響きわたるような大声をあげて、大旦那の長造が帰つて来た。

「おかえりなさいまし」お内儀のお妻は、夫の手から、印鑑や書付の入った小さい折り鞆をうけとると、仏壇の前へ載せ、それから着換えの羽織を衣桁から取つて、長造の背後からフワリと着せてやった。「すこし時間がおかかりなすつたようね」

「ウン。——」長造は、言おうか言うまいかと、鳥渡考えたのち「こう世間が不景気で萎びちやつちやあ、何もかもお終いだナ」

「また、いい日が廻つてきますよ、あなた」お妻は、夫の商談がうまく行かなかつたらしいのを察して、慰め顔に云つた。

「……」長造は、無言で長火鉢の前に胡座をかけた「おや、ミツ坊が来ているらしいね」小さい毛糸の靴下が、伸した手にひっかかった——白梅の入った葛入の代りに。

「いま、かアちゃんとお湯ぶとうに入ってます。一時間ほど前に、黄一郎きいちろうと三人連れでやつて来ました」

「ほう、そうか、この片つぽの靴下、持ってたてやれ。喜代子きよこに、よく云つてナ、春の風か邪ぜは、赤ん坊の生命いのち取りだてえことを」

「それが、あの児、両足をピンピン跳ねて直ぐ脱いでしまうのでね、あなた今度見て御覽なさい、そりや太い足ですよ、胴中どうなかと同じ位に太いんです」

「莫迦ぼか云いなさんな、胴中と足とが、同じ位の太さだなんて」

「お祖父じいさんは、見ないから嘘だと思いなさるんですよ。どれ持ってたてやりましょう」

お妻は、掌てのひらの上に、片つぽの短い靴下を、ブツと膨ふくらませて載のせた。それがお妻には、まるでおもちゃの軍艦の形に見えた。

「おい、あのなには……」と長造はお妻を呼び止めた。

「弦三げんぞうはもう帰っているかい」

「弦三は、アノまだですが、今朝よく云つとききましたから、もう直ぐ帰ってくるに違いありませんよ」

「あいつ近頃、ちと帰りが遅すぎるぜ、お妻。もうそろそろ危い年頃だ」

「いえ、会社の仕事が忙しいって、云ってましたよ」

「会社の仕事か？　なーに、どうか判ったもんじやないよ、この不景気にゴム工場だつて同じ『ふ』の字さ。素六なんざ、お前が散々甘やかせていなさるようだが、今の中学生時代からしつかりしつけをして置かねえと、あとで後悔するよ」

「まア、今日はお小言デーなのね、おじいさん。ちと外のことでも言いなすつたらどう？　貴郎の五十回目のお誕生日じゃありませんか」

「五十回目じやないよ、四十九回目だよ」

「五十回目ですよ。おじいさん、五十になるとお年齢忘れですか、ホホホホ」

「てめえの頭脳の悪いのを棚にあげて笑つてやがる。いいかいおぎやあと、生れた日にはお誕生祝はしないじやないか、だから、五十から引く一で、四十九回さ」

「なるほど、そう云えば……」

「そう云わなくても四十九回、始終苦界さ。そこでこの機会に於て、遺言代りに、沢山の子供の上を案じてやつてるんだあナ」

「まあ、およしなさいよ、遺言なんて、縁起でもない、鶴亀鶴亀」

「お前は実によく産んだね、オイばあさん。ちよいと六人だ。六人と云やあ半打だ。」

これがモルモットだつて六匹函の中へ入れてみる、騒ぎだぜ」

「やあ、お父さん、お帰りなさい」長男の黄きいちろう一郎が入つてきた。

「モルモットをどうするかてえのは、一体なんです」

長造とお妻とが顔を見合せて、ぷつと吹きだした。

「お父さんは、お前たちのことをモルモットだつて云つてなさるよ。よくお前は六匹も生んだねえ、なんて」お妻はおどけて噓うそしかけるように云つた。

「私達がモルモットなら、お父さんは親モルモットになりますね、ミツ坊は孫モルモットで……」

「そうそう、ミツ坊に、この靴下を持つてつてやらなきやあ。おじいさんは、靴下を早く持つて行けと云つときながら、あたしのことを掴つかまえてモルモットの話なんだからねえ」

お妻は、いい機嫌で室を出て行つた。

「お父さん、今日はお芽出めでとう御座ございます」

「うん、ありがとう」

「きょうは、店を頼んで、三人一緒に、早く出てきました」

「おお、そうかい」

「久しぶりに、モルモットが皆集まって賑かに、御馳走になります」

「うん、——」

長造は何か別のことを考えている様子だった。黄一郎には、直ぐそれが判つたのだった。「もつとも清二はいませんけれど……彼奴なにか便りを寄越しましたか」

清二は、黄一郎の直ぐの弟だった。その下が、ゴム工場へ勤めている弦三で今年が徴兵。適齡。その下に、みどりと紅子という姉妹があつて、末の素六は、やつと十五歳の

の中学三年生だった。

「清二のやつ、一週間ほど前に珍らしく横須賀軍港から、手紙なんぞよこしやがった」

「ほう、そりや感心だな。どうです、元氣はいい様でしたか」

「別に心配はないようだ。今度、演習に出かけると云つた。ばあさんには、なんだか軍艦のついた帛紗をよこし、皆で喰えと云つて、錨せんべいの、でかい缶を送つて来たので驚いたよ。いずれ後で出してくるだろう」

「そりやいよいよ感心ですね」

「うちのばあさんは、これは清二にしちや変だと云つて泪ぐむし、みどりはみどりで、どうも氣味がわるくて喰べられないというしサ、わしや、唵鳴りつけてやった。折角買つ

てよこしたのに喜んでやらねえと云つてナ」

「なるほど、多少変ですかね」

「尤も、紅子と素六とは、清兄さんも話せるようになった、だがこれは日頃の罪滅ぼしの心算なんだろう、なんて滅らさず口を叩きながら、盛んにポリポリやつてたようだ」

「清二は乱暴なところがあるが、根はやさしい男ですよ」

「そうかな、お前もそう思うかい。だが潜水艦乗りを志願するようなところは、無茶じゃないかい。後で聞くと、飛行機乗りと潜水艦乗りとは、お嫁の来手がない両大関で、このごろは飛行機乗りは安全だという評判で大分いいそうだが、潜水艦のほうは、ますます悪いという話だよ」

「それほどでも無いでしょう。ことに清二の乗っているのは、潜水艦の中でも最新式の伊号一〇一というやつで、太平洋を二回往復ができるそうだから、心配はいりませんよ」

「だが、水の中に潜っていることは、同じだろう。危いことも同じだよ」

そこへ廊下をバタバタ駈けてくる蹠音が聞こえてきた。ヒョククリ真ンまるい顔を出したのは中学生の素六だった。

「お父様も、兄ちゃんも、あっちへ来て下さいって、御膳ができたからサ」

「そうか、じやお父様、参りましょう」黄一郎は、腰を起して、父親を促した。

「うん、——よっこらしよい」と長造は煙管をポンと一つ、長火鉢の角で叩くと、立ち上った。「今日は下町をぐるツと廻つて大変だったよ。品物が動かんね、お前の方の店はどうだい」

「駄目ですね。新宿が近いのですが、よくありませんね。寧ろ甲府方面へ出ます。この鼻緒商売も、不景気知らずの昔とは、大分違つて来たようですね」

「第一、この辺に問屋が多すぎるよ」

長造は頤を左右にしゃくつて、表通に鼻緒問屋の多いのを指摘した。この浅草の端の一角を占める花川戸は、古くから下駄の鼻緒と爪革の手工業を以て、日本全国に知られていた。殊に、東京好みの粋な鼻緒は断然この花川戸でできるものに限られていた。鼻緒の下請負は、同じ区内の今戸とか橋場あたりの隣町の、夥しい家庭工場で、芯を固めたり、麻縄を通したり、その上から色彩さまざまの鞆になつた鼻緒を被せたり、それが出来ると、真中から二つに折つて前鼻緒で締め、それを百本ずつ集めて、前鼻緒を束ね、垂れ下つた毛のような麻をとるために、火をつけて鳥渡焼く——そうしたものを、問屋に持ちこむのだった。問屋には、数人の職人が居て、品物を選び別けたり、

特別のものを作つたりして、その上に商標しょうひょうのついた帯をつけ、重い束たばを天井に一杯釣
り上げ、別に箱に収めて積みあげるのだつた。地方からの買出し人が来ると、商談を纏め、
大きい木の箱に詰めて、秋葉原駅、汐留駅、飯田町駅、浅草駅などへそれぞれ送
つて貨車に積み、広く日本全国へ発送するのだつた。長造は昔ながらの花川戸に、老舗を
張つていた。長男の黄一郎は、思う仔細があつて、東京一の盛り場と云われる新宿を、す
こし郊外に行つたところに店を作つていたのだつた。そこには妻君の喜代子と、二人の
間にできたミツ子という赤ん坊との三人の外に三人の雇人がいた。今日は本家の大旦那長
造の誕生日であるから、店を頼んで、浅草へ出て来たのだつた。

「さア、おじいちやま、今晚は、お辞儀なさいよ、ミツ子」

お湯から出て来て、廊下で挨拶あいさつをしているらしい喜代子の声が出た。

「やあ、ミツ坊、よく来たね。はッは」長造が大きな声であやしているらしかった。「お
湯が熱かつたのかい、林檎りんごのような頬ツペタをしているね。どれどれ、おじいちゃんが抱
っこしてやろう。さあ、おいで、アツパツパ」

「やあ、笑つた、笑つた」赤ん坊の珍らしい素六が、横から囃し立てた。

今夜は、客間をつかつて、大きなお膳を中央に並べ、お内儀のお妻と姉娘のみどりが腕

をふるった御馳走が、所も狭いほど並べられてあつた。

長造が席につくと、神棚かみだなにパツと灯とうみょう明がついて、皆が「お芽出めでとうございます」

「お父さん、お芽出とう」と、四方から声が懸つた。

長造は、盃をあげながら、いい機嫌で一座をすつと見廻わした。

「全く一年毎に、お前たちは大きくなるね、孫も出来るし、これで清二が居て——あいつはまだ帰つてこないね」と、弦三の姿のないのに烏渡眉ちよつとひそを顰めたが、直ぐ元のよい機嫌に直つて、

「弦げんも並ぶとしたら、この卓テーブル子じじやもう狭いね、来年はミツ坊も坐つて、おととを喰うだろうし、なア坊や、こりや卓テーブル子じのでかいのを誂あつらえなくちやいけねえ」

「この室が、第一狭せもうござんすねえ」お妻も夫の眼のあとについて、しげしげ一座を見廻わしながら云つた。

「来年は、隣りの間も、ぶちぬいて使うんですね」黄一郎が相槌あいづちをうつた。

「それじゃ、宴会みたいになるね」長造は、癖で指先で丸い頤あごをグルグル撫でまわしながら云つた。

「お父様さん、こんな家よしちまつて、郊外に大きい分離派ぶんりはかなんかの文化住宅を、お建てな

「さいよウ」紅子べにこが、ボツブの頭を振り振り云った。

「洋館だね、いいなア、僕の部屋も拵こしらえてくれるといいなア」素六は、もう文化住宅が出来上ったような気になって、喜んだ。

ミツ坊までが、若いお母アちゃんの膝の上で、ロボットのようピンピン跳ねだした。

「贅ぜい沢たくを云いなさんな」長造は微笑びくし笑しょうして、末ツ子達おきを押えた。

「お父様は、お前達を大きくするので、一杯一杯だよ。皆が、もすこししっかりして、心配の種まを蒔かないで呉れると、もつと働けて、そんなお金たまが溜るかもしれぬ。これ御覽、お父様の頭かぶなんざ、こんなに毛が薄うすくなつた」

父親が見せた頭かぶのてっぺんは、成る程、毛が薄うすくなつて、アルコールの廻りかけているらしい地頭じがしらが、赤くテラテラと、透とおいて見えた。

「お父様さん、そりや、お酒のせいですよ」黄一郎わういちろうがおかしそうに口を出した。

「ほんとにね」お妻おつまが同意して云った。「あなた、この頃、ちと晩酌ばんしゃくが過ぎますよ」

「莫迦ぼかツ。折角せつかくの訓辞くんじが、効目ききめなしに、なつちまつたじやないか！」口のところへ持つてゆきかけた盃さかずきを途中ちゆうちゆうで停とめて、長造は破顔はがんした。

「はッはッは」

「ふ、ふ、ふ」

「ほッほッほ」

それに釣りこまれて、一座は花畑のように笑いころげた。

どよめきが、やっと鎮まりかけたとき、

「それにしても、弦三は大変遅いじゃないか。昨夜は、まだ早かった。この間のように、十二時過ぎて帰ってくる心算なんじや無いかなあ」と、長造が云った。

「お母様、工場へ電話をかけたらどうです」黄一郎が云った。

「それもそうだが、弦の居るところは、夜分は電話がきかないらしいんだよ」

「なーに、彼奴清二の二の舞いをやりかかっているんだよ。うちの子供は、不良性を帯びるか、さもなければ、皆気が弱い」

父親はウツカリ、平常思っていることを、曝け出したのだった。今日は云うのじやなかつた、と氣のついたときは既に遅かった。一座は急に白けかかった。紅子は、断髪頭を、ビューンと一振りふると、卓子の前から腰をあげようとした。

「唯今——」

詰襟服の弦三が、のっそり這入ってきた。なんだか、新聞紙で包んだ大きなものを、

小脇こわきに抱かかえていた。

「まあ大分ひまが懸かかつたのね。さア、こつちへお坐り。お父様がお待ちかねだよ」母親が庇かばうようにして、弦三の席に刺身醬油さしみしょうゆの小皿などを寄せてやった。

「——」弦三は無言のまま、席についた。

「弦おじちゃん、大変でしたね」嫂あによめの喜代子きよよこも、お妻について弦三を庇かばつた。「さあ、ミツ子、おじちゃん、おかえんなさいを、するのですよ」

ミツ子は母の膝の上で、肥ふとつた首を、弦三の方にかしげ、怪訝けげんな面持で覗のぞきこんだ。

「弦三、お前の帰りが遅いので、お母アさんが心配してるぞ」父親は、呶どな鳴りたいのを我慢して、やっと、そう云つた。

「弦ちゃん、明日の晩でも、うちへ来ないか、すこし手伝ってもらいたいものもあるんだが……」黄一郎が、兄らしい心配をして、引きよせて意見をしようという心らしかった。

「このごろ、ずっと忙いそがしいんですよ、兄さん」弦三は、はつきり断ことわつた。

「なにが、そんなに忙しいんだい」父親が、痛いところへ触さわられたように喚わめいた。

「工場が忙いそがしいんです」

「工場が忙いそがしい？ お前の仲間なかまに訊きいたら、一向いっこう忙いそがしくないって云つてたぜ」

「お父さん、僕だけ、忙しいことをやっているんですよ」

「あなた、もういいじやありませんか、お誕生日ですから、ほかの事を仰おっしや有あいよ」母親が危険とみて口を出した。

「うん、大丈夫だよ」父親は強しいて笑顔をつくった。セメントのように硬い笑わらい顔がおだつた。

「今夜は遅くなつたとは思つたんですが、今夜中に仕上げて、お父さんのお誕生日にあげようと思つて、ホラこれ！これをあげますよ」そう云つて弦三は、新聞紙包みを、父親の方へヌツと差出した。

「なに、誕生日だつて」長造はすつかり面喰めんくらつてしまった。

「それを呉れるとかいのかい。ほほう」

「まあ、きたないわ」と紅子べにこが喚わめいた。「お膳よみせの下から出すものよ。夜店でバナナを買ってきたんでしよう」

「なに、バナナか？」父親は手を引込めた。

「バナナじゃありませんよ、僕が工場こしちで拵こしらえてきたんですよ」

「僕知つてらあ。きつとゴム靴だよ。もうせん、僕に拵こしらえてくれたねえ、弦兄げんさん」

「ゴム靴だつて？」父親は顔を硬こわばらせた。「鼻緒屋はなおやの倅せがれが、ゴム靴を作る時代になつたか」
「黙もくつて開あけてごらんなさい、お父さんは、きつと驚おどくでしようよ」

新聞紙の包みは、嫂あによめの手から隣へ廻まわつて、父親の膝の上へ順ひとみあつまおくりふたえみえに送られた。

長造が、新聞紙をバリバリあける手許てもとに、一座の瞳ひとみは聚あつまつた。二重三重の包み紙の下から、やつと引出されたのは、ゴムと金具かなぐとで出来たお面めんのようなものだつた。

「こりや、お前が造つたのかい、一体、これは何だい」父親は狐きつねに鼻つまを摘つままれたような顔を弦三の方に向けた。

「それは、瓦斯ガスマスクですよ。毒瓦斯どくば除よけに使うマスクなんです」

「瓦斯マスク！ ほほう、えらいものを拵こしらえたものだね。近頃、こんな玩具がんぐが流行はやりだしたつてえ訳わけかい」

「玩具おもちゃじゃありませんよ、本物です。お父さん使つかつて下さい。顔にあてるのはこうするのです」

一座が呆ぼう然ぜんとしてゐる裡うちに、弦三は大得意で立ちあがつた。

「いや、もう沢山、もう沢山」長造は、そのお面めんみたいなのを、弦三が本気で被かぶせそうな様子を見てとつて、尻しりこ込みこしたのだつた。「わしはもういいから、素六にでも呉くれてや

れ、あいつ、野球のマスクが欲しいってねだっていたようだから丁度いい」

「野球のマスクと違いますよ、お父さん」弦三は躍起やつきになって抗弁こうべんしたのだった。「いまに日本が外国と戦争するようになるとこの瓦斯ガスマスクが、是非必要になるんです。東京市なんか、敵国の爆撃機が飛んできて、たった五噸トンの爆弾を墜おとせば、それでもう、大震災のときのような焼土しょうどになるんです。そのとき敵の飛行機は、きつと毒瓦斯を投げつけてゆきます。この瓦斯マスクの無い人は、非常に危険です。お父さんは、家で一番大事な人だから第一番に、これを作ってあげたんですよ」

「うん、その志は有難ごんごうざしい」と長造は一つペコンと頭を下げたが、それは申もうしわけ訳わけに過ぎないようだった。「だが、この東京市に敵国の飛行機なんて、飛んで来やしないよ。心配しなさんな」

「そんなことはありませんよ。東京市位、空中襲撃をしやすいところは無いんですよ。僕は雑誌で読んだこともあるし、軍人さんの講話こうわも聴いた——」

「大丈夫だよ、お前」長造は、呑みこみ顔がほに云った。「日本の陸軍にも海軍にも飛行機が、ドツサリあるよ。それに俺等わしらが献納けんのうした愛国号も百台ほどあるしサ、そこへもってきて、日本の軍人は強いぞ、天子様てんしさまのいらっしやるこの東京へなんぞ、一歩だって敵の飛行機

を近付けるものか。お前なんぞ、知るまいが、軍備なんて巧く出来ているんだ」

「空の固めは出来てないんだって、その軍人さんが云いましたよ」

「莫迦ばか、そんなことを大きな声で云うと、お巡りまわさんに叱られるぞ。お前なんか、そんな余計な心配なぞしないで、それよか工場がひけたら、ちと早く帰って来て、お湯にでも入りなさい」

「弦ちゃん、お前は、こんなことで毎日帰りが遅かったのかい」 黄一きいちろう郎が、横合よこあいから口を出した。

弦三は、黙うなずって点ないた。

「瓦斯マスクなんてゴムで作ってあるから永く置いてあると、ボロボロになって、いざというときに役に立たないんだぜ。どうせゴム商売で儲もうけようと云うんだったら、マスクよりも矢張やはりゴム靴の方がいいと思うね」

「儲けなんか、どうでもいいのです」弦三は恨うらめしそうに兄を見上げた。「いまに東京が空襲されたら大騒ぎになるから、市民いや日本国民のために、瓦斯マスクの研究が大事なんです」

「瓦斯マスクのことなんか、軍部に委まかしといたら、いいじゃないか。それに此後このごは戦争な

んて無くなつてゆくのが、人間の考えとしたら自然だと思ふよ。聯盟だつて、もう大丈夫しつかりしているよ。聯盟直属の制裁軍隊さえあるんだからね」

「戦争なんて、野蛮だわ」紅子が叫んだ。

「でも万一、外国の爆撃機がとんできたら、恐ろしいわねエ」

と云つたのは姉娘のみどりだつた。

「もう五年ほど前になりますけれど、上海事変の活動で、爆弾の跡を見ましたけれど、随分おそろしいものですねエ。あんなのが此辺に落ちたら、どうでしょう」嫂の喜代子が、恐怖派に入った。

「きつと、爆弾の音を聞いただけで、気が遠くなつちまうでしょうよ。おお、そんなことのないように」みどりが、身体を震わせて叫んだ。

「大丈夫、戦争なんて起こりやせん」黄一郎が断乎として言い放つた。

「ほんとかい」今まで黙っていた母親が口を出した。「あたしや清二の様子が、気になつてしようがないのだよ」

「清兄さんはネ、お母さん」素六が呼びかけた。「この前うちへ帰つて来たとき、また近く戦争があるんだと云つてたよ」

「おや、清二がそう云ったかい。あの子は、演習に行くと言ってきたが、もしや……」

「お母さん、もう戦争なんて、ありませんよ。理窟りくつから云ったって、日本は戦争をしない方が勝ちです。それが世界の動きなんだから」

「戦争があると、商売は、ちと、ましになるんだがなア。このままじゃ、商人はあがつたりだ」

「なんだか、折角せっかくのお誕生日が、戦争座談会のようになっちまったね。さア私はお酒をおつもりにして、赤い御飯をよそつて下さい」

黄一郎が、盃を伏せて、茶碗を出した。

「じゃ、お汁をあげましょう」お妻はそう云って、姉娘の方に目くばせした。「みどり、ちよつと、お勝手でお汁のお鍋あたたを温めといで」

「はい」

みどりは勝手に立った。

ミツ坊は、いつの間にか、喜代子の胸に乳房くわを銜くわえたまま、スウスウと大きな鼾いびきをかい
て睡ねっていた。

「可愛いもんだな」長造せんぞが膳越ぜんごしに、お人形のような孫の寝顔のぞを覗のぞきこんだ。

「今日は、皆の引張り^{ひっぱ}り^{だこ}になったから、疲れたんですよ。まあこの可愛いアンヨはお妻が、ミツ子の足首を軽く撫でながら、口の中にも入れたそうにした。

「ミツ坊が産れたんで、家の中は倍も賑^{にぎや}かになったようだね」

長造は上々の御機嫌で、また盃を口のあたりへ運ぶのだった。一家の誰の眼も、にこやかに耀^{かがや}き、床の間に投げ入れた、八重桜^{やえざくら}が重たげな蕾^{つぼみ}を、静かに解いていた。まことに和^{なご}やかな春の宵^{よい}だった。

そこへ絹ずれの音も高く、姉娘のみどりが飛びこんで来たのだった。

「大変ですよ、お父さま。ラジオが、今、臨時ニュースをやっていますって！」

「なに、臨時ニュースだって？」

「背後^{うしろ}の受信機のスイッチを入れて下さい。また上海^{シャンハイ}事変ですって！」

「また上海事変だって？」

長造は、床の間に置いてある高^{こう}声^{せい}器^きのプラグを入れた。ブーンと唸^{うなり}って、高^{こう}声^{せい}器^きに、電気がきた。

「では、もう一度、くりかえして申し上げます」高^{こう}声^{せい}器^きの中から、杉内アナウンサーの聲が聞こえた。その声は、隠^{かく}しきれない程、興奮^{くわん}の慄^{ふる}えを帯びていたのだった。

「本日午後五時半、上海市の共同租界内そかいで、我が滝本総領事たきもとそうりょうじが○国人の一団により、惨殺ざんざつされましたお話であります。

兼ねて租界管理に關し、日○兩國間に協議を開いて居りましたが、我が滝本総領事は、常に正々堂々の論陣を張つて、○国の暴論を圧迫してまいりましたところ、其の新規約も八分通り片がついた今日になつて、會議から帰途きとについた総領事の自動車きとが、議場の門から二百米メートルほど行つたところで物蔭にひそんでいた○国人約十名よりなる一団に襲撃され、輕機関銃を窓越しに乱射され、総領事は全身蜂の巣のように弾丸を打ちこまれ、朱あけに染そまつて即死し、同乗して居りました工藤書記長、小柳秘書及び相沢運転手の三人も同様即死いたしました。兇行の目的は、協議妨害きようぎぼうがいにあることは明かあきらであります。以上。

次は居留邦人の激昂げつこうのお話。

この報至るや、居留邦人は非常に激昂しまして、其の場に於て、決死団を組織し、暴行団員が引上げたと思われる共同租界内のホテル・スーシーを包围あかくした揚句ついで、遂に窓硝子ガラスを破壊し、団員四名を射殺し、一名を捕虜とんそうといたしました。他は其場そのばより遁走とんそういたしました。これに対して○国人側も非常に怒り、復讐を誓つて、唯今準備中であります。兩國の外交問題は、俄然がぜん險惡けんあくとなりました。以上。

尚^{なお}追加ニュースがある筈でございますから、この次は、どうぞ八時三十分をお待ち下さいまし。JOAK」

アナウンサーの声は、高声器のなかに消えた。一座は急にざわめき立った。

「えらいことになったね」黄一郎が真^ま先^{つき}に喚^{わめ}いた。「これは鳥^{ちよつと}渡^と解決^{けつ}しませんぜ」

「また戦争かい」母親が心配そうに云った。

「シナ相手の戦争は儲^{もち}らんで困るね」父親が浮かぬ顔をした。

「まあ、お父様は慾^{よく}ばってんのねえ」と紅子が、わざとらしく眼^むを剥^むいた。

「○国でどこのの、兄^{あに}さん」と素六が弦三の腕^{うで}をゆすぶった。

「僕には解^とらないこともないが……」弦三は唇^{くちびる}をゆがめて小さい弟^{あに}に答^{こた}えた。

「どうせ日本の相手はアメリカだよ」黄一郎が、ずばりと云った。

「お父^{おとう}さん、この瓦斯^{ガス}マスクを、新しい意味^{いみ}で受^う取^とって下さい」

弦三の顔は、緊張^{きんじやう}にはちきれそうだった。

「そんなに云^いうなら」

と長造は、自分のお尻^{しつぽん}のそばに転^まっている不^ふ恰^た好^{こう}な愛^{あい}児^じの製^{せい}作^{さく}品^{ひん}をとりあげて云^いった。

「お父^{おとう}様はお礼^{れい}を云^いってしまつとくよ」

そのとき、戸外では、号外売りの、けたたましい呼声が鈴の音に交つて、聞こえ始めた。そして、また別な号外売りがあとからあとへと、入れ代り立ち換り、表通を流していた。

晴やかな笑声に裏まれていた一座は、急に沈黙の群像のように黙りこくつて仕舞つた。

下田家の奥座敷には、先刻とはまるで異つた空氣が流れこんだように思われた。誰もそれを口に出しては云わなかつたが、一座の家族の背筋になにかこうヒヤリとするものが感ぜられるのだった。

不吉な予感……

強いて説明をつけると、それに近いものだった。

我が潜水艦の行方

——遂に国交断絶——

横須賀の軍港を出てから、もう二旬じゆんに近い日数が流れた。

清二の乗組んだ潜水艦伊号一〇一いごうが、出航命令をうけ、僚艦りょうかんの一〇二及び一〇三と、直線隊形をとつて、太平洋に乗出したのは正確に云えば四月三日のことだった。伊豆沖いずおきまで来たときに、三艦は、予定のとおり、隊形を解き、各艦は僚艦にそれぞれ別れの挨拶を取交わして、ここに、別々の行動をとることになった。

いつもであると、訣別けつべつに際し、各艦は水平線上に浮かびあつて、甲板上に整列し、答と舷礼うげんれいを以て、お互の武運たがいぶうんと無事とを祈るのが例であつた。しかし今回に限り三艦は、艦体を水面下に隠したまま、唯ただ、潜望鏡をチラチラと動かすに停とどまり、水中通信機で、メッセーヂを交換し合つたばかりだった。

「何処へ行くのであろう」

清二は推進機に近い電動機室で、界磁抵抗器かいじていこうきのハンドルを握りしめて、出航命令が出た以後の、腑ふにおちないさまざまの事項について不審をうった。

「どうやら、いつもの演習ではないようだ」

二等機関兵である清二には、何の事情も判っていないなかつた。彼は上官の命令を守るについて不審はなかつたけれど、一ひとこと言でもよいから、出動方面を教えてもらいたかつた。水す

いぎゅう
牛 のように大きな図体ずうたいをもった艦長の胸のなかを、一センチほど、截きりひらいてみたかった。

触手じくしゅのところへは、なにか頻々ひんぴんと、命令が下されているのがエンジンの響きの間から聞こえたが、何んな種類どの命令だか判らなかつた。

だが、間もなくジーゼル・エンジンがぴたりと停つて、清二の居る電動機室が急に、忙せわしくなつた。

「界磁抵抗開放用意！」

パイプ
伝声管から、伝令の太い声が、聞こえた。

清二は、開閉器の一つをグツと押し、抵抗器の丸いハンドルを握つた。そしていつでも廻されるように、両肘りょうひじを左右一杯に開いた。

「界磁抵抗開放用意よし！」

しんちゅう
真 鋤ラッパの喇叭口の中に、思いきり唳鳴どなりこんだ。

「開放徐々に始め！」

ギア・カップリング
推進機に齒車ギア結合された電動機の呻りは、次第に高くなつて行つた。艦体が、明

かに、グツと下方に傾斜したのが判つた。深度計の指針が静かに右方へ廻りだした。

「十メートル、十五メートル、……」

深度計の指針は、それでもまだ、グツグツと同じ方向に傾いて行った。

艦底の海水出入孔は、全開のまま、ドンドンと海水を艦内に呑みこんでいるらしい。かかった。

このままでは海底にドシンと衝突するばかりだと思われた。清二は、界磁抵抗のハンドルの、全開の位置に保持したまま、早く元への命令が来ればよいがと、気を焦せさせたのだった。疑いもなく、唯今の状態は、全速力沈降を続けているものであつて、海岸を十キロメートルと出ていないところで、こんな操作をするのは、前代未聞のことだった。

「どこかで吾が潜水艦の行動を監視している者があるのかも知れない」

清二は不図、そんなことを考えたのだった。

それから後は、話にならないほどの、単調な日が続いた。

昼間は、絶対に水上へ浮びあがらなかつた。その癖、電動推進機には、いつも全速力がかかつていた。夜間になると、時々ポカリと水面に浮かんだが、それも極く短時間に限られていた。それはまるで乗組員を甲板に出して、深呼吸をさせるばかりが目的であるとし

か思えなかつた。だがその目的も充分には達せられなかつたようだった。というのは、なにか見えるだろうと喜び勇んで甲板に出てみても、いつも周囲は真暗な洋上で、灯台の灯も見えなかつた。或る晩は、銀砂を撒いたように星が出ていたし、また或る夜はボツボツと、冷い雨が頬の辺を打った、それが一番著しい変化だった。長大息を一つすると、もう昇降口から、艦内へ呼び戻されるという次第だった。

夜間の航行は、実に骨が折れた。艦長は、精密な時計と、水中聴音機とを睨みながら、或るときは全速力に走らせるかと思うと、また或るときは、急に推進機を全然停止させて、一時間も一時間半も、洋上や海底に、フラフラと漂っているというわけだった。

こんなわけで、横須賀軍港以来、二旬の日数が経った。

そして或る日のこと、艦長は乗組員一同を集めて、驚くべき訓令を発した。

「本艦は、本日^{いぎいぎ}を以て、米^{べい}国^{こく}加州^{かしゅうえん}沿岸^{がん}に接近することができたのである」艦長の頬は生々^{いきいき}と紅潮^{こうちよう}していた。「本艦の任務は、僚艦一〇二及び一〇三と同じく、米国の大西洋艦隊が太平洋に廻航して、祖国襲撃に移ろうというその直前に、出来るだけ多大の損害を与えんとするものである。其の目標は、主として十六隻の戦艦及び八隻の航空母艦である」

乗組員は、思わず「呀ッ」と声をあげかけて、やつとそれを呑みこんだ。

艦長の訓令で、いままでの不審な事実は、殆んど水^{ひょうかい}解^{かい}した。航路が複雑だったのは、米国の西部海岸に備えつけられた水中聴音機や其の辺を游^{ゆうよく}弋^{よく}している監視船、さては太平洋航路を何喰わぬ顔で通っている堂々たる間^{かんちようせんぱく}諜^{てん}船^{せんぱく}の眼と耳とを誤^{ごまか}魔^ま化^かすためだったのだ。昨夜見たあの暗い海は、すでに敵国の領海だったのであるかと、清二はそれを思い出して興奮せずには居られなかった。

帝国海軍の潜水艦伊号一〇一は、この日から、加州沿岸を去る二十キロメートルの海底の、兼^かねて、計画をしてあった屈^{くつきよう}竟^{きやう}の隠れ場所に、ゴロンと横たわったまま、昼といわず夜といわず、睡眠病患者のように眠りつづけていた。しかし艦内の一角では、極^{きよくち}超^{ちやう}短^{たんぱ}波^ぱによる秘密無線電話機が、鋭敏な触^{しよつかく}角^{かく}を二十四時間、休みなしに働かせて、本国からの指令を、ひたすら懂^{あこが}れていた。

丁度その頃、東洋方面には、有史以来の險惡な空氣が、渦を巻いていた。

わが日本の上^{シャンハイちゆうざい}海^{かい}駐^{ちゆうざい}在^{ざい}の総領事慘殺事件と、そのあとに続いた在留邦人の復讐事件とは、一^ひと先^まずお互の官憲の手によつて鎮まった。だがそれは無論、表面だけのことであった。東京と、華^か府^ふとの二ヶ所では、政府当局と相手国の全權大使とが、頻^{ひんぱん}繁^{ぱん}に往復し

た。外交文書には、次第に薄気味のわるい言葉が織りこまれて行つた。お互の国の名譽と權益のために、往復文書には、強い意識が盛られていった。

その外交戦の直ぐ裏では、日米両国の戦備が、驚くべき速度と量と形とに於て、進められて行つた。鉄工場には、官設といわず、民間会社と云わず、三千度の溶鋳炉が真赤に燃え、ニューマティック・ハンマーが灼鉄を叩き続け、旋盤が叫喚に似た音をたてて同じ形の軍器部分品を削りあげて行つた。

東京の街角には、たった一日の間に、千本針の腹巻を通行の女人達に求める出征兵士の家族が群りでて、街の形を、変えてしまった。だが其の腹巻の多くは、間に合わなかつたのだつた。それは通行の女人達が、不熱心なわけでは無く、東京に属する師団の動員が、余りに速かつたのである。

或る者は、交番の前に、青物の車を置いたまま、印絆纏で、営門をくぐつた。また或る者は、手術のメスを看護婦の手に渡したまま、聯隊目懸けて、飛び出して行つた。事態は、市民の思っている以上に切迫していた。品川駅頭を出発して東海道を下つていった出征兵員一行の消息は、いつの間にか、全く不明になつてしまつた。

其のあとについて、品川駅を通過してゆく東北地方の出征軍隊の乗つた列車は一々数え

きれなかった。夜間ばかりでは運搬しきれないものと見え、真昼間にも陸続りくぞくとして下つくだて行つた。東北地方の兵營が、空からになるのではないかと、心配になるほどあとからあとへと、出征列車が繰りこんできたのだった。

帝都の辻々に貼り出される号外のビラは、次第に大きさを加え、鮮血せんけつで描いたような〇〇が、二百万の市民を、悉く緊張の天頂てっぺんへ、攫さらいあげた。ラジオの高音器は臨時ニュースまた臨時ニュースで、早朝から真夜中まで、ワンワンと喚わめき散ちらしていた。

そして遂に、其の日は来た。

昭和十×年五月一日、日米の国交は断絶した。

両国の大使館員は、駐在国の首都を退京した。

同時に、嚴おごそかな宣戦の詔しようちよく勅ちよくが下つた。

東京市民は、血走つた眼を、宣戦布告の号外の上に、幾度となく走らせた。彼等は、同じ文句を読みかえして行く度毎に、まるで別な新しい号外を読むような気がした。

「太平洋戦争だ！」

「いよいよ日米開戦だ！」

宣戦布告があると、新聞やラジオのニュースの内容は一変したのだった。

「米国の太平洋艦隊は、今や大西洋艦隊の廻航を待ちて之に合せんとし、其の主力艦は既に布哇パール湾に集結を了したりとの報あり！」

「布哇の日系米人、騒がず」

「墨西哥の首都附近に、叛軍迫る、一兩日中に、クーデター起るものと予測さる」

「英、仏両国は中立を宣言す」

「注目すべきレニングラードの反政府運動」

「中華民国も一と先ず中立宣言か」

「上海に市街戦起る、〇〇師団、先ず火蓋を切る。米国空軍は杭州地方に集結」

東京市民は、我が軍に関するニュースの少いの不満であった、それは恐らく、全国民の不満であるに違いなかった。ことに、太平洋方面に戦機を覬っている筈の、帝国海軍の行動について、一行のニュースもないのを物足りなく思った。

どこからともなく、流言が伝わり出した。東京市民の顔には不安の色が、次第にありありと現われて来た。誰しも、同じような云いたいことを持っていたが、云い出すのが恐ろしくて、互に押黙っていた。

国民の不安が、もう抑えきれない程、絶頂にのぼりつめたと思われた其の日の夜、

東京では、JOAKから、実に意外な臨時ニュースの放送があった。

警戒管制出す！

JOAKのある愛宕山は、東京の中心、丸の内を、僅かに南に寄ったところに在った。それは山というほど高いものではない。下から石段を登ってゆくと、ザツと百段目ぐらいを数える頃、山頂の愛宕神社の前に着くのだった。毬栗を半分に切つて、ソツと東京市の上に置いたような此の愛宕山の頂きは平らかで、公園ベンチがあちこちに並び、そこから、東京全市はもちろんのこと、お天気の良い日には肉眼でも、房総半島がハッキリ見えた。「五分間十銭」の木札をぶら下げた貸し望遠鏡には、いつもなら東京見物の衆が、おかしな腰付で嘯りついていた筈だった。しかし、今日ばかりは、そんな長閑な光景は見えず、貸し望遠鏡はどこかへ姿を隠し、その位置には代りあって、精巧を誇る測高器と対空射撃算定器とが、がっしりした三脚の上に支えられ、それからや

や距^{へだ}つたところには、巨大な高射砲が金網^{かなあみ}を被^{かぶ}り、夕暗が次第に濃くなつてくる帝都の空の一角を睨^{にら}んでいた。

「少尉殿」突然叫んだのは算定器の照準^{しょうじゆんしゆ}手である飯坂上等兵^{いいさか}だった。

「友軍の機影観測が困難になりましたッ」

「うむ」

高射砲隊長の東山少尉は、頤紐^{あごひも}のかかった面^{おもて}をあげて、丁度^{ちやうど}その時刻、帝都防護飛行隊が巡邏^{じゆんら}している筈の品川上空を注視したが、その方向には、いたずらに霧とも煙ともわからないものが濃く垂^たれ籠^こめていて、無論飛行機は見えなかった。

「それでは、観測やめイ」

照準手と、測合手^{そくごうしゆ}とは、対眼鏡^{アイピース}から、始めて眼を離した。網膜^{もうまく}の底には、赤く〇《ゼロ》と書かれた目盛が、いつまでも消えなかった。少尉はスタスタと、社殿^{しゃでん}の脇^{わき}へ入って行つた。その背後^{うしろ}に大喇叭^{おおらつぱ}を束^{たば}にして、天に向けたような聴音器が据えつけられていたのだつた。夜に入ると、この聴音器だけが、飛行機の在処^{ありか}を云いあてた。

「J、O、A、K！」

神社の隣りに聳^{そび}え立つた、JOAKの空中線鉄塔のあたりから、アナウンサーの声が大

大きく響いた。

弾薬函だんやくはこの傍そばに跣うすくまつてゐる兵士の群は、声のする鉄塔を見上げた。鉄塔を五メートルばかり登つたところに、真黒な函みたいなものがあるのが、薄明りのうちに認められたが、あれが、声の出てくる高声器なんだろうと思つた。

本物の杉内アナウンサーは、鉄塔の向うに見える厳かなJ O A Kビルの中にいた。スタディオの、黄色い灯洩ひもれる窓を通して、彼氏かれしの短く苧おごそりこんだ頭が見えていた。

「唯今から午後六時の子供さんのお時間でございますが……」

と云つたは云つたが、流星さすに老練なアナウンサーも、これから放送しようとする事項の重大性を考えて、そこでゴクリと唾つばを嚙のみこんだ。

「……エエ、当放送局は、時局切迫のため、陸軍省令第五七〇九号によりましてこの時間から、東京警備司令部の手に移ることとなりました。随したがつて既に発表しましたプログラムは、すべて中止となりましたので、あしからず御承知を願います。それでは唯今より、東京警備司令官別府大将べつぷの布告ふこくがございます」

杉内アナウンサーは、マイククロフオンの前で、恭うやうや々しく一礼をして下つた。すると反対の側から、年の頃は六十路むそじを二つ三つ越えたと思われる半白の口髭くちひげと頤髭あごひげ、凜りり々し

い將軍が、六尺豊かの長身を、静かにマイククロフォンに近づけた。

「東京及び東京地方に居住する帝国臣民諸君」將軍の声は泰山たいざんの如くに落付いていた。

「本職は東京警備司令官の職権をもつて広く諸君に一言げんせんとするものである。吾が帝国は、曩さきは北米ほくべい合衆国に対して宣戦を布告し、吾が陸海軍は東に於て太平洋に戦機を窺うかがい、西に於ては上海シャンハイ、フィッツリピン、比律賓を攻略中であるが、従来の日清にっしん、日露にちろ、日独にちどく、或いは近く昭和六七年に勃発せる満洲、上海事変に於ては、戦闘区域は外国内に限られ、吾が日本領土内には敵の**一兵も侵入**することを許さなかつたのである。然しかるに、今次の日米**戦役**せんえきに於ては、全く事情を異にして戦闘区域は国外に限定を許されず、吾が植民地は勿論、東京大阪等の内地まで、戦闘区域とするの已やむなきに立至つた。これは諸君に於て既に御承知の如く、主として航空機による攻撃力が増大したる結果である。当局は、敵国航空機の日本本土侵略に対し、充分なる準備と重大なる覚悟とを有するものであるが、元来航空機の侵入を百パーセントに阻止そしすることは、理窟上不可能と証明せられていることであるからして、敵機の完全なる撃退は保証しがたい。故ゆえに本職は、各人が此辺の事情を理解し、指揮者の命したに随したがい、官民一体となつて此の重大事に善処せんことを望むものである。吾が国の家屋は火災に弱く、敵機の爆撃によつて相当の被害あるべく、又非常時に際して

種々の流言蜚語あらんも、国民は始終冷静に適宜の行動をとることによりて其の被害程度を縮少し、空襲怖るるに足らずとの自信を持ち得るものと確信する。徒らなる狼狽は、国難をして遂に収拾すべからざる状態に導くものである。皇国の興廢は諸君の双肩に懸れり、それ奮闘努力せよ。右布告す。昭和十一年五月十日。東京警備司令官陸軍大将別府九州造「

J O A K が聞える五十キロの範囲の住民たちは、この布告を聴くと、老いたるも若きも、共にサツと顔色を変えた。

夕闇深い帝都の空の下には、異常なる光景が出現した。

ラジオの高音器のある戸每家毎には、近隣の者や、見も知らぬ通行人までが、飛びこんで来て、警備司令部の放送がこれから如何になりゆくかについて、耳を聳てるのだった。街を疾駆する洪水のような円タクの流れもハタと止り、運転手も客も、自動車を路傍に捨てたまま、先を争うて高音器の前に突進した。

電車も、軌道の上に停車したまま、明るい車内には人ツ子一人残っていないなかった。

高音器の近所で躁ぐもの、喚く者は、忽ち群衆の手で、のされてしまった。

トーカーをやっている映画館の或るものでは、即時映画を中止し、ラジオをトーカーの

器械へ繋ぎ、応急放送を観客に送つて、非常に感謝された。

歌舞伎劇場では、演劇をやめ、あの大きな舞台の上に、道具方が自作した貧弱な受信機を、支配人が平身低頭して借用したのを持ち出した。血の気の多い観客さえ、石のように黙りこくつてその聴きづらい高声器の音に耳を澄したのだった。

「別府閣下の布告は終りました」杉内アナウンサーは、幾分上り気味だった。「次は塩原参謀より東京警報があります」

「東京警備一般警報第一号、発声者は東京警備参謀塩原大尉！」キビキビした参謀の声が聴えた。

帝都二百万の住民は、この一語も、聞き洩すまいと、呼吸を詰めた。

「信ずべき筋によれば」参謀の声は、余裕綽々たるものがあつた。「比律賓第四飛行

聯隊の主力は、オロンガボ才軍港を脱出し、中華民国浙江省西湖に集結せるものの如

く、而して此後の行動は、数日後を期して、大阪若は東京方面を襲撃せんとするものと信

ぜらる。因に、該主力は、百十人乗の爆撃飛行艇三台、攻撃機十五台、偵察機三十台、

戦闘機三十台及び空中給油機六台より編成せられ、根拠地西湖と大阪との距離は千五百キ

ロ、東京との距離は二千キロである。終り」

参謀が発表した驚くべき空中襲撃の警報は、帝都全市民にとって、僧侶がわたす引導にひとしかった。高声器の前に鼻を並べた誰も彼もは、お互に顔を見合わせ、同じように大きな溜息をついたのだった。

ああ、敵機の空中襲撃！

いよいよ帝都の上空に、米国防軍の姿が現れるのだ。

あの碧い眼玉をした赤鬼たちが、吾等の愛すべき家族を覗つて爆弾を投じ、焼夷弾で灼きひろげ、毒瓦斯で呼吸の根を止めようとするのだ。

「いよいよ来るねッ」丸の内の会社から退けて、郊外中野へ帰ってゆく若い勤人が、

一緒に高声器の前に駆けこんだ僚友に呼びかけた。

「うん」その友人は、鼻の頭に、膏汗を滲ませていた。「警備司令部なんてのが有る

のは、始めて知ったよ。驚いたネ」

「一般警報だというが、敵機の在処や、台数など、莫迦に詳しくないか。民衆には、敵機襲来すべしとだけアナウンスする方が、無難ではないかしら」

「いや、そうじゃないよ」彼は自由にならぬ顔を強いて振った。「敵機が爆弾を落として見ろ、この東京なんざ、震災当時のような混乱に陥ることは請合いだよ。流言は今でも盛

んだ。非常時には更に輪をかけて甚だしくなるよ。その流言を止めるには、戦闘の内容を或る程度まで詳しく、軍部が発表して、市民に戦況を理解させて置かにやいかん。正しい理解は、混乱を救う唯一の手だ」

「それもそうだが……」と、何か云おうとしたときに、ラジオがまた鳴り出した。

「叱ッ、叱ッ」

ざわめいていた群衆は、再び静粛せいしゆくに還った。彼等は、耳慣れない陸軍将校の言葉に、やや頭痛を覚えるのだった。

「東京警備一般警報第二号！」先刻さきほどの将校の声がした。「発声者は東京警備参謀塩原大尉。唯今より以降いこう、東京地方一円は、警戒管制を実施すべし。東京警備司令官陸軍大將別府九州造。終り」

警戒管制に入る！

おお、これは此の前に東京全市で行われたあの防空演習ではないのだ。この警戒管制には、市民の生命が、丁か半ちようはんかの賽さいころの目に懸けられているのだ！

警戒管制が敷かれると、訓練された在郷軍人会ざいこうぐんじんかい、青年団、ボーイ・スカウトは、直ただちに出動した。

一番目覚ましい飛躍ひやくを伝えられたのは、矢張り、光の世界と称よばれている東京は下町の、
浅草区あさくさだったという。

「おい素六そろく、どこへ行く？」

店の前まで来たときに、花川戸はなかわどの鼻緒問屋はなおどんやの主人下田長造しもだちようぞうは遽あわてて駈けだす三男の素六を認めたので、イキナリ声をかけたのだった。

「あ、お父さん」ボーイ・スカウトの服装に身を固めた素六は、緊張の面おもてかを輝かがかせて、立た止ちどまった。「いよいよ警戒管制が出ましたから、僕働いてきます！」

「なに、警戒管制！」長造は目をパチクリとした。「警戒管制でなんだい」

「いやだなア、お父さんは」少年は体をくの字に曲げて慨がい歎たんしたのだった。「警戒管制
てのは、敵の飛行機が東京の上空にやって来て、街の明るい電灯を見ると、ははア此の下
が東京市だなど知るでしょう。そこで爆弾をボンボンおっことすから、大変なことに、な
つちやう。だから空襲のときには、電灯をすっかり消して、山だか海だか、判らないよう
にして置くことが大切でしょう」

「そんなことア知ってるよ」長造は、顔を膨ふくらましてみせた。

「皆で、電灯のスイッチをパチンとひねれば、いいじゃないか」

「だけど、スイッチを誰がひねるか判っていないのですよ。電柱についている電灯とか、お蕎麦そばやさんの看板灯かんばんびなんかは、よく忘れるんですよ。ですから、警戒管制になると空から見える灯火ともしびは、いつでも命令あり次第に、手早く消せるように用意をして置くんです。あつても、なくてもいいような電灯は、前から消して置く。これが警戒管制です。僕受持は、水の公園と、あの並び一町ほどの民家みんかなんです」

「民家！」長造はニヤニヤ笑い出した。「生意気な言葉を知ってるネ。じゃ、行つといで遊びじゃないんだから、乱暴したり、無理をしちや、駄目だよ」

「うん、大丈夫！」

少年は、ニツと笑うと、そのまま脱兎だつとの如く駆け出して行つた。

長造が店頭てんとうに入ると、そこにはお妻つまが、伸びあがつて、往來を眺めていた。

「おや、おかえりなさい」

「うん」

「外は大変らしいのね」

「そうよ、お前」長造は、ふりかえつて店の前を眺めたが、警戒場所に急ぐらしい若人わこうどの姿を、幾人も認めた。

「なんしろ、警戒管制になったんだもの」

「警戒管制では、まだ電灯を消さなくていいのでしょいか」

お妻が訊きいた。

「そりや、ソノお前、警戒管制という奴は、だツ……」

そこへバラバラと少年が駈かけこんできた。

「警戒管制ですから、不用の電灯は消して置いて下さい。この門灯は直ぐ消えるようになっていきますかッ」

「ええ、直ぐ消えるように、なってますよ。おや、波二なみじさんじゃないの」

「ああ、下田しもだのお婆さんの家だったネ」波二と呼ばれた少年は、鳥渡ちよつと顔を赤くした。

「こつちから見ると、電灯の影で判らなかつた」

「あら、そう。御苦労さまだわネ。うちの素六もさつきに出掛けましたよ」

「僕も一生懸命、やっていますよ、お婆さん。この前の演習のときと違って、しつかりした大人は大抵たいてい出征しゅつせいしているんで手が足りないの」

「貴方の家の兄ちゃんも、出征なすつたんだってネ」

「兄さんは立川の飛行聯隊へ召集しょうしゅうされて行つたんだけれど、どうしているのかなア、

その後なんとも云つて来ないんです」

「心配しないで、観音さまへ、お願い申しときなさい。きっと守つて下さるから……」

お妻も、同じような思いだった。二男の清二が潜水艦に乗組んで演習に出たきり、消息の知れないこと、もう四十日に近い。彼女は、母の慈愛をもつて、幼時から信仰を捧げている浅草の観世音の前に、毎朝毎夕ひそかに額き、おのれの寿命を縮めても、愛児の武運を守らせ給えと、念じているのだった。

「誰の家も、同じようなことがあるんだネ」波二少年は暗い顔を、強いてふり払うように云つた。「ンじや、僕もしつかり働きます、さようなら、おばさん」

「ああ、いつてらつしやい。波二さんも、気をつけてネ……」

少年は、高いところに点いている電灯の電球を、ねじつて消すために、長い竿竹の尖端を、五つほどに割つて、繻帯で止めてある長道具を担ぐと、急いで駈け出していた。

「あれは、何処の子だい」長造が訊いた。

「あれは、ほら」お妻は首をふつて思い出そうと努力した。「亀さんちの、区役所の用務員さんで、そうそう、浅川亀之助という名前だった、あの亀さんの末っ子ですよ」

「おオ、おオ、亀之助ンとこの子供かい。どうりで見覚えがあると思つた。暫く見ないうちに大きくなつたもんだネ」

「あの惣領息子が、岸一さんといつて、社会局の事務員をしていたのが、いまの話では、立川飛行聯隊へ召集されたんですつて」

「ふン、ふン、岸ちゃんてのは知つているよ。よく妹なんか連れて、うちの清二のところへ遊びに来たつげが、もうそうなるかなア」

そこへまた、ノコノコと入つて来た人影があつた。それは、古くから浅草郵便局の集配人をやっている川瀬郵吉だつた。

「下田さん、書留ですよ」

「おう、郵どん、御苦労だな」長造が、古い馴染の集配人を労つた。「判子を、ちよいと、出しとくれ」

「あい」お妻は、奥へ認印をとりに行った。

「旦那」郵吉は、大きい鞆の中から、出しにくそうに、白い角封筒を取り出した。「海軍省からの、でございますよ」

「なに、海軍省から！」

長造の顔は、サツと青ざめた。

「うむ」

彼は封筒の頭を截ると、一葉の海軍野紙をひっぱり出した。長造の眼は、釘づけにでもされたように、その紙面の一点に止っていたが、臆てしずかに両眼は閉じられた。その合わせ目から、透明な水球がプツンと躍りだしたかと思うと、ポロリポロリと足許へ転落していった。

その紙面には、次のような文句があった。

戦死認定通知。

潜水艦伊号一〇一乗組

海軍一等機関兵 下田清二

右は去る五月十日午後四時頃、北米合衆国メーヤアイランド軍港附近に於て、

爆雷を受け大破損の後、行方不明となりたる乗組艦と、運命を共にしたるものと信ぜらる。よりに茲に本官は戦死認定通知書を送付し、その忠烈に対し深厚なる敬意を表するものなり。

昭和十×年五月十三日

聯合艦隊司令長官

海軍大将男爵 大鳴門正彦

(とうとう、清二は殺^やられたか！)

「旦那」郵吉が、おずおずと声を出した。「もしや、悪い報^{しら}せでも……」

郵吉は、陸海軍から出した戦死通知を、何十通となく、区内に配達してあるいた経験から、充分それと承知をしているのだったが……。

「なアに——」

長造は、何も知らぬお妻が、奥から印鑑^{いんかん}をもつて来るのを見ると、グツと唇を噛んで堪^{こら}えた。

「大したことじゃないよ。郵どん」

「……」郵どんは、長造の胸の中を察しやって、無言で頭を下げた。そして配達証に判を貰うと逃げるように、店先を出ていった。

「あなた——」その場の様子に、早くも気付いたお内儀^{かみ}は、恐ろしそうに、やつと夫の名

を呼んだだけだった。

「おお、お妻、一緒に、奥へ来な」

長造は、スタスタ奥の間へ入っていった。

店の前の、警戒管制で暗くなつた路面を、一隊の青年団員が、喇叭を吹き吹き、通りすぎた。

くうしゅうけいほう
空襲警報！

時刻は、時計の外に、一向判らぬ地下室のことであつた。それは相当に規模の大きい地下室だった。天井は、あまり高くないけれど、この部屋の面積は四十畳ぐらいもあつた。そして、この室を中心として、隣りから隣りへと、それよりやや小さい室が、まるで墜^{トシネ}道のように拡がっているのだった。そして部屋の外には、可也^{かなり}広いアスファルト路面の廊下^{レール}が、どこまでも続いていて、なにが通るのか、軌道^{レール}が敷いてあつた。地面を支える鉄^{ささ}

筋コンクリートの太い柱は、ずっと遠くまで重なり合つて、ところどころにちゆうこうしよく昼光色
 の電灯が、縞目しまめの影を斜に落としているのが見えた。どこからともなく、ヒューンと発電
 機の呻うなりに似た音響が聴こえているかと思うと、エーテルの様な芳香ほうかうが、そこら一面に
 漂ただよつていたのだつた。時々、大きな岩石でも抛ほうり出したような物音が、地響じびきとともに聞
 えて来、その度毎に、地下道の壁がビリビリと鳴りわたつた。

このような大仕掛けの地下室というよりは、寧むしろ地下街というべきところは、いつの間
 に造られ、一体どこをどう匍はいまわつていのであるか、仮りに物識ものしりを誇る東京市民の
 一人を、そこに連れこんだとしても、決して言いあてることが出来ないであろうと思われ
 た。——この地下街こそは、東京警備司令部が、日米開戦と共に、引移つた本拠だつた。

この地下街については、詳しく述べることを憚はばるが、大体のことを云うと、丸の内に近
 い某区域にあつて、地下百メートルの探さにあつた。この地下街に入るには、東京市内で
 六ヶ所の坑道こうどう入口いりぐちが設けられてあつた。いずれも、偽装ぎそうをこらした秘密入口であるた
 めに、入口附近に居住している連中にも、それと判らなかつた。唯一つ、日本橋の某百貨
 店のエレベーター坑道の底部ていぶに開いているものは、エレベーター故障事件に発して、炯けい
 眼んなる私立探偵帆村莊ほむらそうく六に感付かれたが、軍部は逸いち早くそれを識しると、数十万円を

投じたその地下道を惜気もなく取壊し、改めて某区の出版会社の倉庫の中に、新道を造ったほど、喧しいものだった。

この地下室の中には、地上と連絡する電話も完成していた。食糧も弾薬も豊富だった。大きくないが精巧な機械工場も設けられてあった。地下街の空気は、絶えず送風機で清浄に保たれ、地上が毒瓦斯で包まれたときには、数層の消毒扉が自動的に閉つて、地下街の人命を保護するようになっていた。

さらに驚くべきは、この地下街にいながらにして、東京附近の重要な三十ヶ所に於ける展望が出来、その附近の音響を聞き分ける仕掛けがあった。例えば、芝浦の埋立地に、鉄筋コンクリートで出来た背の高い煙突があったが、そこからは、一度も煙が出たことがないのを、附近の人は知っていた。その煙突こそは、東京警備司令部の眼であり、耳であったのだった。すなわち、その煙突の頂上には、鉄筋コンクリートの中に隠れて、仙台放送局の円本博士が発明したM式マイクロフォンが麒麟のような聴覚をもち、通信省の青年技師利根川保君が設計したテレヴィジョン回転鏡が閻魔大王のような視力を持つていたのだった。

この地下街には、別に、東と西とへ続く、やや狭い坑道があったが、その西へ続くも

のは、重々しい鉄扉てつびがときどき開かれたが、その東へ通ずる坑道は何故か、厳然げんぜんと閉鎖されたまま、その扉に近づくことは、司令部付のものと雖も禁ぜられていた。それは一つの大きい謎であった。司令部内で知っていたのは、司令官の別府大将と、その信頼すべき副官の湯河原中佐とだけであった。

この物々しい地下街の中心である警備司令室では、真中に青い羅紗ろしやのかかった大きい卓テ子が置かれ、広げられた亜細亞アジア大地図を囲んで、司令官を始め幕僚ばくりようの、緊張しきつた顔が集っていた。

「すると、第一回の比律賓攻略は、結果失敗に終わったということになりますな」参謀さんぼうけん

肩章しやうの金モール美しい将校が、声を吞んで唸った。

「うん、そうじゃ」司令官の別府大将は、頤髯あごひげをキュツと扱しごいて、目を閉じた。「第一師団は、マニラの北方二百キロのリンガイエン湾に敵前上陸し、三日目にはマニラを去る六十キロのバコロ附近まで進出したのじゃったが、そこで勝手の悪い雨中戦うちゆうせんをやり、おまけに山一つ向うのオロンガボ才軍港からの四十糧せんちの列車砲の集中砲火を喰くって、その半数以上が一夜のうちにやられたということじゃ。何しろ強風雨のうちだから、空軍は手も足も出ず、さぞ無念じゃったろう」

「閣下。オロンガボ才要塞は、まだ占領出来ませんか」別の将校が訊いた。

「呉淞砲台のように、簡単にはゆかんようじゃ。海軍でも、早く陥落させて、太平

洋に出なけりやならんのじゃ、何しろ、連日のように最悪の気象に阻止せられて、頼みに

思う空軍は全く役に立たず、そうかと云つて、無理に進むと、それ、あの金剛や妙

高のように、機雷をグワーンと喰わなきやならんで、今のところ低気圧の散るのを待た

ねば、艦隊は損傷が多くなるばかりじゃ。それがまた、あまり永くは待てんでのう。どう

も困つたものじゃ」

「中部シナ方面の戦況は、大分発展を始めたらしいですな」前の参謀が、短い口髭に手
を持つていった。

「だが、どうも感心できん」別府將軍は、トンと卓子を叩いた。「こうなると、戦線が

伸びるばかりで、結局要領を得にくくなる。杭州や寧波などに、米軍がいつまでも、

のさばっていたんでは、今後の戦争が非常に、やり憎い」

「米国の亜細亞艦隊は、通称『犠牲艦隊』じゃというわけじゃつたが、中々やりますなア」

「犠牲艦隊じゃつたのは四五年前までのことじゃ。日本が東シナ海を、琉球列島と台

湾海峡で封鎖すれば、どんなに強くなるかということは、米国がよく知っている。この辺

は、日本の新生命線じや。そいつを亜細亜艦隊でもって、何とか再三破ってやらなければ、米海軍は安心して、主力を太平洋に向けることができな。艦齡は新しいやつばかりで、ことに航空母艦が二隻もあるなんて、中々犠牲艦隊どころじやない」

「昨日詳細なる報告が海軍からありましたか」と、又別な参謀が口を切った。「米国の太平洋沿岸で暴れた帝国潜水艦隊の損得比較は、どういふことになりましたか」

「これはやや出来がよかつた」別府將軍は、始めて莞爾にっこりと、類笑ほほえんだ。「伊号一〇二は巧く引揚げたらしいが、行方不明の一〇一と、戦艦アイダホの胸中に衝突して自爆した一〇三を喪うしなつたのに対し、米海軍聯合艦隊側では、アイダホとアリゾナを亡なくし、約六万噸トンを失つた上、航空母艦サラトガに多大の損傷を受けたというから、まず帝国海軍の筋書程度までは成功したと云つてよいじやろう。これで米海軍聯合艦隊も、相当胆きもを潰つぶしたと思う。金剛と妙高とを、南シナ海で喪つた帝国海軍も、これで戦前とうりつと同率かいぐんりよく海軍力を保てたというわけじや」

「伊号一〇一は、爆雷にやられて、海底にもぐりこんだそうですが、特務機関の報告によると、海面に湧ゆう出した重油の量ゆつが、ちと少なすぎるといふ話ですな」

「ほほう、そうかの」將軍は初耳らしく、その参謀の方に顔を向けた。「だが重油が流れ

出すようでは、所詮助かるまい」

「いや、それが鳥渡面白い解釈もあるんです。というのは……」

そこへ遽ただしく、伝令兵が大股で近よると、司令官の前に挙手の礼をした。

「お話中ではありますが」と伝令兵は大きな声で怒鳴った。「唯今第四師団より報告がありました」

司令官の側に、先刻から一言も吐かないで沈黙の行を続けていた有馬参謀長が佩剣をガチャリと音させると、「よおし、読みあげい」と命じたのだった。

「はッ」伝令兵は、左手に握っていた白い紙をツと目の前に上げると、声を張りあげて、電文を読んでいった。「昭和十一年五月十五日午後五時三十分。第四師団司令部発第四〇二号。和歌山県潮岬南方百キロの海上に駐在せる防空監視哨の報告によれば、米軍に属する重爆飛行艇三台、給油機六台、攻撃機十五台、偵察機十二台、戦闘機十二台合計四十八機よりなる大空軍は、該監視哨の位置より更に南南西約五キロメートルの空中を、戦闘機は二千五百メートルの高度、他はいずれも二千メートルの高度をとり、各隊毎に雁行形の編隊を以て、東北東に向け飛行中なり。終り」

「うむ、御苦勞」参謀長は、伝令の手から、電文を受取って、云った。

伝令兵は、再び挙手の礼をすると、同じ室しつの、一方の壁に並んだ、夥おびただしい通信パネルの傍へ帰っていった。そのパネルの前には、通信兵員が七八名も並び、戴頭受話機たいとうじゆわきを付けて、赤いパイロット・ランプの点くジャックを覗ねらつてはプラグを押しこみ、符号のようなわけのわからない言葉を送話器の中に投げこんでいた。

その壁へき体たいと丁度反対の壁には、配電盤やら監視机や、遠距離制御器せいぎよきなどが並んで、一番右によつた一角には、真黒な紙を貼りつけた覗のぞき眼鏡のような丸い窓が上下左右に、三十ほども並んで居たが、これはテレヴィジョン廻転鏡まわりのだった。

「第三師団から報告がありました」別の伝令が、司令官の前に飛んで来た。

「浜松飛行聯隊の戦闘機三十機は、隊形を整ととのえて、直ちに南下せり。一戦の後、太平洋上の敵機を撃滅げきめつせんとす」

「よし、御苦労」

報告は俄然、輻輳ふくそうして来たのだった。司令官と幕僚とは、年若い参謀が指し示す刻々の敵機の位置に、視線を集中した。

海上に配列してあつた防空監視哨は、手にとるように、刻々と敵国空軍の行動を報告してきた。それが紀州沖きしゅうから、志摩半島沖しま、更に東に進んで遠州灘えんしゅうなだ沖と、だんだん帝

都に接近してきた。

それに反して、第四師団のある大阪方面では、空襲から脱れたので、解除警報を出した
ことなどを報告して来た。

果然^{かぜん}、マニラ飛行第四聯隊の目標は、帝都の空にあったのだった。

東京警備司令部内は、眼に見えて、緊張の度を高めていった。

浜松の飛行聯隊が、折柄^{おりから}のどんより曇った銀鼠色^{ぎんねずみいろ}の太平洋上に飛び出していった
頃から、第三師団司令部からの報告は、直接に高声器の中に入れられ、別府大将の前に据
えつけられた。將軍は、胡麻塩^{ごましお}の硬い髻を撫で撫で、目を瞑^とじて、諸報告に聞き惚^ほれてい
るかのようであった。

この場の將軍の様子を、遠くから窺^{うかが}っていたのは、高級副官の湯河原中佐だった。彼は
何事かについて、しきりに焦慮^{しょうりよ}している様^{よう}でもあった。だが其の様子に気付いていた
ものは、唯の一人も無いと云ってよい。なぜならば、中佐を除いたこの室の全員は、刻々
にせまる太平洋上の空中戦の結果はどうなるか、という問題に、注意力の全体を吸収せら
れていたからだった。

聽^{やが}て、中佐は何事かを決心したものらしく、ソツと立つと、入口の扉^{ドア}を静かに押して、

外に出た。

アスファルトの廊下には、人影がなかった。

中佐は、壁に背をつけた儘ままスルスルと、蟹かにの横匍よこばいのように壁際かべぎわを滑すべっていった。そして廳だんで中佐がピタリと止ったのは、「司令官室」と黒い札の上に白エナメルで書かれた室だった。

奇怪な湯河原中佐は、扉ドアの鍵穴に、なにものかを挿し入れてガチャガチャやっていたが、やつと扉が開いた。

ものの五分と時間は懸たらなかつた。司令官室で何をやったのであるかは判らぬけれど、再び中佐が姿をあらわしたときには、非常な決心をしているらしく、顔面神経がめんしんけいがピクピク動いているのが、廊下灯ろうかとうによって写し出されたほどであった。このとき、中佐の両手は、ポケットのうちにあつた。

彼は再び、元来た路を、とつてかえすと、司令部広間の扉ドアの前を素早く通り、それから後はドンドン駈かけ出して行つた。

中佐の身長が、その先の階段に跳ねあがつた。十段ばかり上ると、そこに巖がんじょう丈ちやうな鉄て扉つびがあつて、その上に赤ペンキで、重大らしい符牒ふちようが無雑作むざうさに書かれてあつた。中佐は

それには眼も呉れず、扉のあちらこちらを、押えたり、グルグル指を廻したりしているうちに、サツとその重い鉄扉を開くと、ちよつと後を振り返り、誰も見てないのを確かめた上で、ヒラリと扉ドアの中に姿を消してしまつたのだつた。

「……」

誰もいないと思つた階段の下から、ヌツと坊主頭ぼうずあたまが出た。しばらくすると、全身を現した。襟章えりしやうは蝦茶えびちやの、通信員である一等兵の服装だつた。彼は中佐の姿の消えた扉の前に、躍り出ると、手袋をはいたまま、力を籠めて把手とつてをひっぱつてみたが、扉はゴトリとも動かなかつた。

そこで彼はニヤニヤと笑うと、扉の前を淡白たんぱくに離れ、廊下の上をコトコトと駈け出していた。そして何処かに、姿は見えなくなつた。

丁度ちやうどそのころ、大東京ははしかにでも懼かかつたように、あちらでも、こちらでも、騒然としていた。号外の鈴は、喧しくやかま、街の辻々に鳴りひびいていた。夜になつた許りの帝都の路面が、莫迦ぼかに暗いのは、警戒管制で、不用な灯火あかりが消され、そしてその時間が続いているせいだつた。

警戒員の外には、往來を歩いている者も、無いようであつた。誰もが、それぞれの家屋

に落付いて、刻々にJ O A Kが放送してくる時事ニュースを一語のこらず聞いているせいだったであろう。

ラジオ受信機のない家こそ、惨めみじであつた。区役所の用務員、浅川亀之助一家は、その種類に入る家だつた。

「おい、おつる」亀さんが、暗い露路ろじから声をかけた。

「どうなつたい、お前さん」勝手元に働いていた女房のおつるは、十燭しよくの電灯を逆光線に背負つて顔を出した。

「いま聞いたところによるとナ」亀さんは、はアはア忙せわしない呼吸をつきながら云つた。

「いよいよアメリカの飛行機は静岡辺まで、やつて来たらしいんだ。浜松の飛行隊で、追駈やっけ廻うましているけれど、敵の奴やつを巧くく喰く止とめることが出来ないらしいんだ。それでも五つ六つ墜おつことしたらしいつてことだ」

「まあ、大変だわネ。ンじゃ、今夜のうちにも、東京へ飛んでくるかい」

「来るだろうツて話だ」そこで亀さんは、鼻の下をグイとこすりあげると、駈やっけ出しそうにした。「じゃ、もつとラジオを聞いてくるからな」

「ちよいと、待つとくれよ、お前さん」おつるは遽あわてて、亭主を呼びとめた。「お舟は、

ダンスホールがお休みになったといつて帰つて来たけれど、笛坊ふえぼうの方は、まだ電話局から戻つてこないんだよ。いつもなら、もう疾とくに帰つて来てなきやならないんだがね」

「うむ」亀さんは首を傾けて、去年の秋、交換手をしている娘の案内で見に行った東京中央電話局の建物を思い浮かべていた。「ひよつとすると、忙しいのかも知れねえぜ」

「波二も、少年団へ出かけたつきりで、うちには、おばアさんとお舟としか居なくて不信心だから、なるだけ早く帰つてきとくれよ、お前さん」

「あいよ、判つてるよ」

亀さんは、また、あたふたと、町角まちかどのパン屋の高音器を目懸けて、かけ出して行つた。

パン屋の軒先は、附近の下層階級の代表者が、黒山のように、だが水をうったように静せ粛しゆくに、アナウンサーの読みあげる臨時ニュースに耳を傾けていた。

「唯ただいま午後七時三十分、米国空軍の主力は、伊豆七島の南端、三宅島の上空を通過いたして居ります旨むね、同島の防空監視哨から報告がございました。以上」

高音器の前の群衆は、流星さすに興奮して、ザワザワと身体を動かした。

「次に、いよいよ帝都に於きましては、空襲警報が発せられる模様であります。敵機の帝都空襲は、全く確実となり、帝都との距離は最早二百キロメートルに短縮せられましたの

で、東京警備司令部では、いよいよ『空襲警報』を出す模様であります。空襲警報が布告されますと同時に、兼ねて御知らせ申上げてありましたように、当J O A Kの放送は、戦闘終了の時期まで、一と先ず中断いたすことになって居りますので、左様ご承知下さいまし」

人々の顔には、次第に不安の色が深く刻まれて行つた。

「尚、くりかえして申し上げますが、空襲警報が出ました節は、兼ねての手筈によりましていつでも灯火を外に洩れなくすることが出来るよう準備をし、消防及び毒瓦斯防護係の方は、直ちに、その持ち場持ち場に、おつき下さることを御忘れないように願います。そして、いよいよ敵機が襲来して参りますと、非常管制警報が発せられるからして、その時は、即刻、灯火を御始末下さいまし。呀ッ、いよいよ空襲警報が発せられる模様であります」

杉内アナウンサーの声は、ぱたりと、杜断れた。

愛宕山の山顛には、闇がいよいよ濃くなつて来た。月のない空には、三つ四つの星が、高い夜の空に、ドンヨリした光輝を放つていた。やや冷え冷えとする、風のない夜だった。

警報隊長の四万中尉は、兵員の間に交つて、いつもは東京全市に正午の時刻を報せる大サイレンの真下に立っていた。

「中尉殿、報告」

傍らの松の木の蔭に、天幕を張り、地面に座っている一団から、飛び出して来た兵士だつた。小さい鐘を横にしたような中に、細いカンテラの灯が動いている、その微かな灯影の周囲に三四人の兵士が跣つていた。よく見ると一人は真黒な函に入った器械の傍で卓上電話機のようなものを、耳と口とに、押しあてていた。これは司令部との間を繋ぐ有線電話班の一隊に、違いなかつた。

「おう」

四万中尉が、声をかけた。

「司令部より命令がありました。空襲警報用意！ 終り」

「うん。鳥渡待て」中尉は、つかつかと、サイレンの開閉器のところへ歩みよつて、そこに立っている兵士に訊いた。「空襲警報用意があつた。準備はいいようだな」

「はッ。用意は、よいであります」

中尉は軽く肯くと云つた。「よいか、ぬかるな」

「おい佐島一等兵。電話で司令部へ、報告せい。空襲警報用意よし！」

「はいッ」一等兵は身を翻ひるがえして、天幕テントのところへ帰った。「空襲警報用意よし」

天幕の中の通信員は、送話器の中に、歯切れのよい声を送りこんだ。

「愛宕山警報所。空襲警報用意よウし！」

やがて、一分、二分。

電話機のある天幕から、大サイレンの間までには、ズラリと兵員が立並んで、いずれも及び腰で、報告が電話機の上に来れば、直ちに警報が出せるように身構えた。

そして、突如——

「空襲警報ウ！」

電話機を掴つかんでいる兵士が、大声で怒鳴った。

「空襲警報！」

「サイレン鳴らせイ！」

命令の聲が、消えるか消えない内に、

「ンぶうッ——う、う、う」

と愛宕山あたごやまの大サイレンが鳴り出した。雄壮ゆうそうというよりも、悲壮な音響だった。

東京市内の電灯という電灯は、パツと消えて、全市は暗黒になった。

「呀ッ」

覚悟をしていた人でさえ、驚きの声をあげた。

「十五秒して、又電灯が点いたら、空襲警報なんだよ」

小学生たちは、学校の先生に教わったとおりに、電灯が消えたので、面白がっていた。電灯が消えると、俄かに聴力が鋭敏になったのだった。いままで聞こえなかった半鐘の音が、サイレンに交つて、遠近いろいろの音色をあげていた。

「ジャーン、ジャンジャンジャン」

「ボン、ボンボンボン」

下町の木工場の、貧弱なサイレンも、負けず劣らず、喚きつづけていた。

「呀ッ、電灯が点いたッ」

誰の目も、電灯の光を見上げて、嬉しそうに笑った。ほんとに光りは、人間にとって、心強いものだった。

下町の表通りを、バラバラと駈け出す一隊があった。

「火を消す用意をして下さい。不用な灯は消して下さい。空襲警報ですよ」

竿竹と、メガフォンと、赤い布を捲きつけた懐中電灯とで固めた一隊が、町の辻々を、練りまわった。

今、帝都は、敵機の襲撃をうける！

浜松の戦闘機隊は、どうしたであろうか。

追浜おっばまの海軍航空隊は、既すでに上空めがけて、舞いあがったであろうか。

立川の飛行聯隊の用意は、整ととのったであろうか。

東京市民が、醜きよきん金をし合あって献納けんのうした十五機から成る東京愛国飛行隊は、どうして

いるであろうか。

嵐の前の静寂せいじやく！

帝都の夜空は、漆うるしのように、いよいよ黝くろくろ々と更ふけていった。

空襲葬送曲くうしゆうそうそうきょく

非常管制の警報が出たのは、それから三十分ほど、後のことだった。

一等速く、民家に達したのは、電灯による警報だった。

「おい、お妻」と鼻緒問屋の主人、長造は暗闇の中で云った。

「お前、今、時計を見なかったか」

「いいえ、暗くなつたんで、判りませんわ」

「非常管制の警報らしいが、何分位消えているんだっけな」

「お父さんは、忘れっぽいのね。三十秒の間消えて、また三十秒つき、それからまた三十秒消えて、それからあと、ずっと点くのですよ」

「感心なもんだな、覚えているなんて——」

三十秒経つたのか、電灯がパツとついた。

「今度は時計を見てるよ。これで三十秒経つて消えたら、いよいよ本物だ」

「呀ッ、消えましたわ」

お妻の声には恐怖の音調が交っていた。

間もなく、電灯は再び点いた。

「ほうら、見なさい。いよいよ非常管制だ。ははア」

「誰か、表の電灯を消して下さい」

「もう消しましたよ」真暗な店の方から、返事があつた。

「お父さん。ここの電灯も消して、ちようだい。あたし、怖いわ」長女のみどりが、奥の間へやってきた。

「ここは見えやしないよ」

「だって、戸の隙間すきまから、見えちまうじやないの」

「じゃ、こうしとこうかな。手拭てぬぐいを、姐ねえさん被かむりにさせて」

「ああ、それで、いいわ」あとから附ついて来た紅子べんごしが云つた。

「家の中を皆、真暗にしてしまうんですもの。暗くちや、怖いわ」

そこへ、店の方から、ドカドカと上あがりこんで来た者があつた。

「お父さん」

「おお、弦三か。よく帰つて来た」

「この前、お父さんにあげた防毒マスクが、いよいよ役に立ちますよ」

「うん」長造は感慨かんがいふか探たそうに云つた。「あまりいいことじやない。それにマスクは一つじやなア」

「お父様」弦三は、電灯の下へ、大きな包みをドサリと置いた。

「いよいよ、皆の分を作ってきましたよ。姉さんはいますか、姉さん」

「あい、此処よ」後に下つていたみどりが顔を出した。

「ここに、鉛筆で使用方法を書いときましたから、大急ぎで、消毒剤を填めて、皆に付けてあげてください」

「弦三、お前まだどつかへ行くのかい」

母親が尋ねた。

「僕は直ぐ出懸けます」

「この最中に、どこにゆくんだ」長造が問いかえした。

「淀橋の、兄さんのところへ、マスクを持ってゆくんです」

「なに、黄一郎のところへか」

「ほら、御覧なさい。この大きい二つが、兄さんと姉さんとの分。この小さいのが、三ツ坊ぼの分」

「なるほど、三ツ坊にも、マスクが、いるんだったな」

「よく気がついたね」母親が、長男一家のことを思つて、涙を拭いた。

「それにしても今頃、危険じゃないか。いつ爆弾にやられるか、しれやしない。あつちでも、相当の用意はしてるだろうから、見合わしたら、どうだ」

「いえ、いえ、お父さん」弦三は、首を振った。

「僕は、もつと早く作つて、届けたかったです。だが、お金もなかったし、僕の腕も進んでいなかった……」

長造は、弦三のことを、色氣いろけづいた道楽どうらく者と罵ののしたことを思い出して、暗闇の中に、冷汗ひやあせをかいた。

「それが、今夜になって、やっと出来上つたのです」弦三は嬉しそうに呟つぶやいた。「僕は、東京市民の防毒設備に、サツパリ安心が出来ないので。行かせて下さい。いつも僕のと想つていてくれる兄さんに、一刻いっこくも早く、この手製のマスクを、あげたいんです」

感激むせびの嗚咽むせびが、静かに時間の軸の上を走つていった。

「よおし。行つて来い」長造がキツパリ云つた。「いや、兄さん達のために、行つてやれ。だが、気をつけてナ……」

あとには言葉が無かつたのだつた。

「じゃ、行つてまいります」

これが、弦三と一家との永遠の別れとなったことは、後になって、思い合わされることだった。

「弦——」

母親のお妻が、我児を呼んだときには、弦三の姿は、戸外そとの闇の中に消えていた。

非常管制の警報は、いつしか熄やんでいた。

外は咫尺しせきを弁べんじないほど闇黒まっくらだった。

弦三は、背中に、兄に贈るべきマスクを入れた包みを、斜に背負い、自分のマスクは、腰に吊し、歩きづらい道を、どうかして早くすすみたいと気を焦あせった。

市内電車は、路面に停車し、車内の電灯は真暗に消されていた。これは、架空線かくうせんとポールとが触れるところから、青い火花が出て、それが敵機に発見される虞おそれがあるからだった。

それは弦三の目算もくさんちが違いだった。彼は、雷門かみなりもんまで出ると、地下鉄の中に、もぐり込んだ。

地下鉄の中には、煌々こうこうと昼あさむを欺くような明るい灯がついていた。だが、暗黒恐怖症の市民が、後から後へと、ドンドン這入はいりこんでいて、見動きもならぬ混雑だった。

「ここん中へ入つとれば、爆弾なんか、大丈夫ですよ」五十近い唇の厚い老人が、たった一人で、こんなことを喋しゃべっていた。

「全くですネ。近頃のお金持は、てんでに自分の屋敷の下に一間や二間の地下室を持つてまったいるようですが、農わしたちプロレタリアには、そんな気の利いたものが、ありませんのでねえ」

そう云つたのは、長髪の、薄気味わるい眼付の男だった。

「お蔭かげさまで、助りますよ」齒の抜けたお婆さんが、臍へそく繰り金がねの財布を片手でソツと抑えながら、これに和した。

「だが、毒瓦斯どくガスが来ると、この孔あなの中は駄目になるぜ。駅長に云つて、早く入口の鉄扉てつびを下ろさせようじゃないか」会社の帰りらしい洋服男が、アジを始めた。

「駅長、扉ドアを下ろせ！」

「扉を、し、め、ろツ」

そろそろ、空気は險けんあく悪あくになつて来た。

片隅では、浚しづかわ皮かわの剥むけた娘をつれた母親が眉を釣りあげて怒っていた。

「あなた、女連れだと思つて、馬鹿にしちやいけませんよ」

「いッヒ、ヒ、ヒ、ヒッ。こういう際は。仲よくしましょう。今に、えらい騒ぎになり
ますぜ、そのときは……」

酒を呑んでいるらしい羽織袴はおりはかまの代書人といったような男が、汚い齒列はなみを見せて、ニヤ
ニヤと笑った。

「皆さん。静せいしゆく肅しゆくにして下さい。さもないと、出て行って頂きますよ」

駅長が高いところから怒鳴った。

「出ろ！ とはなんだッ」

「もう一度、言ってみろッ！」

「愚ぐ凶ぐ愚ぐぬかすと、のしちまうぞ」

先刻さっきの怪しい一団が、駅長の声を沈黙させてしまった。

そこへ地下電車が、やっと来た。

弦三は、背筋になにか、こう冷ひやりとするものを感じたが、其儘そのまま、車内の人となった。

新宿まで、この地下鉄で行けると思ったことも、誤あやまりだった。須田町すたちょうまでくると、無

理やりに下ろされちまった。コンクリートの、狭い階段をトコトコ上ってゆくと、地上に
出た。

「横断する方は、こつちへ来て下さい」

「自動車は、警笛を鳴らしながら走つて下さい。警笛は、飛行機に聞えないから、いくら鳴らしても、いいですよ」

「懐中電灯は、そのままでは明るすぎますから、ここに赤い布きれがありますから、それを付けて下さい」

あちこちに、メガフォンの太い声が交叉こうさして、布を被せた警戒灯が、ブラブラと左右に揺れていた。すべて秩序正しい警戒ぶりだった。

(それにしても、さつき見たのは、あれは夢だったかしら。悪夢あくむ！ 悪夢！)

弦三は、雷門の地下道に蟠わだかまる不穏な群衆のことを、この須田町の秩序正しい青年団に對比して、悪夢を見たように感じたのだった。しかし、それは果して夢であつたらうか。いやいや弦三は、確かに、あの呪のろいにみちた悪魔の声をきいたのだった。

弦三は、一つ自動車を呼びとめて、新宿の向うまで、走らせようと考えた。弦三は、二十一になる唯今まで、誰かに自動車に乗せて貰ったことはあるが、自分ひとりで、自動車を呼び止めた経験がなかつたので、ちよつとモジモジしながら、須田町の広場に、突立っていた。

「呀ッ！」

「やったぞオ！」

突然に、悲鳴に似た叫聲が、手近かに起つた。

ハツとして、弦三は空を見上げた。

鉄が熔けるときに流れ出すあの灼けきつたような杏色とも白色とも区別のつかない暈光が、一尺ほどの紐状になつて、急速に落下してくる。

「爆弾にちがいない」

高さのほどは、見当がつかなかつた。

見る見る、火焰の紐は、大きくなる。

爆弾下の帝都市民は、その場に立竦んでしまった。

悲鳴とも叫喚ともつかない市民の声に交つて、低い、だが押しつけるようなエネルギー

ギーのある爆音が、耳に入った。

ぱつと、空一面が明るくなつた。

弦三は、胆を潰して、思わず、戸を閉じた商店の板戸に、うわつと、しがみついた。

敵機の投げた光弾が、頃合いの空中で、炸裂したのだった。

ドーン。

やや間を置いて、大きい花火のような音響が、あたりに、響き互わたった。

光弾は、須田町の、地下鉄ビルの横腹に、真黄色な光線を、べたべたになすりつけた。

弦三は、商店の軒のきした下から飛び出して、万世橋まんせいばしガードの下を目懸けて走っていった。

ガードの上と思われるあたりで、物凄い音響がした。

「ドツ、ドツ、ドツ、グワーン」それは紛れもなく、高射砲隊の撃ちだした音だった。悠々と天あまくだ下りながら、帝都の屋根を照らしていた光弾が、一瞬間にして、粉碎されてしまった。

帝都の空は、又もや、元の暗黒に還った。

と、思ったのは、それも一瞬間のことだった。

サツと、紫電しでん一閃いっせん！ どこから出したのか、幅の広い照空灯が、ぶつちがいに、大空の真中で、交叉こうさした。

「呀ッ、敵機だッ」

真白い、蜻蛉とんぼの腹のような機影が、ピカリと光った。

そこを覗ねらつて、釣瓶撃つるべうちに、高射砲の砲火が、耳を聳もつするばかりの喚声かんせいをあげて、集

中された。

照空灯は、いつの間にか、消えていた。

その次の瞬間、弦三の眼の前に、瓦斯^{ガス}タンクほどもあるような太い火柱^{ひばしら}が、サツと突^つ立ち、爪先から、骨が砕けるような地響^{つたわ}が伝^{つた}つて来た。そして人間の耳では、測量するほどの出来ない程大きい音響がして、真正面から、空気の波が、イヤというほど、弦三の顔を打った。

爆弾が落ちたのだ！

イヤ、敵機が、爆弾を投げつけたのだった。

バラバラツと、礫^{こいし}のようなものが、身^{しん}辺^{へん}に降^ふつて来た。

照空隊の光芒^{こうぼう}は、異分子^{いぶんし}の侵入した帝都の空を嘗^かめまわした。

その合間、合間に、高射砲の音が、猛獣のように、恐ろしい呻^うり声をあげた。

それは、人間の反抗感情というのでもあろうか。爆弾の音を聞かされ、照空灯のひらめきを見せられた弦三は、自分の使命のことも何処^{どこ}へか忘れてしまい、

「畜生！ 畜生！」と独^{ひと}り言^{ごと}を云^いいだしたかと思うと、矢庭に側の太い電柱にとびつき、危険に気がつかぬものか、

「わツしよい、わツしよいツ」と、背の高い、その電柱の天頂まで、人技とは思われぬ速さで、攀つていった。

そこは、帝都のあつちこつちを見下ろすに、可也いい場所だった。眺めると、帝都の彼方此方には、三四ヶ所の火の手が上っていた。

次の爆弾が、空から投げ落とされる度に、物凄い火柱が立って、それは臆て、夥しい真白な煙となつて、空中に奔騰している有様が、夜目にもハッキリと見えた。そして、その次に、浮び出す景色は、嘗て関東大震災で経験したところの火焰の幕が、見る見るうちに、四方へ拡がってゆくのであった。

弦三は、地響きのために、いまにも振り落されそうになる吾が身を、電柱の上に、しっかりと支えている裡に、やつと正気に還つたようであつた。

彼は、こわごわ、電柱を下りた。

地上に降り立つてみると、そこには又、先刻と違つた光景が展開しているのだつた。

どこで、やられて来たものか、呻き苦しんでいる負傷者が、ガードの下に、十五六人も寝かされていた。

「ビューツ」どこからともなく、警笛が鳴つた。

「毒瓦斯だ、毒瓦斯だッ！」

「瓦斯がきましたよ、逃げて下さい」

「風上へ逃げてください。皆さん、××町の方を廻って××町へ出て下さい」

肝心の××町というのが、サツパリ聞きとれなかった。

広瀬中佐の銅像の向うあたりに、うち固つて狂奔する一団の群衆があつた。

「やッ、ホスゲンの臭いだ！」

弦三は、腰をさぐつて、彼の手製になる防毒マスクを外した。そのうちにも、ホスゲン瓦斯特有の堆肥小屋のような悪臭が、だんだんと、著明になつてきた。彼は、防毒マスクをスツポリ被ると、すこしでも兄達の住んでいる方へ近づこうと、風下である危険を侵し、避難の市民群とは反対に、神保町から、九段を目がけて、駈け出していった。

だが、神保町を、駈けぬけきらぬうちに、弦三は運わるく、近所に落ちた爆弾の破片を左脚にうけて、どうとアスファルトの路面に倒れてしまった。

「なに糞、こんなところで、死んでなるものか！」

彼は歯を喰いしばった。

路面に転っていると、群衆に踏みつぶされる虞れがあるので彼は痛手を堪えて、じりじ

りと、商家の軒下へ、虫のように匍^はつていった。

右手を伸ばして、傷口のあたりをさぐってみると、幸^{さいわ}いに、脚の形はあったが、まるで糊^{のり}壺^{つぼ}の中に足を突込んだように、そのあたり一面がヌルヌルだった。湧き出した血の赤いのが、この暗さで見えないのが、せめてもの幸^{さいわ}いだったと、弦三は思った。

「おお、これは——」

その家の窓下で、弦三は不思議な音楽を耳にした。

それは正^ましく、この家の中から、しているのだった。

雑音のガラガラいう、あまり明^{めい}瞭^{りょう}でない音楽だったけれど、曲^{きょく}目は正^ましく、シ

ヨパンの「葬^{ヒューネラル・マーチ}送^送行^行進^進曲^曲」

嗚^あ呼^あ、葬^葬送^送曲^曲！

一体、誰^{だれ}が、いま時分^{そうそうこうしんきよく}「葬^葬送^送行^行進^進曲^曲」をやっているのだろう。

彼は痛^{いた}手^てを忘れて、窓の枠^{わく}につかまりながら、家の中を覗^{のぞ}きこんだ。

おお、そこには蠟^{ろう}燭^{そく}の灯^ほ影^{かげ}に照し出されて、一人の青年が倒れていた。その前には、小さいラジオ受信機^{ほう}が、ポツンと、座敷の真中に、抛^{ほう}り出されていた。

音楽は、紛^まれもなく、そのラジオ受信機から出ているのだった。

(J O A Kが、葬送曲をやっているのだろうか、物好きな！)

弦三は、むかむかとして、脚の痛みも忘れ壊れた窓の中へ、もぐり込んだ。

入って来た人の気配けはいに気付いたものか、死んでいると思つた青年が、白い眼を、すこし開いた。

そして呻うめくように言つた。

「君、あれを聞きましたか。アメリカの飛行機のり奴め、飛行機の上から、あの曲を放送しているのですよ。無論、故意にJ O A Kと同じ波長でネ。しやれた真似をするメリケン野郎……」

弦三は、それを聞くと、ムクムクツと起きあがつて、諸手もろてで受信機を頭上高くもちあげると、

「やッ！」

と壁ぎわに、叩きつけた。

「うぬ、空襲葬送曲まで、米国のお世話になるものか、いまに見ておれ、この空襲葬送曲は、熨斗のしをつけて、立派に米国へ、返してやるから……」

死にかかっている青年にも、それが通じたものか、燃えのこつた蠟燭の灯の蔭で、満足

そうに、ニツと笑った。

爆撃下の帝都

呻きつつ、喚きつつ、どツどツと流れてゆく真黒の、大群衆だった。

彼等は、大きなベルトの上にも降りでもしたように、同じ速さで、どツどツと、流れてゆくのだった。

「やつと、新宿だツ」

誰かが、隊の中から、叫んだ。

「甲州街道だツ。もつと早く歩けツ！」

「中野の電信隊を通りぬけるまでは、安心ならぬぞオ！」
 唖れた、空虚な叫喚が、暗闇の中に、ぶつかり合った。

群衆の半数を占める女達は、疲労と恐怖とで、なんにも口が利けないのだった。唯、母

親の背で、赤ン坊が、ヒイヒイと絶え入りそうな悲鳴を、あげていた。

この大群衆は、東京を逃げだしてゆく市民たちだった。爆弾と、毒瓦斯と、火災とに追われて、生命を助かりたいばかりに、めいめいの家を後に、逃げだしてゆく人々だった。

何万人という群が、あの広い新宿の大通にギツシリ^{つま}填つて、押しあい、へしあい、^{こうず}洪水の如く、流れ出てゆくのだった。すべては、徒歩の人間ばかりだった。円タクやトラツクの暴力をもつてしても、この真黒な人間の流れは、乗り切れなかった。無理に割りこんだ自動車もあつたが、たちまち、人波にもまれて、橋の上から、突き落されたり、米軍の爆弾が^{えぐ}抉りとつていった大^{おお}孔^{あな}の底に^お転^あがりおとされたりして、車も人も、滅茶滅茶になつた。

避難民の頭上には、姿は見えないが、絶えず、飛行機のプロペラの唸りがあつた。叩きつぶすような、機関銃の響が、聞えてくることもあつた。何が落下するのかわ、屋根の上あたりに、キラキラと火花が光つて、やがてバラバラと、^{つぶ}礫^{ぶて}のようなものが、避難民の頭上に降つてきた。

「ウ、ウ、グわーン、グわあーン」

大地が裂けるような物音が、あちらでも、こちらでもした。それは、ひっきりなしに、

米軍が投げおとす爆弾の、炸裂する響だった。その度ごとに、

「キヤーッ」

「こ、こ、こ、殺して呉れッ」

「あーれーッ」

と、此の世の声とは思えぬ恐ろしい悲鳴が聞えた。阿鼻叫喚とは、正に、その夜のとだつたろう。

その狂乱の巷の真ッ唯中に、これは、ちと風変りな会話をしている二人の男があつた。

「旦那、もし、旦那」 印 絆纏を着ていることが、紺の香で、それと判つた。

「ウ、なんだネ」

こつちは、頤髯がある——向う側のビルディングの窓硝子が照空灯の反射で、ピカリと閃いたので、その頤髯が見えた。

「いま、何時ごろでしょうかね」 熱ッぽい、調子外れの声が、きいた。

「そうだな——」 頤髯男は、どつと、ぶつかってくる避難民の一人を、ウンと突き戻すと、クルリと後を向いて、夜光時計の文字盤を眼鏡にスレスレに近づけた。

「ああ、午後九時だよ」

「九時ですかい」印裨纏しるしばんてんは、間のぬけた声をだした。

「今夜は、莫迦ばかに、夜が永いネ」

「ほほう」髻は、暗闇の中で、眼を丸くしたのだった。

「君は、ずいぶん、落付いてるナ」

「旦那は、どこへ逃げなさるんで……」

「僕かい？」髻は、湖のような静かな調子で云った。

「僕は、これから、研究室へ、出勤するんだ」

「冗談じゃありませんぜ、旦那」印裨纏が呆れたような声をだした。「夜更よふけの九時に、出

勤てのは、ありませんよ。それに、旦那の行くところはどちらです」

「神田かんだの駿河台するがだいだよ」

「へへえ、すると旦那は、お医者さまかネ」印裨纏は、駿河台に病院の多いのを思い出したのだった。

「ちがうよ」と、あつさり云った。「君は、どこへ逃げるのかい」

「あつしのことかネ。あつしは、逃げたりなんぞ、するものか。今夜は閑暇ひまになったもんだから、一つ市中へ出てみようと思うんで」

「ナニ、閑暇ひまだから、市中へ出る——」髯は、髯をつまんで、苦笑した。「それにしては、すこし、空中も、地上も騒がしいぞ」

その言葉を、裏書するように、ドーンと又一つ、火柱が立った。赤坂の方らしい。

「あつしは、平気ですよ」印絆纏が言った。「ねえ旦那、アメリカの飛行機が、攻めて来たかは知らねえが、東京の人間たちのこの慌あわて加減は、どうです。震災のときにも、ちよいと騒いだが、今度は、それに輪を十本も掛けたようなものだ。青年団が何です。消防隊が何です。交通整理も、在郷軍人会も、お巡りさんも、なっちやいない。第一、あつし達の献納けんのうした愛国号の働きも、一向無いと見えて、この爆弾の落っこちることア、どうです。防護隊というのがあるということだが、死人同様だアな、畜生」

髯は無言で、場所を出てゆこうとしたが、生憎あいにく、又ピカリと窓硝子が光ったので、印絆纏しばんてんに発見されてしまった。

「旦那、行くんなら、あつしも、お伴しますぜ。どうせ、今夜は、仕事が休みなんで」

「僕は、早く研究室へ行きたい——」

「あつしが力を貸しましょう。皆、向うから、こつちを向いてくるのに、先生とあつしだけ、逆に行くんだ。裏通をぬけてゆかなくちや、逆とても、進めませんぜ」

「君は、防毒マスクを持つてるかい」

「持つてませんよ、そんなものは」

「それでは、毒瓦斯がやってくると、やられちまうぞ。悪いことは云わぬ。その辺の、毒瓦斯避難所へ、隠れていたまえ。生命が無くなるぞ」

「毒瓦斯かネ」印絆纏は、やや悲観の声を出した。「先生、手拭てぬぐいでは駄目かネ」

「手拭じや駄目だ」

「手拭に、水を浸ひたしては、どうかネ」

「そんなことで、永持ちするものか」

「そいつは、弱ったな」

二人が、押問答をしているとき、新宿の大通りでは、突如として、修羅しゆらの巷ちまたが、演出された。

うわーッという群衆の喚わめき声こゑが、市外側の方に起った。それに交って、ピリピリと、警笛が鳴った。

「瓦斯弾が、落ちたぞオ」

「毒瓦斯がきたぞオ」

どツと、避難民の群は、崩れ立った。

避難路の前面に、瓦斯弾が落ちたらしく、群衆は悲鳴をあげて、吾勝ちに、引つ歸してきた。それが、市内の方から、押しよせてくる何万、何十万という、まだ瓦斯弾ガスだんの落ちたことを知らない後こうぞく、続の避難民と、たちまち正面衝突をした。老人や、女子供は、呀あツと
いう間もなく、押し倒され、その上を、何千人という人間が、踏み越えていった。瞬またたく間に、新宿の大通には、千四五百名の死骸が転った。その死骸は、どれもこれも、眼玉はポンポン飛び出し、肋骨ろっこつは折れ、肉と皮とは破れて、誰が誰やら判らない有様になった。すこしでも強い者、すこしでも運のいい者が、前に居る奴の背中を乗越え、頭を踏潰して、前へ出た。腰から下半身一帯は、遭難者の身体から逆ほとぼしり出た血潮で、ベトベトになった。まるで、赤ペンキを、一面に、なすりつけたような恐ろしい色いろどり彩だったが、暗黒の中の出来事とて、それに気をつく者が無かったのは、不幸中の幸さいわいだった。もしその血の池から匍もい出してきたような下半身が、お互いの目に映ったなら、幾万人の避難民は、あまりの浅間しさに、一時に錯乱してしまったことだろう。

そんなにまで一心になって、迫りくる毒瓦斯から脱れようと人々は藻掻もがいたが、一尺逃げると二尺押返えされ、一人を斃たおすと、二人が押し来、そのうちに、咽喉のあたりが、

チカチカ痛くなつた。

「瓦斯だツ」

と気のついたときには、既に遅かつた。魚の腸が腐つたような異臭が、身の周りに漂つているのだつた。胸の中は、灼鉄やきがねを突込まれたように痛み、それで咳せきが無暗むやみに出て、一層苦しかつた。胸から咽喉のあたりを締めつけられるような気がした。金魚のように、大きく口をパクパクやつたが、呼吸はますます苦しくなつた。頭がキリキリと痛くなり、眩暈めまいがしてきた。前の人間の肩をつかもうとするが、もう駄目だつた。地球が一と揺れゆれると、堅い大地が、イヤというほど腰骨にぶつかつた。全身が、木の箱か、なんかになつてしまつたような感じだつた。

「うー、痛ツ」

誰かが、太股を踏みつけた。

「うーむ」

腹の上を、靴で歩いている奴がいる。

「うわーッ」

胸の上で躍っているぞ。肋骨が折れる、折れる。

「ぎやーツ」

頭を足蹴あしげにされた。腹にも載のった。胸元むなもとを踏みつけては、駆けだしてゆく。あッ、口こ中うちゆうへ泥靴どろくつを……。

あとは、なにがなんだか判らなかつた。

パタリパタリと、群衆は、障子しょうじを倒すように、折重しよぢゆうなつて倒れていった。

街の片端から、メラメラと火の手があがった。濛々もうもうと淡黄色たんこうしよくを帯びた毒瓦斯が、

霧のように渦を巻いて、路上一杯に匍はつてゆく。死屍累々ししるいらい、酸鼻さんびを極きわめた街頭が、ボツと

赤く照しだされた。市民の鮮血せんけつに濡れた、アスファルト路面に、燃えあがる焰が、ギラ

ギラと映った。横丁よこちようから、バタバタと駈け出した一隊があつた。彼等は、いづれも、

防毒マスクを、頭の上から、スッポリ被かぶつていた。隊長らしいのが、高く手をあげると、

煙りの中に突進していった。後の者も、遅れずに、隊長のあとを追った。それは任務に忠実な、生き残りの青年団員でもあろうか。

近くに、サイレンの響がした。毒瓦斯の間からヒョククリ顔を出したのは、真赤な消防自動車だった。だが、車上には、運転手の外に、たった二人の消防手しか、残っていないか
つた。その中の一人は、マスクの上から、白い布で、いたいたしく、頭部をグルグル捲まき

にしていた。

消防自動車は、ヨロヨロよろめきながら、燃えあがる建物めがけて、ばくしん 轟進していった。二人の消防手は、いつの間にか、ほどう 舗道の消火栓の前で、力をあわせて、重い鉄蓋てつふたをあけようと試みていた。

郊外へ遁にげようと、洪水のように押出してきた、さしもの大群衆も、前面から襲つてきた毒瓦斯に捲きこまれて、ひとたまり 一溜もなく、たお 斃れてしまった。雑沓ざつとうの巷ちまたは、五分と経たぬ間に、ノーマンズ・ランド 無人郷ノーマンズ・ランドに變つてしまった。その荒涼こうりょうたる光景は、関東大震災の夜の比ではなかった。

大通りのところどころには、それでも、三人、五人と、異様な防毒マスクをは嵌めた人達が集結して、ゴソゴソやっていた。

「どんな人を、救護しますか」

おおとんぼ 大蜻蛉おおとんぼの化物のような感じのする防毒マスクが二つ倚より合あつて、辛からうじて、こんな意味を通じた。

「救護して、あとで戦闘ができそうな人を選べ！」

一方が、あかいろてちようちん 赤色手提灯あかいろてちようちんの薄い光の下に、手帖ひろを展ひげて、読みにくい文字を書いた。

他の一人が、それを見て、隊長らしいのをグングン向うへ引張っていった。彼は手真似で、隊長に話をした。

「その横丁の塵箱ごみばこの中から赤ン坊の泣声なみせがするが、助ける必要はないか？」

指すところゆびさに、真黒な大塵箱おおごみばこがあつて、明かに、赤ン坊の泣き声なみせがする。後から駈けつけた一人が、近づいて、イキナリ、塵箱の蓋を開けようとした。隊長らしい男が、駭いた風で、塵箱にかかった男の腕を捉えたとら。そして部員を促して、毒瓦斯の沈澱する向うの闇へ、前進していった。

（開けば、塵箱の中の赤ン坊は、直ぐ死ぬだろう。開かないのが、せめてもの情けだ）

そんなことを、隊長は、考えていた。

また一つ、崩れるような大きな爆発音がして、新宿駅の方が急に明るく火の手があがり、それが、水でも流したように、見る見るうちに四方八方へ拡がり、あたり近所が、一度に、メラメラと燃え出した。焼夷弾しょういだんが落ちたらしい。

焰に追われたような形で、最初の、マスクを被った髯男ひげおとこと、マスクの代りに手拭てぬぐい様のものようで顔の下半分を隠した例の印絆纏しるしばんてんの男とが兎のように跳ねながら、こつちへ、やってきた。

赤ン坊の泣き声がするという塵箱の傍まで来たときに、印絆纏の男は、急にガクリと、地上に膝をついた。

「く、く、苦しい。先生、く、く、薬を、もつと、もつと、入れて下さいい——」

印絆纏の男は、始めの元気を何処かへ振り落していた。彼は自分の猿轡さるぐつわを搔きむしるように外すと、髯男の方へ、片手を伸ばした。どうやら、髯男が、持ち合わせの漂白粉くふんと活性炭素かつせいたんそを利用して、応急のマスクを作つてやったのが、もう利かなくなつたらしい。

髯男は、マスクの硝子越しに、連れの顔を覗のぞきこんだ。

「呀あッ、マスク！ マスク！」

印絆纏の男は、何を見たのか、猛然と上半身を起こして、すぐ目の前に転ころがっている一個の死体にとびついた。彼は、死体の顔に嵌はまっている防毒マスクを、力まかせに、もぎとろうとした。

髯男は、あまりの浅間しさに、唯ただもう、あきれ顔に立っていた。

マスクは、死体から、ポクリと外れた。マスクの下には、若い男の、苦悶にみちた死顔があった。

印裨纏は、奪ったマスクに狂喜して、自分の顔に充てたがどうしたものか、その場に昏倒してしまった。髯男は、すぐさま駆けよって、防毒マスクを被せてやった。印裨纏は、その儘動かず、地上にながながと伸びていた。

髯男は、マスクを外された若い男の傍に近よった。その青年は、もう疾くに死んでいた。それは勿論、瓦斯中毒ではないことは一と目で判った。下半身が滅茶滅茶にやられているのだった。次第に燃えさかってくる一帯の火災は、無惨にも血と泥とにまみれた青年の腹部を、あかあかと照しだした。

死んだ青年は、背中に大きい包みを背負っていた。髯男は、それが、なんとなく気が懸りになったので、手早く解いてみた。その中から、ゴロリと転りだしたのは、真黒の、三つの防毒マスクだった。

「ほう、防毒マスク？」

髯男は、不審そうに、あたりを見廻した。

「ヒイヒイ」

そのとき、枯れきったような赤ン坊の泣き声があった。

「おお、このゴミ箱に、人間がいるッ！」

ゴトリゴトリ、大塵箱おおごみばこの内部で、赤ん坊にしては大きい物音がした。

イキナリ、箱の蓋が、ガタリと開いて、真黒の顔をした男がヌツと、上半身を出した。咄嗟とつさに、髯男は気がついて、死んだ青年が、背負っていたマスクの一つを、その男の頭に、スツポリ、被せてやった。それはまさしく時機に適したことだった。周りにはホスゲンの嫌いやな臭においが、いまだプンプンとしていた。

その男は、防毒マスクに気がついたのもあるうか、側かたわらを指さした。髯男が見ると、そこには、若い女が、彼女の子供でもあるうか、赤ん坊を、しっかりと胸に抱いていた。髯男は駭おどろいて、機はずを外さず、残りの二つのマスクをめいめいに被せてやった。その一つは、偶然にも、当歳の赤ん坊用のマスクだった。

「なんとという不思議な暗合だろう。親子三人に、親子三人用のマスク！」

髯男は、六ヶ敷むすい数学解法を発見でもしたかのように、驚きょう嘆たんした。

だが、この親子三人が、花川戸はなかわどの鼻緒問屋下田長造の長男、黄一きいちろう郎親子であり、マスクを背負っていた死青年は、同じく長造の三男にあたる弦三であり、弦三は死線を越えて、兄達に手製のマスクを届けようと、負傷の身を堪こたえてどうやら此の場所まで来たところを、自制のない群衆のため、無残にも踏み殺されたものであって、弦三は死んだが、そ

の願いは、極きわどいところで達せられたことを髯男が知ったなら、彼はどんな顔をして駭おどろいたことであろうか。いや、あとで、黄一郎親子が、マスクの裏に記された「弦げん三作」の銘めいに気がついたなら、どのように叱びつくり驚することだろうか。

しかし、そのときは、一切が夢中だった。黄一郎親子は、仮りの避難所である塵箱ごみばこの中に居たたまらず、一と思いに死ぬつもりで蓋を払ったところを、思いがけなく防毒マスクを被されたので「助かるらしい」と感じた外は他を顧かえりみる余裕もなかったのだった。しかも、背後には、恐ろしい火の手が迫っていた。黄一郎親子は、感謝すべき肉身の死骸の直ぐ傍に立っておりながらも、遂にそれと気付かず、蒸し焼きにされそうな苦痛から脱れるため、後をも見ずに逃げだした。

それに続いて、髯男が、やっと気がついたらしい印しるし絆纏ばんてんの男を、引立てながら、これも逃げだしたのだった。

「あつしは、恥はずかしい！」

死人の顔から、防毒マスクを奪いとりとした浅間しい行為を恥じるものの如く、印しるし絆纏ばんてん氏は、マスクの中で、幾度も、幾度も、苦吟くぎんを繰返した。

大通りの軒のきを境に、火焰と毒瓦斯とが、上下に入り乱れて、噛み合っていた。

咄！
売国奴

愛宕山の上では、暗黒の中に、高射砲が鳴りつづいていた。照空灯が、水色の暈光をサツと上空に抛げると、そこには、必ず敵機の機翼が光っていた。円の中に星が一つ――それが、米国空軍のマークだった。

「グわーン、グわーン」

高射砲の砲口から、杏色の火焰が、はッはッと息を吐いた。敵機は、クルリと、横転をすると、たちまち闇の中に、姿を消して行った。異様なプロペラの唸り声が、明らかに、耳に入った。

照空灯は、サツと、光を収めた。

「ラツ、タツ、タツ」

頭上に、物凄いエンジンの響が、襲いかかった。

「ラッ、タツ、タツ」こつちでも、高射機関銃が打ちだした。ばッ——。くらくらッとする鋭い光に照された。

「ど、ど、ど、ど、どーン」

ゆらゆらと、愛宕山あたこやまが揺いだ。

「少尉殿、少尉どのオ！」

誰かが、根こんを限りかぎに呼んでいる。

「オーイ」社殿しゃでんの脇わきで、元気な返事があつた。

「少尉殿。聴音機第一号と第三号とが破壊されましたッ」

「第四号の修理は出来たかッ」

「まだであります」

「早く修理して、第二号と一緒に働かせい」

「はいッ。第四号の修理を、急ぐであります」

兵は、バタバタと帰っていった。

（聴音機が、たった一台になつては、この山の任務も、これまでだな）

東山少尉は、暗闇の中に、唇を噛んだ。七台の聴音機は、六台まで壊れ、先刻の報告で

は、高射砲も三門やられ、のこるは二門になっていた。

兵員は？

もともと一小隊しか居なかった兵員は、四分の一にも足らぬ人数しか、残っていないなかった。

「ピリピリ。ピリピリ」

振笛しんてきが、けたたましく鳴り響いた。毒瓦斯どくばすが、また、やってきたらしい。

何か、喚わめく声こゑがする。胡椒こししょうくさ臭くさい、刺戟しげきせい性の瓦斯ガスが、微かすかに、鼻粘びねんまく膜まくを、擦くすぐった。

(塩化えんかピクリンか！)

東山少尉は、腰をひねると、防毒マスクをとりあげた。

「催涙さいない瓦斯いガスだぞオ、催涙瓦斯さいないガスだぞオ！」

瓦斯警けい戒かい哨しょうが、大声こゝろに、呶どな鳴なっていた。

東山少尉は、そのとき、何を思ったのか、ツと、二足、三足前方にすすんだ。

「どうも、おかしいぞ」

前方まっの、放送局ばうしゆの松林まつばやしあたりに、可也かな夥おびしい人数たが移動している様子ようすだった。演習

慣れした少尉の耳には、その雑然ざつぜんたる靴音くつおとが、ハッキリと判わかった。

どこの部隊だろうか？

司令部が寄越した援兵えんべいにしては、無警告だし、地方の師団から救援隊が来るとしても、おかしい。

軍隊ではないのかも知れない。

少尉は、背後に向つて、携帯用の懐中電灯を、斜め十字ななじゆうじに振った。それは下士官を呼ぶ信号だった。

コトコトと足音あしおとがして、軍曹の肩章けんしょうのある下士官が、少尉の側にピタリと身体を寄せた。

「吉奈軍曹よしなぐんそうであります」

軍曹は、マスクの中で、できる限りの声を張りあげたのが、少尉の耳に、やっと入った。「おう、吉奈軍曹。至急偵察を命ずる。放送局裏に、不可解ふかかいの部隊が集結しているぞ。突と入つ誰ゆい何いかしろ。友軍だったら、短銃ピストルを二発射て。怪しい奴だったら、三発うて。避難民だったら、四発だ。時節がら、怪しい奴かも知れぬから、臨機応変、細心に観察して、判つたら直ぐ知らせろッ」

軍曹は、わかつたと見えて、首を上下に振った。

「では、行け」

軍曹は、右手に、短銃ピストルを握ると、放送局舎目懸けて、驀進ばくしんした。

少尉は、直ちに、別の信号をして、兵員の急速集結を命じた。部署に最少限度の兵員を残して、あと二十名ばかりのものが集つてきた。彼等は、取敢えず、三門の機関銃を敷いた。

「少尉殿」耳の側で、伝令兵が叫んだ。

少尉は首を振つて、応答した。

「警備司令部との連絡電話が切断したであります」

「なにッ」少尉は、駭おどろいて、伝令兵の腕を握つた。「無線電話はどうかッ」

「無線電話にも、司令部の応答が、無いであります」

「無線も駄目か。はあて——」

途端に、前方で、銃声が響いた。

「パ、パ、パン！」

うむ、さては、怪しい者だ。

三発の短銃ピストルの音に、堤つつみをきられたように、向うの方に、銃声が上がった。バラバラと、

弾丸が飛んでくる！

丁度、そのとき、異様な響をたてて、一台の飛行機が、火焰に包まれ、錐揉みになつて、落下してきた。焼けのこつた機翼の尖端に、チラリと、真赤な日の丸が見えた、と思つた。次の瞬間には、轟然たる音響をあげて放送局裏の松林の真上に、機首をつつこんだ。パチパチと、物凄い音がして、松林が、ドツと燃えあがった。急に、あたりは、赤々と照し出された。そこは、吉奈軍曹が、突入したあたりだった。

見よ、局舎のまわりには、四五百名近い人間が集つていた。彼等の半分は、陸軍々人だった。のこりの半分は、背広だの、学生服だの、雑然たる服装をしていた。顔は、マスクで見えない。悉くの人間が、防毒マスクをしていた。軍隊と市民との混成隊とでも云いたいものであつた。

(なぜだ。なぜだッ)

東山少尉は、不思議な軍隊を向うに廻して不審をうつた。彼等は、こちらの陣地を認め、小銃を乱射し、手榴弾を投げつけた。小銃はどどいたが、手榴弾は、ずっと遠方で炸裂した。

軍隊を狙撃する軍隊なのである。そのような、不可解な軍隊を向うに廻して、東山少尉

の部下は、敵愾心を起す前に、悒鬱にならないわけにゆかなかつた。

向うの集団は、二手に別れた。一隊は、局舎の周囲を、グルグル廻つては、しきりに発砲していた。他の一隊は、地に匍い局舎を掩護物にして、ジリジリと、こつちを向いて進撃してきた。

少尉の部下は、イライラしてきたが、少尉は、まだ発砲の号令を出さなかつた。

(たしかに、おかしい。あの兵士等の、鉄冑の被り様は怪い。姿勢も、よろしくない。うん、これは、真正の軍隊ではない。それならば、よオしッ)

「撃ち方用意！」東山少尉は、マスクを取ると、大声に叫んだのだつた。「敵は陸軍々人の服装をしているが、不逞群衆の仮装であると認める。十分に撃ちまくれ、判つたな。

——左翼、中央の両隊の目標は、敵の散開線、右翼は横を見て前進、放送局の守備隊と連絡をとれい。撃ち方、始めッ」

猛烈な機関銃隊の射撃ぶりだつた。

敵は、最初のうちは、明かに、狼狽の色を見せたが、暫くすると、勢を盛返し、手榴弾を、ポンポンと擲げつけては、機関銃を、一門又一門と、破壊していった。

東山少尉は、振笛を吹いて、残りすくない部下を、非常召集した。だが、敵は多勢で、

服装に似ず、戦闘力は強かった。局舎守備隊も苦戦と見えて、連絡は、どう頑張っても、とれなかった。最後の任務を果たすために、飯坂上等兵と婁子一等兵を選抜して、東京警備司令部へ、火急の報告に出発させた。少尉が、腹部を射ちぬかれたのは、それから五分と経たない後だった。愛宕山高射砲隊は、ここに一兵も余さず、全滅を遂げてしまった。

放送局の守備隊も、それよりずっと前に、同じような悲惨な運命を辿っていた。局舎内には、警備司令部の塩原大尉を首脳として、司令部付の警報班員が数名いて、最後まで頑強に抵抗したが、数十倍に達する暴徒を向うに廻しては、勝てよう筈がなかった。軍人たちは、赤色灯点る局舎のあちらこちらに、射斃され、非戦闘員である機械係りや、アナウンサーは、不抵抗を表明した。こうして、J O A Kは、不可解な一隊に、占領されてしまったのだった。

しかし、どうしたものか、局舎のうちには、塩原参謀と、杉内アナウンサーの姿が見当らなかつた。死骸の中にも、無論のこと、二人を探しあてることが、出来なかつた。

「さあ、皆さん」陸軍の将校の服装をした男が、案外やさしい声で、第一演奏室の真中に立って叫んだ。「放送局の衆は、こつちへ並んで下さい。同志は、あつちの方へ固まっ

下さい」

彼は、軍帽を、床の上に抛なげ捨てた。房ふさ々ふさした頭髮が、軍人らしくもなく、ダラリと額にぶら下つた。それから彼は、胸の金きん釦ボタンを一つ一つ外していつて、上衣をスツポリ脱ぎすてた。軍服の下に現われたものは、焦茶色こげちやいろのルパシカだった。

「放送局の方かた々がたよ」彼は団長らしい落付を見せて、だが鋭く、呼びかけた。「われわれは、戦争否定主義の者です。戦争は、即時やめさせなければならぬ。そうでないと、世界の平和は来ない。それには、第一に、日本が武装を捨てることだ。私が今、軍服を脱いだように。——で皆さん、僕達同志は、そういう意味に於て、この機会に世に出たのである。雷門かみなりもんを中心とし、下谷したや、浅草あさくさ、本所ほんじよ、深川ふかがわの方面では、同志が三万人から出来た。貴方たちも、加盟して戴いたきたい。どうです！」

局長は、申合わせたように、黙っていた。

「返事がなければ」と、例の男が、たちまち恐ろしい面おもてかを輝かがしていつた。「主義反対と見なしますぞ。われわれが、道々執とつて来たと同じ方法により、主義反対の者の解消を要求する」

キラリと、ルパシカ男の手に、短銃ピストルが光った。

「……」

誰も彼もが、一せいに、両手をあげた。

「それなら、よろしい。はッはッはッ」

ルパシカ男は、短銃をポケットに収めた。

「では、戦争否定同盟の同志として、新たに命令する。大至急で、全国放送の用意をして呉れ給え」

局員は、たじたじとなった。

「帝都の空中襲撃が終るまで、放送するのは危険です。まるで電波で、帝都の在所を報らせるようなものですから」

「いいから、用意をし給え」

「それに軍部の命令……」

「もう一度、云って見給え。同盟の一員として判らなければ、物を云わせるぞ、君」
ルパシカ男は、頑強に反対する一局員の胸元に、短銃の口を、押しつけた。

局員は、歯を喰いしばって、大きく肯いた。

「承知しました。では皆、命令に従って、放送機のスイッチを入れよう」

局員は、団員に守られて、機械室の方へ出ていった。

「おや、まだマスクを掛けている人があるじゃないか」団長はギョロリと、眼を光らせた。
「もう瓦斯はないから、脱ぎ給え」

団員は、てんでに、マスクを脱いだ。

すると、そこには、驚くべき新事実が曝露したのだった。団員の中には、多数の婦人と、中学生女学生も交っていた。全体として見ても、団員は三十歳どまりの若い者ばかりだった。その中には、互に識り合つた者もいた。だが、彼等は、語ることを、団長達の前に、さしひかえなければならなかつた。

更に、驚くべきことは、この一団のうちに、花川戸の鼻緒問屋下田長造の妹娘の紅子と、末子の中学生、素六とが、一隅に慄えていることだった。

そもそも、あの善良なる素六少年と、モダン娘の紅子とは、一体どうした訳で、こんな一団に加わっているのだろうか。

それについては、空襲下の下町方面の情況について、少しばかり述べて置かねばならない。

G・P・Uの侵入

下町方面は、古くから、空襲教練が、たいへん行届いている模範的の区域だった。たびたびの防空演習に、町の人々は、いつも総出で参加した。すこし芝居好きのところは、あつたにしても、あれほど熱心に、灯火管制の用意に黒色電灯カバーを作つたり、押入れを改造して、防毒室を設けたり、配電所に特別のスイッチを設けたりして、骨身を惜まないのは、感心にたえなかつた。

それが、あの本物の空襲下に曝されて、どこの区域よりも二三倍がた、混乱ぶりのひどかつたことは、まことに意外の出来ごとだつた。そのような大混乱の元は、なんであるかというと第一に、いつもの演習は、少壮気鋭の在郷軍人会の手で演じていたのが、本物の空襲のときには、その在郷軍人たちの殆んど全部が、召集されて、某国へ出征していたために、残っている連中だけでは、どうもうまく行かなかつたこと。第二には、しつかりした信念がなくて、流言蜚語に、うまうまと捲きこまれ秩序が立たなかつたこと。こ

の二つの原因が混乱の渦巻を作ってしまった。

鼻緒問屋、下田長造の三男で、防毒マスクの研究家だった弦三が、自作のマスクを背負って、新宿附近に住む長兄黄一郎親子に届けるために、花川戸を出たのは、敵の飛行隊が帝都上空に達するほんの直前のことだった。

弦三は、なんのことはない、死の一步を踏みだしたようなものだった。まず駈けつけた地下鉄の中で、彼は、避難群衆に、不穩ふおんの気が、みなぎっていることを、逸いちはや早く見てとったのだった。弦三の乗りこんだ地下電車が、構内を離れて間もなく、不穩分子の振舞ふるまいは、露骨ろこつになって行つた。

兼ねて、手筈ができていたものと見え、地下鉄の駅長は、避難してくる群衆を、無制限に地下構内へ入れすぎるといふ、極くつまらない理窟りくつをもつて、群衆の袋ふくろ叩たたきに合つたのだった。暴徒の一味は、群衆が、興奮した様子につけこんで、今度は、切符売場を襲撃したのであった。金庫は、みるみる破壊され、銀貨や紙幣が、バラバラと撒き散された。群衆は恐さも忘れて、慾よくしん心まるだしに、金庫を目懸けて突進した。五十銭銀貨を一枚でも、掌てのひらの中につかんだものは、強奪の快感の捕虜となつて、ますます興奮を、つのらせて行つた。五円紙幣を手に入れたものは、顔までが、悪魔の弟子のようになった。獸心じゅうしん

が、檻を破り、ムラムラと、飛びだした。一味の者は、細心の注意をもって、機会を見ては、巧みに、煽動した。居合わせた婦女子は、駭きのあまりに、失心する者が多かった。正義人道を口にするものが、四五人もいて頑張れば、群衆の冷静さを、幾分とりもどせたらうと思われたが、誰もが呆然自失して、適当な処置を誤ったのだった。一味の計画は、すっかり、凶に当たった。

「××人が、本当に暴れだしたぞオ」

「東京市民は、愚図愚図していると、毒瓦斯で、全滅するぞ。兵營に、防毒マスクが、沢山貯蔵されているから、押駆けるッ」

「デパートを襲撃して、吾等の払った利益をとりかえせ」

「国防力が無いのなら、戦争を中止しろッ」

「放送局を占領しろッ」

などと、さまざまな、不穩指令が、街頭に流布された。

警官隊も、青年団も、敵機の帝都爆撃にばかり、注意力が向いていて、暴徒が芽をだしはじめたときに、早速、戒りすることに気がつかなかつた。

暴徒一味の煽動は、さまざまの好餌を、市民の中にひけらかし、善良な人達までが、羊

の皮を被った狼に騙だまされて、襲撃団の中に参加したのは、物事が間違う頃合いにも程がある、後になって慨なげかれたところだった。

若い青年男女は、鮎あゆのとも釣のようなわけで、深い意味もわからず、その団体に暴力を以て加盟させられた。一味幹事の統制ぶりは、実に美事であった。いろいろな別働隊が組織され、各隊は迅速しんそくに、行動に移った。

長造の妹娘の紅子べにこと、末ツ子の素六そろくとは同じような手で、参加を強しいられた。

長造とお妻が、涙をもつて止めたが、それは何の役にも立たなかった。馴染なじみの誰々さんも入っている——たったそれだけのことで、若い人達の参加を決心させるに充分だった。

「放送局を襲撃しろッ」

ハッキリと、加盟団の指令が出たときには若い人達は、やっと気がついた。だが、それは、もう遅かった。幹部の手には、物々しい武器が握られていた。反抗したが最後、その兇器が物を云うことは、いくら若い連中にもよく解った。

紅子と素六とは、恐怖と反省とに責められながら、放送室の一隅に、突立っていた。

放送局襲撃隊の指導者は、鬼川おにかわ壮太そうたといった。

「放送準備は、まだ出来ないのかネ」鬼川は団員の一人に訊いた。

「もう直ぐです」団員は答えた。「いま、すいれいかん水冷管に冷却水を送り始めました」

「電気は、来ているのですか」

「いなわしろすいでん猪苗代水電の送電系統は、すっかり同志の手に保持されています。万事オーケーです」

指導者鬼川は、満足そうにうなず肯いた。

「放送準備が出来ましたよ」

奥の方から、これも電気係りの団員が、大声で報せて来た。

「よし。では、始めよう」

鬼川は、チラリと時計を出して、云った。

「午後九時四十分か。保狸ほりぐち口君、手筈どおり全国アナウンスをして呉くれ給たまえ」

保狸口と呼ばれた団員は、ニヤニヤと笑うと、ポケットから細く折った半紙をとり出して、マイクロフォンの前に立った。

「J、O、A、K」

素六や紅子たちは、その声を、何処かで、聞き覚えのある声だと思った。

「大変お待たせをいたしました」保狸口は云うのだった。「唯今やっと、放送許可が出ましたような次第でございます」

素六は、やっと、気がついた。保狸口という男は、地声か、声帯模写かはしらないが、声だけ聞いていると、なんのことはない、放送局の杉内アウンサーと、区別のつかない程似た声音をもつて居り、その音の抑揚に至つては、よくも真似たものだど、感心させられた。この放送を聞いたものは、J O A Kが例の調子で、放送をやっているものと、簡単に信じるだろうと思われた。

それにしても、保狸口は、これから一体何事を喋ろうというのだ。

「第一に、申し上げますことは、皆さん、御安心下さい。マニラ飛行聯隊の帝都空襲は、一と先ず一段落をつけました。敵機はだんだんと、帝都を後にして、引揚げてゆく模様であります。以上」

強制団員の中には、この真面な放送に、大満足の意を表したもののさえあつた。だが、敵機は、本当に、帝都の上空から、引揚げていったのだろうか？

「次に、某筋からの命令が参りましたから、お伝えします。東京地方は、警戒解除を命ず。東京警備司令官、別府九州造。繰り返して読みます、エエと——」

素六は、窓際に立っていたので、不用意に開け放たれた窓から、帝都の空を眺めることが出来た。その真暗な空には、今も尚、照空灯が、青白い光芒を、縦横無尽に、うちふつ

ていた。高射砲の砲声さえ、別に衰おとろえたとは思われなかった。なんだか、怪しい放送である。

「次に、灯火を、早くお点け下さいという命令。目下帝都内は暗黒のために、大混乱にありまして、非常に危険でございますので、敵機空襲も片づきましたることでありますからして、市民諸君は、大至急に電——」

「騙だまされてはいけない、市民諸君、これは偽にせ放送ほうそうだッ」

大きな声で、保狸口のアナウンスを圧倒した者があつた。

ズドーン。

銃声一発。

ドタリと、マイクロフォンの前に仆たおれたのは、素六だつた。

指導者鬼川おにかわの手にしたピストルの銃口からは、紫煙しえんが静かに舞いあがっていた。

「呀あッ、素六そろく、素六。しつかり、おしよ。素六ちゃん」

鬼川は、断髪女が、仆れた少年を抱いて、大声で呼び戻しているのを見ると、又もや、ズドンと、第二発目を、紅子に向けた。しかし、それは手許てもとが狂って当らなかつた。

死んだのかと思つた素六が、ムクムクと起き上つた。

「電灯をつけては、いけない。まだ敵の飛行機は——」

そこまで云うと、素六の頭部は、ガンとして、何にも聞こえなくなった。保狸口が飛出して、素六を殴りつけたのだった。

そのとき、突然、局内の電灯が、一時に消えた。

「同志、配電盤を、配電盤を……」鬼川の叫ぶ声がした。

携帯電灯の薄明りで、室内が、あらた改めて眺めまわされたとき、素六の身体も、紅子の姿も見当らなかつた。それに代つて、大きな凶体の男が、長々と伸びていた。その額からは、絹糸をひっぱり出したような血のあとが認められた。

「誰だッ」

「やッ。保狸口がやられたッ」

「保狸口が、やられたかッ。折角、せっかくアウンサーの換玉に、かえだまひっばつて来たのに……」

同志は、口々に、わめ喚いた。

「射つた奴を探せ！」

「同志の顔を、一々調べて見ろ！」

そこへ、ドタドタと駆けこんで来たものがあつた。

「市内に、電灯が点きはじめたぞ。僕たちの放送は、うまく行ったらしい。同志、出て来て見ろ！」

ワツというと、誰も彼もが、表へとびだした。

なるほど、今まで暗澹あんたんとしていた空間に、あちこちと、馴染なじみのある電灯が、輝きだした。電灯が点いてみると、全市を焦土しょうどと化してしまっただかと思われた火災も案外、局部に限られていることが、判った。

「ラジオが、聞えたぞ」

「電灯も点いたぞ」

市民は、聞きなれたアナウンサー（だと思つた）の声を聞き、母の懐ふところのようになつかしい電灯の光を浴びて俄かに元気をとりかえたのだつた。

愛宕山あたごやまの上では、暴徒の指導者、鬼川が、一人で恐悦きょうえつがっていた。

「見ろ、市民は、うまうま一杯、かつがれてしまつたじゃないか。これで、大東京の輪りんか廓くわくが、はつきり浮び上るのだ。米国空軍の目標は、これで充分だ。あとは、約束の賞金しょうきんにありつく許ばかり。では、今のうちに、こつそり、失敬するでしょう。それにしても、米軍の攻撃は、莫迦ばかに、ゆつくりしているじゃないか」

彼は、裏口へ遁げようとしては、不審の面持で耳を澄した。だが、彼の予期するような爆弾投下の爆音は、一向に、響いてこなかった。

「おかしいぞ。どうしたのだろう」

そのとき、轟然たる爆声^{ごうぜん}が起った。一発又一発。それに交って、カタカタという機関銃の響きだった。

「やったナ。だが、爆弾と、すこし音が違うようだ」

彼は、逃げ腰になった。

「鬼川君は、いないですか、鬼川君」

誰かが、向うの放送室で呼んでいる。返事をしようか、どうしようか。

「……」

「鬼川君、軍隊だツ。救援隊らしいのが、山を登って来ますぞ。早く指揮をして下さい。

鬼川くーン」

鬼川は、物も言わずに、裏口へ急いだ。

「やッ」

カーテンの蔭から、太い逞しい腕^{たくま}がニユーツと出た。鬼川は横腹をおさえて、もろくも、

転倒した。

カーテンの蔭から、ルパシカ姿の巨漢が現れた。

「中佐どの、片付けました」

彼は、カーテンの蔭に言葉をかけた。

カーテンが、揺れて、思いがけなく、司令部の、湯河原中佐が、顔を出した。

「塩原参謀」と中佐は、呼んだ。ルパシカ男は、いつの間にか局舎から姿を消していた塩原参謀の仮装だった。

「この男を、吾輩に預けてくれんか」

「おまかせいたします」参謀は、直立して言った。「ですが、中佐殿は、これから、どうされます」

「吾輩は、司令部の穴あなぐら倉へ、こいつを隠して置こうと思う。司令官に報告しないつもりじゃから、かんきん監禁の点は、君だけの胸に畳んで置いてくれ給え」

「しかし、斯かくの如き重大犯人を、司令官に報告しないことはどうでありましょうか」
「吾輩を信じて呉れ。二十四時間後には、この事件について、必ず君に報告するから」

「判りました。では、急速に、御引取下さい」中佐は、大きく背うなずくと、鬼川の身体を肩に

担いで、カーテンの蔭に、かくれてしまった。

そのころ、放送局の表口では、暴徒の一団と、警備軍の救援隊とが、物凄い白兵戦^{はくへいせん}を展開していた。

全市に、点灯を命令して、米軍に帝都爆撃の目標を与えろという放送局襲撃の第一目標が、どういう手違いか、すっかり外れ、生き残りの団員は、戦闘の間々に、爆弾の炸裂^{さくれつ}音を聞きたいものだ^{おん}と焦^{あせ}ったが、その期待は、空しく消えてしまった。

彼等の地位は、だんだんと悪くなつて、元氣は氷のように融^とけていった。

折角うまくやったつもり^{かえ}の放送局占領が、筋書どおりの効目がなく、いや反^{かえ}つて逆の結果となり、東京市民を恐怖のドン底へ追いやる代りに、ラジオと光とは、市民たちの元氣を恢復させるに役立ったのだった。同志は、それにやっと気がつく^{たお}と急に、パタパタと斃^{たお}れる者が殖^ふえてきた。

放送局奪^{だつ}還^{かん}は、もう間もないことであつた。

某地域の地下街を占めた警備司令部では、別府司令官をはじめ、兵員一同が、血走った眼を、ギラギラさせて、刻々に報告されてくる戦況に、憂色を増していった。

「立川飛行聯隊では、大分脾肉ひにくの嘆たんに、たえかねているようでは、ありませんか」
 一人の参謀が、有馬参謀長に、私語しごした。

「九六式の戦闘隊のことだろう」参謀長は、さもあろうという顔付をした。「だが、司令官閣下は、出動には大反対じゃ」

「海軍の追浜おっぱま飛行隊でも、同じような不満があるらしいですな」

とうとう「不満」という言葉を使つて、参謀は有馬参謀長に、暗あんに警告を発した。

「うん、判つてる」参謀長は、言葉をのんだ。「だが、気をつけて、口をきけよ」

「はッ」参謀は、肅然しゆくぜんとして、挙手きよしゆの礼をした。(参謀長も、飛行隊の出動命令に、不満を持つていられるんじや)と思つた。

「司令官の御心配は、近くに起る太平洋方面からの襲撃を顧慮こりよされてのことじゃ」

「それでもありましよう。しかし、快速をもつた敵機に対して、性能ともに劣つた九二式や九三式で、太刀打ちたちうちが出来る道理がありません。帝都の撃滅は、予想以外に深刻であります」

「……」参謀長は、答えなかつた。

伝令が、パタパタと駈けてきた。

「川口町防空隊からの報告でありますッ」

「閣下」有馬参謀長は、司令官の前に直立した。「川口町からの報告が入りました。読みあげさせましょうか」

「いや、よろしい」司令官は、不機嫌に、頭を左右に振った。

「その報告書を、こっちへ、寄越し給え」將軍は、ひったくるようにして、報告の紙片を、手にとった。

「敵国航空軍と覚しき約十数機よりなる飛行隊は、本町上空を一万メートルの高度をとつて、午後九時五十分、北北西に向け飛行中なり。以上。川口町防空隊長、網島少尉」司令官は、紙片を、掌のうちに握り潰すとポイと屑籠の中に、投げ入れた。

「閣下」参謀長が、やや気色ぼんで、問いかけた。「唯今の報告は、なんでありましたか」
「出鱈目じや」司令官は、吐き出すように云った。「それより君は、部下を、ちと静かにさせては、どうか」

「はッ」参謀長は、静かに挙手の礼をすると、元の卓子へ帰ってきた。

(閣下は、どうかして居られる)

参謀長は、湯河原高級副官の姿を探しもとめたが、室内には見えなかった。

(副官までが、どうかしているナ)

ムラムラと湧きあがってくる焦燥感しょうそうかんを、グツと抑えつけ、傍かたわらを見ると、年若い参謀は、満面しゆを朱にして、拳を握っていた。参謀長は、はッと気を取直した。

「草津参謀」彼は一人の参謀に呼びかけた。

「帝都の火災は、どういう状況にあるか」

「はいッ」参謀は、大東京区域図をバリバリ音させて、その上に、太い指を動かした。

「淀橋区よどばし、四谷区よつやは、大半焼け尽しました。品川区しながわ、荏原区えばらは、目下延焼もつかえんしやうちゆう中で

あります。下町したまち方面は、むしろ、小康状態に入りました」

「放送局との連絡は、ついたらどうか」

「無線連絡が、もう間もなく恢復するではありませんよう」

「空中襲撃の解除警報を出す用意は、出来ているな」

「はいッ。すこし、困難はありますが、やれる見込みです」

「では、閣下に、お願いして見よう」

参謀長は、又立って、司令官の前に出た。

「閣下、解除警報を出したいと考えます」

「解除警報！」司令官は、大きく眼を開いた。「まだ早すぎる。確乎かっこたる報告が集らぬではないか」

「閣下。例の怪放送者は、すでに先手を打って、敵機の退散をアナウンスして居ります。況いわんや、唯今、川口町の報告によれば、敵軍は、明かに、機首を他へ向けています」

「君は、今の報告を盗み見たかッ」

「閣下、盗み見たとは、残念な仰おほせです。参謀長は、あらゆる報告に、一応目をとおす職責しやくせきがございます」

「ウム」

「此この上は、速かに解除警報の御許可を、お与え下さい。市民は、軍部の、正しいアナウンスを、渴望かつぼうして居ります。一刻おけると、市民の混乱は拡大いたします」

「敵国空軍が、川口の上空から、引返して来たとしたら、どうするかッ」

「そのときは、又、警報を出します。しかし以前の監視哨の報告三種を合わせて、敵軍は日本海方面に引揚を開始していることは、明瞭であります」

「確証がつかないのに、司令官として、解除警報を出すわけにはゆかぬ」

「どうあつても？」

「くだい、参謀長！」

俄然、司令部の広間は、殺気立った。

将校連は、二派に別れて、司令官と、参謀長の背後に、睨みあつた。

何という不祥な出来ごとだろう。帝都の運命が累卵の危きにあるのに、その生命線
を握る警備司令部に、この醜い争闘が起るとは。

流石に、教養のある将校たちのこととて、無暗に、拳銃を擬したり、軍刀をひらめかし
たりはしなかつたが、司令官か、参謀長かの一言さえあれば、刹那に、司令部の広間には、
流血の大惨事が、捲きおこるといふ、非常に緊迫した重大な危機に、立至つた。

司令官の顔は、紙のように蒼ざめて、唇がワナワナと震えて来た。

参謀長は、満面朱を塗つたように怒張し、その爆発を、紙一枚手前で、堪えている
ようであつた。

コツ、コツ。

扉にノックの響があつた。

室内の、息づまるような緊張が、爆発の直前に、ちよつと緩んだという形であつた。
やがて、扉は、静かに開いた。

高級副官、湯河原中佐の円い顔が、あらわれた。この室内の光景を見ると、駭くかと思いの外、ニヤリと、薄ら笑いを、口辺に浮べたのだった。

中佐は、ツカツカと司令官の傍に近づいた。

「申上げます。唯今、御面会人で、ございます」

「面会人。誰だツ」

「はッ、唯今、御案内いたします」副官は、入口の方を向いて大声を張上げた。「閣下、どうか、おはいり下さい」

扉の蔭から、閣下と呼ばれた人物の、カーキ色の軍服が、チラリと見えた。ガチャリと佩剣が鳴って、一人の将校が、全身をヌツと現わした。

「呀ッ」

「おお！」人々は、呆然と、其の場に、立竦んだ。

そこへ現われた人物は、紛れもなく、別府司令官であった。

ところが、別府司令官は、直前まで、参謀長を、激しい語調で呶鳴っていた筈だった。おお、これはどうしたことだろう。参謀長の前には、たしかに、先刻から立っている別府司令官が居られるのだった。

二人の、別府司令官。

同じ服装の、同じ顔の、司令官。

どつちかが、贗者にせものであろうと思われる。

二人の司令官の、相違した点は、湯河原中佐の案内した司令官は、軍帽の下から、頭部に捲いた、白い繻帯ほうたいが、チラリと見えている点だった。

「両手を、おあげ願いたい」

中佐は、室内の司令官の背後に、軍用拳銃の銃口を、さしつけた。

「売国奴ばいこくど！」中佐の傍かたわらにいた将校が、イヤというほど中佐の横面を張り付たおした。

室内の司令官は、サツと身を、壁際に移した。

「中佐を、保護せいで。向う奴むかは、射殺してよしッ」参謀長は、若い参謀に、早口で命令した。

三人の将校と、二人の下士官とが、室内の司令官を、守った。

若い参謀たちは、勇敢に、彼等に、飛びかかっていった。咄嗟とつさの場合とて、ピストルよりも、肉弾が物を言った。

大格闘の末、五人の者は、捉えとらられた。しかし肝かんじん心の贗司令官の姿は、いつの間にか

見えなくなつた。

「その壁が、怪しいぞ」

廣司令官は、見ているうちに、その壁の中に、吸いこまれてしまつたのだ。コツコツと叩いてみると、それは、たしかに空虚であつた。

司令部の人達が、誰も知らない脱け孔を発見するまでには、やや時間が、かかつた。追跡して行つたものも、遂に得るところがなかつた。

頭部に、白い縹帯を捲いた本物の別府司令官は、静かに、腰を下ろした。

「閣下」参謀長が、厳肅な表情をして云つた。「どうなされましたのですかッ」

「うん、心配をさせたのう。夕方、放送局から帰り、この地下室へ到着してから、洗面所へ、手を洗いに行つたところを、やつつけられた。なつていないナ。別府にも、焼きが、まわつたようじゃ」

「相手は、何者でありますか」参謀長は、畳みこむように、訊いた。

「湯河原中佐に、聞け。G・P・Uの仕業じゃということじゃ」

「なに、G・P・U!」

G・P・Uというのは、労農ロシアの警察隊のことだつた。その峻辣なる直接行動

と、驚歎すべき探訪組織たんぼうしきをもつて有名な特務機関だった。日本国内に、G・P・Uゲー・ペー・ウーが、潜入しているという噂うわさが、前々からあつたけれど、まさか警備司令部までにその魔手ましゅが伸びていようとは、何人なんびとも想像できないところだった。

そこへ、伝令兵が、重要な二通の暗合報告を持ってきて、司令官と参謀長の間へ、置いていった。

「いよいよ、筋書どおりですな」参謀長が、低く呻った。

「うん、早く読あげて、一同に聞かせてやれ」

「はッ」

参謀長は、すつかり、冷静さをとり戻して幕僚ぼくりょうを集めた。

「労農ロシア軍は、北満及び朝鮮の国境に於て日本守備隊へ発砲した。吾が守備隊は、直ただちに応戦し、敵を撃退中である」

参謀たちは、めいめい肯うなずき合つた。

「次に、アラスカ飛行聯隊は、午後十時、北海道、根室湾ねむろわんを、占領した。聯隊は、更に、津軽海峡つがるかいきょうを征服し、青森県大湊要港おおみなとようこうを占拠せんきよせんものと、機会うかがを窺うかがっている模様である」

(ああ、内地までも、敵機の蹂躪じゆうりんに合うのか!) 参謀たちは、唇を噛んだ。

「もう一つ、帝都を襲撃したマニラ飛行第四聯隊は、十七機を集結し、浦塩ウラジオーストック斯徳に向
け、引揚中である」

一座は、興奮を越えて、水を打ったように静まり反かえった。

米国の太平洋、大西洋両艦隊は、圧倒的な大航空軍を、航空母艦に積みこんで、今や、
舳艫じくろあいふく相含んで、布哇ハワイを出航し、我が領海に近づきつつある。

露国ろこくは、五ヶ年計画完成し、世界第一の大陸軍を擁ようして、黒竜江こくりゅうこうを涉り、日本の生
命線満洲一帯を脅かそうとしている。

第一次の帝都空襲に、予想以上の大痛手おおいたてをうけた祖国日本は近く第二次の大空襲を、
太平洋と亜細亞アジア大陸両方面から、挟み打ちはさの形で受けようとしている。既に満身創痍まんしんそういの
観ある日本帝国は、果して跳ねかえすだけの力があるだろうか。

建国二千六百年の大日本の運命は、死か、はたまた生か!

それは兎も角とかくとして、今、帝都の空は、漸く薄明りがさして来た。もう一時間と経たな
いうちに、空襲によって風貌ふうぼうを一変した重病者「大東京」のむごたらしい姿が、曝ば
露くろしようとしている。白光はっこうの下に、その惨状さんじょうを正視せいしし得る市民は、何人あることで

あろうか。

あかつきていさつ
暁の偵察

昭和十×年五月十五日の夜、帝都は、米^{べいこくぐん}国軍のために、爆撃さる——
と、日本国民は、建国二千六百年の、光輝^{こうき}ある国史^{こくし}の上に、これはまた決して書きたくはない文句を、血と涙と泥を捏^こねあわせて、記^{しる}さねばならなかつた。

かくて、カレンダーは、ポロリと一枚の日附を落とす、やがて、東の空が、だんだんと白みがかつてきた。あまりにも悽^{せい}慘^{さん}なる暁^{あけ}だつた。生き残つた帝都市民にとって、それは残酷以外の何物でもない夜明けだつた。

一夜のうちに、さしも豪華を誇つていたモダーン銀座の高層建築物は、跡かたもなく姿を消し、そのあとには、赭^{あかちや}茶けた焼^{しょうど}土と、崩れかかった壁と、どこの誰とも判らぬ屍^し体^{たい}とが、到るところに見出された。その間に、彷徨^{さまよ}う市民たちは、たった一晩のうちに、

生色せいしよくを喪うしない、どれを見ても、まるで墓石はかいしの下から出て来たような顔色をしていた。

風が出てきて、余燼よじんがスーと横に長引くと、異臭いしゅうの籠かごった白い煙が、意地わるく避難民の行手を塞ふさいで、その度に、彼等は、また毒瓦斯どくガスが来たのかと思つて、狼狽ろうばいした。

市街の、あちこちには、真黒の太い煙が、モクモクとあがり、いつ消えるとも判らぬ火災が辻から辻へと、燃え拡がつていた。

射墜うちおとされた敵機の周囲には、激しい怒いかりに燃えあがつた市民が蝟集いしゅうして、プロペラを折り、機翼きよくを裂き、それにも慄あきたらず、機の下敷したじきになつてゐる搭乗とうじょう将校しょうこうの死体を引張りだすと、ワツと喚わめいて、打ち懸うかつた。「死屍ししを辱はずかしめず」という諺ことわざを忘れたわけではなかつたが、非戦闘員である彼等市民の上に加えられた昨夜さくやらい来の、米国空軍の暴虐振り対して、どうにも我慢がでなかつたのだつた。

戒嚴かいげん令下れいかに、銃剣じゆけんを握にぎつて立つ、歩哨ほしやうたちも、横を向き、黙々として、声を発しなかつた。彼等にも、生死のほどが判らない親や、兄弟や、妻子があつたのだ。

次第に晴れあがつてくる空に、プロペラの音が聞えてきた。素破すわこそと、見上げる市民の瞳に、機翼の長い偵察飛行機の姿がうつつた。

「なんだ、陸軍機か」

彼等は、嘔んで吐き出すように、云った。この帝都の惨状を、振りかえつては、あまりにも無力だった帝都の空の護りへの落胆を、その飛行隊の機影に向つて抛げつけたのだつた。

だが、しかし、その偵察機の上にも、同じ悲憤に、唇を嘔みしめる軍人たちが、強いて冷静を装つて、方向舵を操つていた。

「おい、浅川曹長！」操縦士の耳へ、将校の太い声が、響いた。

「はい。何でありますか」曹長は、左手で、胸のところを釣つてある伝声管をとりあげると、やや湿っぽい声で返事をした。

「機首を左へ曲げ、隅田川に沿つて、本所浅草の上空へやれ。高度は、もつと下げられぬか」そう云つたのは、警備司令部付の、塩原参謀だった。

「はいッ、では、もう二百メートル、下降いたしましう」

浅川曹長は、左手を頭上に高くあげると、僚機の注目を促し、それから腕を左水平に倒すと、手首を二三度振つた。途端に、彼の乗っている司令機は、下げ舵をとつて、静かに機首を左へ廻したのだつた。あとに随う二機も、グツと旋回を始めたらしく、プロペラが重苦しい呻り声をあげているのが、聞えた。

「これは、ますます、ひどいな」そう云つたのは、側の湯河原中佐だった。

「敵の計画では、焼夷弾と毒瓦斯弾とで一氣に、帝都を撲滅するつもりだったらしいですな。爆弾は、割に少ない。弾痕と被害程度とを比較して、判ります」塩原参謀は、指先で、コツコツと窓硝子をつついた。

「なにしろ、帝都の市民は、今日になつて、防空問題に、目醒めたことだろうが、こんなになつては、もう既に遅い。彼等は、飛行機の飛んでくるお祭りさわぎの防空演習は、大好きだったが、防毒演習とか、避難演習のように、地味なことは、嫌いだった。満洲事變や上海事變の、真唯中こそ、高射砲や、愛国号の献金をしたが、半歳、一年と、月日が経つに従つて、興奮から醒めてきた。帝都の防空施設は、不徹底のままに、抛り出されてあつた。雨が降れば、人間は傘をさして、濡れるのを防ぐ。が、帝都には、爆弾の雨が降つてこようというのに、これを遮る雨具一つ、備わっていないのだ……」湯河原中佐は、慨然として、腕を拱いた。

「そう云えば、防空演習にしても、遺憾な点が多かったですね。東京の小さい区だけの、防空演習だつて、なかなか、やるというところまで漕ぎつけるのに骨が折れた。市川とか、桐生とか、前橋とかいう小さい町までもが、苦しい町費をさいて、一と通りは、

防空演習をやっているのに、大東京という帝都が、纏まとった防空演習を、唯の一度もやっ
ていなかったということは、何という遺憾、何という恥ちじやく辱はやくだったでしよう」

「貴君きくんの云うとおりだ。もしも、帝都として防空演習を充分にやって置いたら、昨夜ゆうべのよ
うな空襲をうけても、あれほどの大事にはならなかつたろう。火災も、もつと少かつたろ
う。徒いたずらに、圧おし合あいへし合あい、郊外へ逃げ出すこともなかつたろうから、人命じんめいの犠牲も、
ずつと少かつたろう。流言蜚語りゆうげんひごに迷わされて浅間あさましい行動をする人も、真逆まさか、あれほど
多くはなかつたろう」

湯河原中佐と、塩原参謀は、偵察機上から、思わず悲憤ひふんの泪なみだを流したことだった。

「浅草あさくさの上空です」浅川曹長が、伝声管から注意した。

「うん、浅川曹長。お前の家は、浅草にあると云ったな」中佐が、不図ふと気がついて云った。
「そうであります」曹長の声は、すこし慄ふるえを帯びていた。「雷かみなりもん門附近の、花川戸はなかわど
というところでありませう」

「どうだ、お前の家の辺あたりは、見えるかね」

中佐は、胸にかけていたプリズム双眼鏡を外はずして、曹長の方へ、さし出した。

「はッ」曹長は、一礼してそれを受けとると、機上から上半身を乗りだして、遙かの下界

を向いて双眼鏡のピントを合せた。

「見えないか」

「判りましたッ」

「どうだ」

「焼土ばかりです。附近に、家らしいものは、一軒も見えませぬ」

「戦争じゃからナ」中佐は、気の毒に耐えぬといった調子で、今から一と月程前までは、社会局の名事務員だった浅川岸一を慰めたのだった。

「浅川は、司令部の御命令で、昨夜は、立川飛行聯隊の宿舎に閉じこめられ、切齒扼腕していました。この上は、早く敵機に、めぐり逢いたいであります」

小さいけれど、彼の懐しい裏長屋は、影すら見えなかつた。そこには、用務員をしている父亀之助と、年老いた祖母と、優しい母と、ダンサーをしている直ぐ下の妹舟子と、次の妹の笛子と、中学生の弟波二とが、居た筈だつた。彼等は、憎むべき敵機の爆弾に、蹴散らされてしまったのだつた。今頃は、どこにどうしていることやら。生か、それとも死か。彼は、折角飛行命令が出たのに、求める敵機の、姿も影も見当らないのを、残念がった。

「おお、あれは何だろう！」

突然、眼のいい塩原参謀が、怒鳴った。

「なに?!」中佐は、参謀の指す彼方を、注視した。

「御覧なさい、中佐殿。お茶の水の濠の中から、何か、キラキラ閃いているものがあります」

「なるほど、何か閃いているね。おお、君あれは、信号らしいぞ」

「信号ですか」参謀は、双眼鏡をあてて、その閃いているものを注目した。

ピカ、ピカ、ピカ、ピカ、ピカーツ、ピカ。それを繰返している。それは聖橋と、お茶の水との中間にあたる絶壁の、草叢の中からだった。

「応答して見ましようか」参謀は、尋ねた。

「やって見給え」

「はッ」参謀は、浅川曹長に命令を伝えた。

司令機の尾部から、白い煙がスー、スーッと、断続して、空中を流れた。

それが、判ったものか、ピカピカ光るものは、鳥渡、動かなくなつたが、間もなく今度は、前よりも激しく、閃きはじめた。

「確かに、こちらを呼んでいるのですね。あれは、硝子板ガラスいたを応用した閃光通信せんこうつうしんです。おい通信兵、頼むぞ」

背後の座席にいた通信兵は、このとき大きく肯うなずいて、先刻さつきから用意していた白紙に、鉛筆を走らせていた。

聽やがて、地上の信号を、翻訳し終つたものと見え、一枚の紙が、中佐のところへ、届けられた。さて、そこに書き綴られた文章は――

「レイノジケンニツキ、シキユウ、セキガイセンシヤシンサツエイタノム。サツエイハンイハ、ヒジリバシヨリスイドーバシニタルソトボリエンガン一タイ。コウドウニ、チユウイアレ。エム一三」

（例の事件につき、至急、赤外線写真撮影を頼む。撮影範囲は、聖橋ひじりばしより水道橋すいどうばしに至る外濠そとほりえんがん沿岸せん一帯。行動に注意あれ。M三）

「これは容易ならぬ通信ですね」参謀が、キツと口を結んで中佐の顔を見た。

「うん――」中佐は、何か考えている風だった。「M三で、誰です？」

「――赤外線写真撮影用意！」湯河原中佐は、参謀の問とに答えないうで、通信兵に、命令を發した。「それから、浅川曹長、機首を右に曲げ、航路外に出で、二分間したら、元の場

所へ帰つて来るんだ。それから空中撮影を始めるから、外濠について、廻つてゆくこと。速度は五十キロまで下げるんだぞ」

「判りました」曹長は、ハツキリ答えて、急旋回の合図を、後についてくる僚機の方にした。

「塩原君」と、中佐は始めて、参謀の方を向いて、莞爾にっこりとした。「今夜あたり、面白い話が聞けるかも、知れないよ」

帆村探偵対狼ほむらたんでいためルフ

神田駿河台かんだするがだいは、俗に、病院街びょういんまちといわれる。それほど、××産婦人科とか、××胃腸病院とか、××耳鼻医院とか、一々名を挙げるのに煩わしいほど、数多あまたの病院が、建てこんでいた。しかし事實は、病院だけでなく、学校と研究所も少くないところであった。それ等の建物は、多くは三層又は四層の建築となっていて、病室の多い病院と間違えられ

るような恰好をして並んでいた。しかし数の方からは何と云っても病院の方が多く、そこから白いシーツなどがヒラヒラと乾されているのが、兎角とかく通行人の目につきやすく、病院街と呼ばれることになつたらしい。

その駿河台の、ややお茶ちやの水みづ寄りの一角に、「戸波となみ研究所」と青銅製の門もん標ひょうのかか
つた大きな建物があつた。今しも、その扉が、外に開いて、背の高い若い男が姿を現わ
した。

「此の辺一帯は、うまく助かつて、実に幸運でしたね」そう云つて、後を振りかえつた。
「そうですかねえ」

とんちんかんの答をしたのは、若い男を送つて来た中年の、もしやもしやした頤あご髯ひげを
蓄たくわえている男であつた。それは、どこかで、見覚えのある顔、見覚えのある声音こゑだつた。

「では先生、お大事に」青年は云つた。

「いや、有難とう」

と頤髯先生が、頭を下げた途端とたんに、いきなり、先生の身体は内部へ引擦りひきずこまれてしま
つて、代りに、がっしりした大きな面めんが、ニユツと出た。

「あんた、先生様を、連れだしたりして、困るじゃねえか。早く、帰つて下せえ」

青年は、一向悪びれた様子もなく、階段を下って行つた。

「先生様も、ちと注意して下せえよ」と背後を振りかえり、それから又往来の方を向いてそこらにブラブラしている四五人の男に向つて、「おい、皆の衆。お前ら駄目じゃねえか」と怒鳴つた。

その四五人のうちの一人が、グツとこつちを睨みかえしたのを見ると、彼は、周章でて入口の扉のうちに、姿を隠した。その頓間男も、どこかで、見た男だつた。

それも道理だつた。頓髯男は、この研究所長の戸波俊二博士。大八車のように大きい男は、山名山太郎といつて、印半纏のよく似合う、郊外の鍛冶屋さんで、この二

人は、帝都爆撃の夜、新宿の暗がりの中で知合いになり、助け助けられつつ、この駿河台の研究所まで辿りついたのが縁で、唯今では、鍛冶屋の山さん、変じて、博士の用心棒となり、無頓著な博士の身辺護衛の任にあたつているのだった。戸波博士は、いま軍部の依頼によつて、或る秘密研究に従事している国宝のように尊い学者だった。さてこそ、門前には、便衣に身体を包んだ憲兵隊が、それとなく、厳重な警戒をしている有様であつた。

戸波研究所を立出でた青年は、私服憲兵との間に、話がついていたのでもあろうか、別

に咎められる風もなかった。彼は、往來を、急ぐでもなく、ブラブラと歩き出した。大通りに出てみると、避難民や、軍隊が、土煙をあげて、はげしく往來していた。

青年は、駿河台下の方へ、下つて行つた。そこは、学生の多い神田の、目貫の場所であつて、書店や、ミルクホールや、喫茶店や、カフェや、麻雀俱樂部や、活動館や、雑貨店や、ダンスホールが、軒に軒を重ねあわせて並んでいた。流石に、今日は、店を閉めているところが、少くはなかったが、中には、東京人特有の度胸太さで、半ば犠牲的に、避難民のために、便宜をはかっている家も、見うけられた。

キャバレ・イーグルも、そのうちの一軒だった。

このキャバレ・イーグルという家は、カフェとレビュー館との、中間みたいな家だった。お酒を呑んだり、チキンの皿を抱えながら、美しい踊り子の舞踊が見られたり、そうかと思つと、お客たちが、てんでに席を立つて、ダンスをしたりすることが出来た。随つて、ここの客は、若い婦人と、三十過ぎの男とが多かつた。そして、どちらかという、不良がかつた色彩を帯びていることも、否めなかつたのである。

彼の青年は、何の躊躇もなく、イーグルの入口をくぐつた。

支配人が、大袈裟に、さも駭いた恰好をすると、急いで近よつた。

「まあ、ようこそ。男爵さま。——」

支配人は、恭々しく手を出して、青年の帽子を受けとった。

「誰か、来てないか」

「どなたも、見えませんです。なにしろ、この騒動の中ですから」

「手紙も、来てないかしら」

「手紙といえば、真弓が、なにかビール樽から、ことづかったようでしたが……」

「そうか。真弓を呼べ」

支配人は、奥の方を向いて、

「真弓さアーン」

と声をかけた。

「はーイ」

と返事がして、派手な訪問着を着たウエイトレスがパタパタと駈けてきた。

「まあ、男爵。よく来たわネ」

「てめい、ビール樽から、なんか、ことづかったろうが」男爵と呼ばれる青年は、姿に似

ぬ下等な言葉を、はいた。

「ええ、ことづかつてよ。こつちへ、いらつしやいよオ」

真弓は、広間の片隅の、函・卓子^{ボックス・テーブル}へ、男爵を引っぱって行つた。

「今日は、ゆつくりして行つてネ。あたしも是非、あんたに、相談したいことがあるのよ」
「それよか、手紙を、早く出せつたら」

「まあ、ひどい人。あたしのことより、あんなビール樽の手紙がいいなんて、あたし、失礼しちゃうわ」そういつて、彼女は、帯の間から真白い四角な封筒をとりだした。

「ほう、ビール樽からの手紙じゃなくて、これは『狼』^{ウルフ}からのだな」

狼^{ウルフ}といい、ビール樽というところを見ると、男爵というものも、大分怪しいことだった。

青年のキリリとした伊達姿^{だて}が「男爵」という通称を与えたのかも、知れなかった。

「おい、真弓。手紙を読む間、あつちへいつとれ」男爵は、真弓の頬つべたを、指の先で、ちよいと、つついた。

「うん——」真弓は、だしぬけに、男爵の首ツ玉に噛^{かじ}りつくと、呀^あツという間に、チュツと音をさせて、接吻^{せつぶん}を盗んだ。

「莫迦^{ぼか}——」男爵は、満更^{まんざら}でもない様子で、ニヤリと笑つて、真弓の逃げてゆくあとを見送つた。

それから男爵は、急いで、入口のカーテンを引いた。次に彼は、驚くべき敏捷さでもって、内懐ふところから、黄色い手袋を出して嵌め、そしてどこに隠してあったのか、マスクをひよいと被ると、例の封筒を指先で摘みあげて、端の方を、鋏はさみで、静かに截り開いた。封筒の中からは、四つに折おり畳たたんだレターペーパーと、百円紙幣とが出て来た。紙幣の方は、そのまま、封筒にかえし、彼は手紙の方をとりあげて、おそろおそろ開いた。

(ちえツ。白紙しろがみでやがる！)

彼は、何にも文字の書いてない白紙を卓子テーブルの上に拵げると、衣囊ポケットの中から、青い液体の入った小さい壺つぼを取出した。その栓せんをぬいて紙面に、ふりかけようとした。丁度ちょうど、そのときだった。

「ピューツ、ピューツ」

と、窓外に、口笛が鳴った。

青年は、ひどく周章あわてて、席を立とうとしたが、卓上の、手紙などを、懐中に入れようか、どうしようかと、躊躇ちゆうちよ踏ちよした。が結局、手紙も、金も、小壺つぼまで、そのままにして、カーテンの外へ、駈け出していった。

それと入れちがいに、大きな坊主頭が、ニユツと、カーテンの中に入ってきた。彼は素

早く、封筒の中へ、フツと息を入れ百円紙幣を抜き出すと、封筒だけは、元の卓子テーブルの上へ抛ほうり出した。ところが、運わるくそれが、小壇に触れて、パタリと倒してしまった。青い液体が、ドクドクと白紙の上に流れ出した。怪漢は、ひどく狼狽ろうばいして、壇を指先に摘むと、起した。白紙の上には、青い液体が拡がって、沸々ぶつぷつと白い泡を立てていた。彼は、ハンカチで、それを拭ぬぐおうとして、紙面に顔を近づけた瞬間、ウムと呻うめくと、われとわが咽喉のどを掻かきむしるようにして、其儘そのまま、肥こえた身体を、卓子の上に、パタリと伏せ、やがて、ダラリと動かなくなつた。

もしも、男爵と呼ばれた青年が、マスクも懸けないで、それと同じことをやったなら、彼もこの坊主頭の男と、同じ運命に落入る筈だつた。それは、手紙の発信人「狼ウルフ」という人物の、目論もくろんだ恐ろしい計画に外ならなかつた。

物音に、駭おどろいて駈おどろけつけた人々は、カーテンを開いてみて、二度吃驚びっくりをした。

「呀あッ、これはビール樽だ」

「なんだか、おかしいぞ。危いから、近よつちやいけない」

人々は、ビール樽の死体を遠巻きにして、ワツワツと、騒いでいた。

「男爵が、居ないぞ」

「真弓も、どこかへ行つた」

その騒ぎの中に、チリチリと、電話が懸かつて来た。

「それどころじゃございません」支配人が泣かんばかりの声を出して、電話口へ訴えていた。「ビール樽が、殺されちまつたんです。ええ、男爵とは、違います。ビール樽の野郎ですよ。どうか直ぐ来て下さい。私は、大将の命令がなけりや、店を畳みたいのですよ。どうかして下さいな、『狼』の親分！」

その頃、男爵とウエイトレス真弓とは、御成街道を自動車で走っていた。二人は、こんな会話をしていた。

「では、狼の大将は、今朝がた、イーグルへやつて来たというのだな」

「そうですわ。そこへ、紅子さんという、浅草の不良モガが、一人でやつて来たのよ。狼は、紅子さんと、手を取つて、帰つて行きましたわよ」

「紅子が、ねえ——」

「ビール樽は、そのころから、お店の周囲をうろついてたんだわ。あいつ、百円紙幣に釣られて、あなたの身代りになつたのね」

「では、真弓。これから、故郷へ帰つたら、二三年は、東京へ顔を出しちゃ、危いぞ」

「もう、お降りになるの。いまお別れしたら、何時お目に懸かれるか、判らないわネ」

「お互に、どうなるか、判らない人生だ。帰ったら、お父さんや、子供を、大事にしろ」

「これでも、あたし、古い型の女よ。帰ったら、いいママになりますわ」

「それがいい」男爵は、運転手の方へ向いて停車を命じた。

「では、所長」と運転手は、降り立った男爵に声をかけた。「たしかに、御婦人を、茨城県磯崎まで、送りどけて参ります」

「どうか、頼んだぞ」

「それじゃ、サヨナラ。あたしの、男爵さま——では無かった、帆村莊六様」

「御健在に——」

青年は、小さくなつてゆく、自動車の方に手を振った。「男爵」というのは、無論、綽名であつて、G・P・Uの日本派遣隊の集合所と睨まれるキャバレ・イーグルに於ける不良仲間としての呼び名だった。そこで、彼は巧みに、狼を隊長とする彼の一団に近づき、国際的陰謀の謎を、解きつつあつた。「男爵」と呼ばれる彼の本名は、帆村莊六。軍部に属する特務機関としての記号をM12という。このところ、数年の間に、めきめきと売出した若手の私立探偵であつた。

記憶のよい読者は、彼が、いつの間にか、東京警備司令部の地下街に忍びこんでいたことや、今朝方のこと、お茶の水附近で、湯河原中佐や塩原参謀の乗っていた偵察機ていさつきに、赤外線写真の撮影を依頼したことを、思い出されるに違いない。

帆村探偵の任務は、大日本帝国の体内に潜行している労働ろうのうロシアの特別警察隊、G・P・Uペーウーの本拠をつき、「狼ウルフ」といわれる団長以下を、捕縛ほばくするのにあつた。その「狼」は紅子べにこを伴つて歩いているらしい話であつたが、彼こそは、先に、東京警備司令官別府九州べつぷくす造ぞうに変装してマニラ飛行聯隊空襲の夜の、帝都警備権を、自分の掌中に握つていた怪人物だつた。

帆村探偵対「狼ウルフ」の、血飛ちとび肉裂にくさけるの争闘は、漸ようやく機が熟してきたようであつた。

飛行船隊を発見す

地下街の司令部では、印刷電信機が、リズムカルな響をあげて、各所の要地から集つて

くる牒報を、仮名文字に打ち直していた。

事態は、刻々に、うつりかわって、北滿、朝鮮国境からの通信が、いつもの二倍になり三倍になり、尚もグングン殖えて行つた。電信機は、火のように熱して来た。側に立っている通信兵員はシリンダーや、齒車のあたりに、絶えず滑動油を、さしてやるのであつた。

「次は北滿軍司令部からの、報告であります」有馬參謀長は、本物の別府司令官の前に、直立した。「金沢、字都宮、弘前の各師団より成る北滿軍主力は、本日午後四時をもつて、興安嶺を突破せり。これより、善通寺支隊と呼応し、海拉爾、満州里方面に進撃せんとす。終り」

別府司令官は、静かに肯いた。

「今一つは、極東軍の報告であります」有馬參謀長は、もう一枚の紙を、とりあげた。

「仙台、姫路、竜山各師団よりなる極東軍主力は、国境附近の労農軍を撃破し、本日四時を以てニコリスクを去る十五キロの地点にまで進出せり。目下、彼我の空軍並に機械軍の間に、激烈なる戦鬪を交えつつあり。就中、右翼竜山師団は一時苦戦に陥りたるも、左翼仙台師団の急遽救援砲撃により、危機を脱することを得たり。終り」
「労農軍は、いよいよ味なことを、やりよるのう」司令官は、髯のところに、手をやった。

「閣下」と呼んだのは、草津参謀だった。「市川町附近の準備は唯今を以て、完成いたしました。連絡通信の方も、故障なく働いたします」

「そうか」と将軍は顔をあげて云った。「儂の考えでは、今夜が最も危険じゃ。もう一度、宇都宮以北の防空監視哨へ、警告を発して置け」

「はッ、承知いたしました」

そこへ、バタバタと、伝令が、電文を握ってきた。

「報告です」

「よし。こつちへ貸せ」有馬参謀長は、多忙であつた。「おお、これは……」

参謀長は、キツと唇を噛んだ。

「閣下。海軍からの報告です。北緯四十一度東経百四十度を航行中なる第五潜水艦隊の報告によれば、本日午後四時十五分、東北東に向つて三十五キロの距離に於て、米国空軍に属する飛行船隊の航空せるを発見せり。該飛行船隊は、アクロン、ロスアンゼルス、パタビウス、サンタバルバラの順序を以て、高度七千メートル、時速百八十キロ、略西方に向けて航空中なり。尚、該隊には、先導偵察機五機、戦闘機十四機を、随行せしめつつあり。終り」

これを聞いた将校たちは、互に顔を見合わせたのだった。いよいよ、恐ろしい怪物が、襲来しゅうらいしてくるのだった。飛行船といえは、ツエツペリン伯号はくを、帝都上空に仰いだことのある日本国民だった。ロスアンゼルス号はツエツペリン伯号の姉妹船、アクロン号、サンタバルバラ号は、それよりも二倍近い、巨大なもの、パタビウス号に至っては、空の帝王と呼ばれる途方もなく尨ぼうだい大な全鋼鉄の怪物で、爆弾だけでも、五十噸ト近く、積みこんでいるという物もの、凄すごい飛行船だった。

日本陸軍にも、海軍にもこれに比敵ひてきする飛行船は、一隻せきもなかった。極ごくく小さい軟式飛行船が、二三隻海軍にあつたが、それは、驚わしの側によつた雀すずめにも及ばなかつた。

兼ねて、襲来するかもしれないと思われていたのであるが、いま斯こうして、北海道と、青森県の、ほぼ中間を覗ねらつて、大挙襲来しているのを知つては、流星さすがに、戦慄せんりつを感じないわけに行かなかつた。

(あの尨ぼうだい大な爆弾を、どこに落すのだろうか?)

恐おそらく合計して百噸トの上へのぼる、爆弾だった。帝都でさえ五噸トの爆弾で、灰燼かいじんになる筈であつた。百噸を一度に投下するときは、房総半島ぼうそうはんとうなんか、千切ちぎれて飛んでしまひそうに、思われた。

この戦慄に値する報告書を前に、司令部の幕僚は、流石に黙して、何も語らなかつた。果して彼等の胸中には、勝算ある作戦計画が秘められているのであろうか。それとも、戦慄の前に最早言葉も出でないのであろうか。

そのとき、卓上電話のベルが、ジリジリと鳴った。

「なに、帆村君か」

湯河原中佐が、大きい声を出した。

「閣下も、お待ちかねだ。早く来給え」

帆村探偵が、此の室に、姿を現わしたのは、それから五分と経たない後だった。

「赤外線写真は、どうでした？」彼は、司令官達に、敬礼を済ませるが早いのか、気になることを尋ねた。

「うまく出たようだ。ここにある」湯河原中佐が、クルクルと捲いてある細長い印画紙を机の上に、展げて見せた。

「ははア、よく判りますね」と、帆村探偵はお茶の水に近い濠端の、ある地点を指して、云った。「肉眼で見たのでは、なんの変りもない草叢つづきですが、斯うして、赤外線写真にとつて見ると、どこに、坑道の入口があるか、直ぐ判りますね」

「だが、よくまあ、坑道のあることが、判ったものだね」司令官が、感心をした。

「それは、帆村君の手腕ですよ」中佐が、代りに説明した。「空襲の夜、放送局を占領した不逞団の頭目に鬼川おにかわという男が居りました。これを捕縛ほばくして、帆村君に預けたのです。すると帆村君は、紅子べにこという少女を使って、鬼川が知っている団の秘密をすっかり聞いてしまったのです」

「少女紅子を使ったというのは？」

「それは、帆村君が研究している読心術ですな。丁度、塩原参謀が、その少女と、瀕死ひんしの重傷を負っていた弟の素六そろくというのを、放送局舎の中から助け出したんです。帆村君は、その少女を見て、駭おどろいたそうです。何でも前から知合いだったそうで……。紅子という少女は、非常に感動しやすい、どつちかというと、我儘わがままも強い方の女性でした。そんな人は、読心術の霊媒れいばいに使うと、非常に、うまく働くんだそうです。早く云うと、帆村君は、紅子を昏睡こんすい状態に陥し入れ、その側へ、猿轡さるぐつわをした鬼川を連れて来、紅子を通じて、鬼川の秘密を探らせたのです」

「そんなことが、出来るものかな」司令官は不思議そうに云った。

「帆村君に云わせると、いい霊媒れいばいを得さえすれば、わけのない事だそうです。いわば、

鬼川の身体は、不逞団ふていだんの秘密という臭気しゅうきを持つています。紅子の方は、それを嗅かぎわける、鋭い鼻のようなものです。常人には、嗅いでもわからないのに、特異性をもつた紅子のような霊媒を使うと、わかるんです」

「帆村君は、それで、何を発見したのじゃ」

「彼は、第一に、閣下の偽物ぎぶつが、司令部に頑張なまつていることを知りました。これは、わたくしも、既に気がついていたことだったので、成程なるほどと、信用が出来たのです」

「ほほう、君も、偽司令官を知つていたのかい」司令官は、意外な話に、驚いたのだった。「それは閣下」湯河原中佐は、唾つばをグツと嚙のんだ。「帝都が空襲されるに当つて、閣下が第一に、なさらなければならぬ或る重大な任務がありだったのに、非常時が切迫しても、閣下は、お忘れのように見受けました。わたくしはそれを怪しく思いました」

「では若しもや……」司令官は、何に駭おどろいたのか、その場に、直立不動の姿勢をとり、湯河原中佐の憐愍れんびんを求めもとめるかのように見えた。

「閣下、御安心下さい」中佐は、語尾ごびを強めて云つた。

「それは、閣下に代つて、わたくしが遂すい行こういたしました。閣下から信頼を受けてあの重大任務をおうちあげ願つていなくなつたら、わが国史上に、一大汚点を印するところであり

ました」

「それは、よかった——」

司令官は、沈痛な面持をして、遙かな地点に、陳謝と祈りを、捧げるものようであった。そういえば、湯河原中佐が、秘かに、司令官の室内に忍びこみ、鍵らしいものを盗んで、地下街の一隅に設けられた秘密の鉄扉てつびを開き、その中に姿を一時隠したことがあった。彼は、誰にも話の出来ない或る重大任務を、遂行して、国家の危機を、間一髪に、救ったのだった。その内容については、司令官と中佐と、外に数名の当事者以外には、誰も知らないことで、筆者わたくしも、それ以上、書くことを許されないのである。

兎とに角かく、それは、三千年の昔より、神国しんこく日本に、しばしば現れたる天佑てんゆうの一つであった。

「帆村君は、もう一つ、大きな秘密を、探さぐり出したのです」中佐は、夢から醒さめたように、語をついだ。

司令官は、静かに、喘あえいだ。

「それは、G・P・Uゲー・ペー・ウーが、次に計画しつつあるところの陰謀であったのです。だが、鬼川自身も、こつちの方については、あまり詳しいことを知っていなかったのです。唯ただ、戸波

博士の研究所が覗ねらわれていること、研究所襲撃の手段として、坑道を掘り、地下から、爆破しようという計画のあるのを、知ることが出来たのです。帆村君は、思う仔細しさいがあつて、今朝、紅子と手を取つて、勇敢にも、大混乱の市内へ、飛び出して行つたのです。正午近くになつて、わたくし達の、偵察機が、神田上空を通るとき、運よく、帆村君の、反射鏡信号を、発見したというわけです」

中佐は、語り終つて、額ひたいの汗を、拭つた。

「帆村君」司令官は、厳げん肅しゆくな態度のうちに、感激を見せて、名探偵の名を呼んだ。

「いろいろと、御苦労じやつた。なお、これからも、お骨折りを、願いまするぞ」

「はいッ。愛する日本のためであれば、ウーンと、頑張がんばりますよ」

日頃冷静な帆村探偵も、このときばかりは、両頬を、少女のように、紅潮させていた。

「それでは、戸波博士のことは、よくお願いいたしますよ」

「わかりました」司令官は、大きく肯うなずいた。「草津参謀。君は、麻布第三聯隊の一個小隊を指導して、直ちに、お茶の水へ出発せい」

「はいッ。草津大尉は、直ただちに、お茶の水の濠端ほりばたより、不逞団の坑道を襲撃いたします。終り」

「うむ、冷静に、やれよ」

草津大尉は、側かたわらの架台かだいから、拳銃の入ったサックを下ろして、胸に、斜に懸けた。それから、鉄胃てつかぶとを被り直すと、同室の僚友に、軽く会釈をし、静かに扉ドアを開けて出て行った。

闇やみに蠢うごめくもの

「おい、蘭子らんこ氏、えらいことになったぞ」

暗闇の小屋の一隅から、若い男の声がした。

「吃驚びっくりさせちゃ、いやーよ」

手を伸ばすと、届くようなところで、やや鼻にかかった、甘ったるい少女の声がした。

「いよいよ、これア、大変だ」

「オーさんたら。自分ばかりで、感心してないで、早く教えてよ」

「うん。もうすこしだ——」

聴^{やが}て、カチャカチャと、軽い音がした。若いオーさんという男が、頭から、受話器を外したのだった。

「いま放送局から、アナウンスがあったがね、アラスカ飛行聯隊と、飛行船隊とが、共同戦線を張って、とうとう、青森県の^{おおみなとようこう}大湊要港を占領しちまったそうだけ」

「あら、まア、あたし、どうしましょう」

「どうするテ、仕様がなないじゃないか。相手は、強すぎるんだ」

「だって、青森県で、東京の地続きでしょう。アメリカの兵隊の足音が、響いてくるよう
だわ」

「もつと、えらいことが、あるんだぜ」

「早く言ってしまうなさいよ。オーさん」

「飛行船隊の中から、一隻、アクロン号というのが、^{むつわん}陸奥湾を横断して、唯今、^{のへじ}野辺地の上空を通っているのだ」

「どこへ、逃げてゆくのかしら」

「^{ぼか}莫迦だなア、君は。アクロン号は、東京の方へ、頭を向けているのだよ」

「じゃ、また東京は、空襲を受けるの」

「どうやら、そうらしいというのだ。警戒しろということだ」

「いやアね。あたし爆弾の光が、嫌いだよ」

「誰だって嫌いだよ」

「でも、今夜は、大丈夫なんですよ」

「ところが、今夜が危いのだ。一時間百キロの速度で飛んでいるから、真夜中の十二時から一時頃までには、帝都の上空へ現れるそうだよ」

「どうして、途中で、やつつけちまわないんですよ」

「あつちは、飛行機では、載せられないような、大きな機関砲を、沢山持っているんだ。こつちの飛行機が、近づこうとすると、遠くからポンポンと射ち落しちまうんだ」

「高射砲で、下から射つたら、どう」

「駄目だ。ウンと高く飛んでいるから、中々届かない」

「じゃ、上から逆落さかおとしかなんかで、バラバラと撃つちまえば、いいじゃないの」

「そこにぬかりがあるものか。あつちには、有力な戦闘機が飛行船の上に飛んでいて、近づく飛行機を射落してしまう」

「まあ、くやしい。それじゃ、敵の飛行船をみすみす通してしまふことになるじゃありませんか」

「だから、東京市民は注意をしろ、とサ」

「オーさんは、いやに、米国空軍の肩を持つネ。怪しいわ」

「おいおい、人聞きの悪いことを云うなよ。これでも、愛国者だよ」

「どうだか判りやしない。あたし、明日になったら、お別れするわ」

「じよ 冗談じょうだん、云うな。折角せつかく、この機会に、世帯しよたいを持ったのじゃないか」

「世帯つて、なにが世帯さア。こんな、焼トタンの急造きゆうぞうバラックにさ。欠けた茶碗かが二つに、半分割れた土釜どがまが一つ、たったそれつきり、あんたも、あたしも、着たきりじゃないの」

「まだ有るぞ。ほらラジオ受信機」

「……」

「半焼けの米櫃こめびつ、焼け米、そこらを掘ると、焼け卵子たまごが出てくる筈だ。みんなこの際、立派な食料品だ」

「そりゃ、お別れしたくはないのよ、本当は。あんたは、失業者で、あたしはウエイトレ

ス。こんな騒ぎになつたればこそ、あんたも大威張りおおいばりで、物を拾つて喰べられるしサ……」

「オイオイ」

「あたしも、お店が焼けちやつたから、出勤しないであんたの傍にいられるしサ、嬉しいには、違いなけれど……」

「嬉しいところで、いいじゃないか」

「でも、あんたには、愛国心が、見られないのが、残念よ」

「弱つたな。僕だつて、愛国心に、燃えているんだぞ」

「アクロン号が、来るといふから、あたし、考えたのよ」

「何を、考えたのだい」

「日本が興おこるか亡ほろぶかという非常時に、お飯まめごと事みたいな同棲どうせい生活せいかつに、酔っている場合じゃないと、ね」

「同棲生活!? 同棲まで、まだ行つてないよ。六時間前にバラックを建てて、入ったばかりじゃないか」

「あたし達、若いものは、こんな場合には、お国のためにウンと働かなきゃ、日本人としてすまないんだわ」

「そりや、僕だつて、働いても、いいよ」

「じゃ、こうしない」

「ウン」

「あたしは、サービスに心得こころえがあるから、これから、毒瓦斯避難所どくガスひなんじょへ行つて、老人や子供この世話をするわ」

「僕は、どうなるんだ」

「あんたは、外に立っていて、ヨボヨボのお婆さんなんか、逃げ遅れていたら、背の上うへにのせて、避難所へ連れて来る役を、しなさいネ」

「君が働いている避難所へなら、何十人でも何百人でも、爺さん婆さんを拾つてゆくよ」

「そして、日本が戦争に勝つて、そのとき幸運にも、あたし達が生きていたら……」

「生きていたら……」

「そのときは、大威張りで、あんたの所へ行くわ」

「ふうーん」

「あんた、約束して呉れる？」

「条件がいいから、約束すらア」

「まあ、いやな人ね」

暗闇くらやみの中の男女の声は、パタリとしなくなつた。

暗闇の千葉街道を、驀まつしぐら地に、疾走しているのは、世田ヶ谷せたがやの自動車大隊だつた。轟ごう々たる轍わだちの響は並木をゆすり、ヘッド・ライトの前に、濛々もうもうたる土煙をあげていた。

「もう七時を廻つたぞ、山中中尉」

そういつたのは、先導車せんどうしゃの中に、夜光時計の文字盤を探っている将校の一人だつた。

「那須大尉どのは、この車で、先行されますか」隣りにいた将校が、尋ねた。

「先行したいのは、山々だが、本隊との連絡が、つかなくなるのを恐れる」

「なにしろ、電灯器具材料を積んでいますから、四十哩マイル以上の速度スピードを出すと、壊れてし

まう虞おそれが、あるのです」

「兎とに角かく、弱つたね。すこし準備が、遅すぎたようだ」

「ですが、目的地の市川いちかわへは、八時までには充分着きますから、アクロン号の襲来する
のが、十二時として、四時間たつぷりはございますですが」

「四時間では、指揮をするだけでも、大変だぜ」

「松戸まつどの工兵学校は、もう仕事を終えている頃ですから、直ぐ応援して貰ってはどうぞです」

「工兵学校も、いいが、俺は、千葉鉄道聯隊の連中を、あてにしているのだ」

何事だか、まだ判らないけれど、とにかく帝都から、程ほど遠からぬ市川町附近へ、多数の特科隊とつかが、夥おびただしい材料をもって、集合を開始しているものらしい。

「大尉どの」闇の中から、山中中尉の声がした。

「うん」

「思い出しましたが、村山貯水池の方は、誰か行くことになっていましたでしょうか」

「村山貯水池は、臨時に、中野電信隊が出動したそうだ」

「ああ、そうですか」

「あの広い貯水池の水面に、すっかり、藁わらを敷しくのは、想像しただけでも、容易ならん仕事だと思ふね」

「でも、藁を敷いて、水面の反射を消すとは、誰が考えたのかしりませんが、実に名案ですな」

「隅田川へ敷くのについて、非常に幸運だったというのは、今夜十二時頃から、次第に、上げ潮になって来るそうで、水面すいめんへ抛ほうりこんだ藁が、流出せずに、済むそうだ」

「なるほど、そうですか。これも天佑の一つでしょうな」自動車隊は、暗闇の中を、な
おもグングンと、轟進ばくしんして行つた。

「大尉どの、いよいよ、穴の奥まで、近づいたら幸いですよ」

「そういえば、だんだんと天井が、低くなつてきたね」

「入口で、三人、やつつけたばかりで、ここまで来ても、更に敵影てきえいを認めず、ですな」

「ちと、おかしいね。どこか、逃げ道が、慥こしやうえてあるのだろうか」

「いままでのところには、探さない別坑べつこうは、一つもなかったのですが」

「おや、地盤が、急に變つたじやないか。これは、燧ひうちいし石いしみみたいに硬い岩だ」

草津大尉の声のする方に、道後少尉が、懐中電灯を照しつけてみると、なるほど、今ま
での赭あかちや茶ちやけた泥土層でいとそうは無くなって、濃い水色をした、硬そうな岩層がんそうが、冷え冷えと、
前途ぜんとを遮さへぎつていた。

「こんなところに、鑿岩機さくがんきが、抛ほうり出してあります」

「こつちの方にも、一台、転ころがつているぞ」

「地盤が、固くなつたので、諦あきらめて、引上げたのでしうか」

「それにしては、おかしい。その辺の壁を、叩いてみよう」
泥が、バラバラと、崩れ落ちた。

「おお、これは!」壁へき体たいに、ポカリと、孔が開いた。

懐中電灯を、さし入れて見ると、その孔は上り気味になっている。

草津大尉は、道後少尉うながを促うながして、尚なおも恐れず、前進して行った。

「行きゆ停どまりだ」

「押して見ましょう」

ガラガラと音がして、冷つめたい風が、スーと入ってきた。

「いよいよ地上へ出たらしい」

「敵の奴、ここから逃げたらしいですね」

「うむ。——あれを見ろ、灯りが、さしているぞ」

「これは、建物の内部です」

「よおし、部下を集結するんだ。一度に、飛飛び出出そう」

「承知なみがたしました」少尉は、合図の懐中電灯を波なみがた形がたに、うちふった。ゾロゾロと部下が、

集集つて来た。

頃合ころあいはよかつた。

「突撃とつげきだツ。一ひイ、二ふウ、三みツ！」

ワツと喊かんせい声をあげて、一同は手に手に、拳銃を持って、飛び出した。扉らしいものを、いきなり蹴破けやぶると、地下室の広い廊下が、現れた。

薄暗い廊下灯の蔭に、猿轡ざるぐつわを噛まされ手足を縛ばくされて転さぐるっている一人の男があつた。その外ほかに、人影は、見えなかつた。道後少尉は、倒れている男を起して、猿轡をとつてやつた。それは、戸波研究所に、博士の身辺を守っている筈の山名山太郎だつた。

「早く階上へあがつて、窓を検しらべて下さい」

山太郎は、泣かんばかりに喚わめいた。

ドヤドヤと、一同が、階段を駆け上つてみると、三階の西窓が、そこだけは歯が抜けたように、硝子窓ガラスが開いて居り、頑丈な一条の綱ロープが、真向うの××産婦人科院の、物乾台のところへ架け渡されているのが発見された。

——用事があつて、地下室へ降りて来た戸波博士は、待ち構えていた怪しい一団の手によつて、何の苦もなく、誘拐ゆうかいされたことは、山太郎の説明によつて、間もなく、明かになつた。

軍部は、この凶報きょうほうを受取ると、愕然がくぜんと色を失ってしまった。

アクロン号の襲来しゅうらい

「モンスター君、まだ何にも、見えないのかい」

アクロン号の船長、リンドボーン大佐は、航空羅針儀こうくうらしんぎの面おもてから眼を離すと、背後を振りかえつて、爆撃隊長モンスター少佐に声をかけた。

「大佐殿、いよいよ、大東京です」少佐は、地上観測鏡の対眼レンズから、眼を離そうともせずに、叫んだ。「猫眼石ねこめいしのように美しい輪廓が、空中に、ぼつと、浮かびあがっています」

「羅針儀らしんぎも正確だ」大佐は、硝子蓋ガラスぶたの上を、指先で、コツコツと叩いた。「時間も、予期したとおり午前一時、淋代さびしろから、正まさに六時間半、経たった」

「左の方には、正しくカスミガウラの湖面が光っています」少佐は、やっと面をあげて、

ゴンドラの外を、指さした。

「爆撃の用意は、いいのだろうか」

「勿論です。二十噸トンの爆弾は、お好みこのによつて、一瞬間の裡うちに本船から離してもよろしい」

「ふ、ふ、ふ」大佐は、軽く笑つた。

「ですが、船長。大東京の輪廓が、すこし、明るすぎるように思いますが……」

「なアに、わしの経験によると、湿気が多い五月の天候では、地上の光が、莫迦ばかに輝いてみえるのだよ」

大佐は、長身を折つて、机上の東洋大地図の上に、静かに、眼を走らせた。その紙面には、先の世界一周のときに観測したデータが、赤インキで、詳細に、書き入れられてあつた。

「航空長、大東京への、距離は？」

「西十一キロ丁度です」

舵器だきとを執つている航空長は、答えた。

「呀ッ。船長——」観測鏡を握つている爆撃隊長が、叫び声をあげた。

「どうした。モンスターン君」

「大東京が、灯火を、消したんです」

「やつと気がついたものと見える」大佐は、通信兵と銘めいをうった伝声管の前に立って、叫んだ。「戦闘機隊へ通報せい。襲撃陣形をとり、戦闘準備にうつれ」

アクロン号は、大胆にも、三千メートルの高度まで、下降した。アクロン号をとりまく偵察機や戦闘機は、行進隊形を解いて、それぞれ、襲撃隊形にうつった。偵察機は、ぐつと、後へ引返して、アクロン号の、両翼と、後方とを守った。戦闘機は更に一千メートルの高度をとり、見る見る、速度を早めて、アクロン号の前方に、進出して行った。

予期した霞ヶ浦の海軍航空隊に属する空軍は、どうしたものか、どの方面からも、襲撃して来なかった。

「船長、ごらんなさい」モンスター少佐が云った。「下に、電車らしいものが、走っていますよ」

「なるほど、スパークも見えるし、ヘッド・ライトも、ぼんやり見えるようだね」

「向うの方には、ボツと、ギンザらしい灯が見えますよ」

「そんなことは無いだろう」

「でも、左手に見えるのがシナガワ湾です。ずっと、海と陸との境界線が見えるでしょう」

「すこし、早く来すぎたような気がする」大佐は、一寸、首をかしげた。

「いいいよ、大東京の位置が、はつきり判りました。こっちに、ムラヤマ貯水池が、明るく光っています」

「うん。地形は、ちゃんと合っている。爆撃して呉れと、いわぬ許りだ。では、モンストン君、兼ねての作戦どおり、思うが儘に、爆撃出来るね」

「そうです、大佐どの。第一に、マルノウチ一帯へ、一噸爆弾を三個、半噸爆弾を十二個、叩きつけます。それから、シナガワ附近シンジユク附近とを中爆弾で爆撃し、頃合いを計って、ホンジヨ、フカガワ附近の工業地帯を爆破し、尚、余裕があれば、ウエノ停車場を、やっつけて仕舞います」

「よろしい」リンドボーン大佐は、このとき長身を、すつくり伸して、直立し、厳然と、命令を発した。「爆撃用意！」

「爆撃用意！」モンストン少佐は、伝声管の中に、割れるような声を、吹きこんだ。「マルノウチ爆撃用意！」

アクロン号の、中央部に配置せられた、爆弾は、電気仕掛けで、安全装置が、バタバタと外されて行つた。爆撃手は、照準鏡のクロス・ヘアーに、丸の内の中心部が、静か

に動いてくるのを待った。

「適宜、爆撃始め！」

リンドボーン船長は、いよいよ、敵国の都に、二十噸の爆弾を、叩きこむことを、命じたのだった。

照準手のところへは、鸚鵡がえしに、高声器が、モンスター少佐の号令を、送ってきた。

「爆撃始めッ！」

丁度、その途端に、照準は、ピタリと、丸の内の中心に落ちた。

「ううん——」

照準手は、把手を、カチャリと、下に引いた。微かに、船体が、グツと持ちあげられたように感じた。三個の重爆弾が、発射孔を通して、サーツと、落下して行つた。

一秒、二秒、三秒——

地上に、パツと、ダリアの花が、開いたように感じた。真黄ろな、燦然たる、毒々しい華だつた。そこへ、

「だ、だ、だーン、だーン」

と、眼の醒めるような大きな音がして、船体が、ギシギシと鳴り響いた。

続いて、第二弾、第三弾――

爆弾室は、見る見る裡うちに、空っぽになって行つた。

「ううん、美事な命中率だ。素晴らしいぞ、照準手！」船長は紅蓮渦ぐれんうずを巻いて湧きあがる地上を見て、雀躍こわどりせんばかりに、喜んだのだつた。

「いよいよ、敵の戦闘機が、現れましたぞッ」モンストン少佐は、ゴンドラの窓から、空中に、パツ、パツと、赤い息を吐きだすような機関銃の乱射ぶりを、注目した。

地上からは、噴水のように、青白い光芒こうぼうを持った照空灯が、飛び上つてきた。ゴンドラの、防弾硝子ガラスで張つた窓が、チカチカと、その光芒に、射すくめられた。

高射砲から、撃ちだした砲弾が、美しく、空中で、炸裂さくれつした。そして、その照準は、見る見る正確になり、アクロン号の附近に、集まつて来た。

飛行船の胴どうなか中からも、重機関銃や、機関砲が、オレンジ色の焰を吐いて、敵機に、いどみかかった。

「ゴ、ゴ、ゴーン」

と音がして、アクロン号の船体が、グラグラと、揺れた。その途端に、ゴンドラと、すれすれに、日の丸のマークのついた日本軍の飛行機が、激しい火焰に包まれて、どつと下

に落ちて行つた。

「ジャップの飛行機を、寄せつけるやつがあるものか。危くて仕様がないじゃないか」大佐は、チョツと舌打をした。

その言葉の終らないうちに、又、前よりも一層、激しい動揺が起つて、大佐は、スルリと滑りそうになつたのを、やつとのことで、窓枠まどわくにすがりついて、事なきを得た。

日の丸のマークのついた日本の飛行機が、火焰に包まれて、又、墜落して行つた。そのあとから、別な飛行機が、又一台、吠えるような、異様な響をあげて……。

「おい、モンスター」大佐は、たまりかねて爆撃隊長の肩をつかんだ。「われ等の、戦闘機隊は、何をしているのだ」

「阻塞そそい気球ききゆうの中へ、引っぱり込まれたらしいです。半数は、気球から垂れている綱に、機体を絡めつけられ、進退の自由を失っているらしいです」

「なに、阻塞気球?!」

「ほら、御覧なさい。あすこに、ヒラヒラしているのがあります」

「おお、——」と大佐は、窓のところに、駈けよつた。「あれは、大グラント大尉の、赤鬼号じゃないか」

「や、やッ」モンスター少佐も、探照灯に照し出された、見覚えのある、真紅な胴体をもつた飛行機を見付けて、のけぞる位に駭いた。「グラント君が、敵の阻塞気球に……」

「航空長、本船を、浦塩^{ウラジヲ}へ、向ける」大佐は、皸^{しわが}枯れ声で、叫んだ。

「日本の飛行機は、爆弾と同じことだ」

「ああ、日本の軍人は、気が変だッ」

自分の墜落することを一向気にとめず、猛然と、機体を、爆弾代りに、うちつけて来る日本軍の勇猛さに、大佐は、呆^{あき}れてしまった。

そのとき、空の一角から、立川飛行聯隊の重爆撃隊^{じゅうばくげきたい}が、三機雁行^{さんきがんこう}の隊形をとつて、しずしずと、アクロン号の真上に、あらわれた。そこには、既に、アクロン号を守る敵機の姿も、見えなかった。重爆撃機は、アクロン号の上を、グルリと一とまわりした後、鮮かに、十二個の、爆弾を切つて放した。

それは、アクロン号にとつて、最後の止め^{とど}であった。

百雷の落ちるような響がしたかと思うと、空中の巨船は、一団の、真黄色な煙と化し、やがて、物凄い音響をあげ、全身を、真紅な火焰に包んで、墜落を始めた。空中の怪魚の、断末魔^{だんまつま}は、流石^{さすが}に豪胆^{ごうたん}な帝国の飛行将校も、正視^{せいし}するに、たえなかった。或いは、船

首を下にし、或いは胴中を二つに歪め、或いは、転々と苦惱し、焰を吹き、怪音をあげ、焼け爛れたるアクロン号は、武蔵野平野の、真唯中に、墜落していった。

まことに、哀れなアクロン号の最後だった。

船長リンドボーン大佐以下四十五名の乗組員は、敵国の首都を、完膚なきまでに爆撃した彼等の武勲を、唯一の慰めとしてアクロン号と運命を共にした。

だが、本当のことを云うなら、気の毒なことに、リンドボーン大佐以下は、大きな錯覚さつかをしていたのだった。それは、大東京だと思つて、爆弾の雨を降らせた一廓は、帝都とは似てもつかぬ草原と田畑だったのだ。それは帝都を、二十キロほど、東へ行ったところにある市川町の附近を択んで、軍部が急造した偽都市にせとしだったのであった。その市川の草原には、松戸工兵学校や、千葉鉄道聯隊や、世田ヶ谷自動車隊が、一夜のうちに急造した電灯装置ばかりの偽東京が、影も形もないほど、爆撃しつくされてあった。

偽都市が成功したその反面には、其の夜、帝都の、灯火管制が、如何に巧みに行われて敵機の眼から脱れることに成功したかを、雄弁に物語っているのです、その夜の勲功の半分は軍部が担い、他の半分は、帝都市民が貰うのが至当であると面白いことを云ったのは、外ならぬ東京警備司令官、別府九州造氏であった。

戦雲暗し太平洋

わが海軍の主力、聯合艦隊は、小笠原諸島の東方、約一千キロの海上を、真北に向けて進撃中であつた。

珍らしや、聯合艦隊！

日米国交断絶の直ぐ後、南シナ海から、台湾海峡の方へ出動し、米国アジア艦隊と一戦交えたまでは判つていたが、其後はどこに何をしているのやら、国民には杳として消息の判らない聯合艦隊だつた。

それも道理、アジア艦隊との一戦に、残念にも妙高と金剛とを喪い、外に駆逐艦と飛行機を少々、尊い犠牲とすることによつて、どうやら、アジア艦隊の始末をつけることが出来たのであつた。尚生残つた敵艦隊を掃尽し、更に進んでは、陸軍のフィリッピン攻略を援助すべきではあつたが、太平洋方面の戦略が重大であるために、あとは第三艦

隊と特務潜水艦隊とに委せここに吾が聯合艦隊は、針路を東に向け直したのだった。先ず手近かの、グアム島を占領して、これで西太平洋の制海権を収めると、いよいよ艦隊は、最後の一戦を交える準備として、南洋群島へ引上げ、待機の姿勢を執ることとなった。

その間に、米国側では、どうかして、わが聯合艦隊を、不利な状況下に引張り出そうとして、殊更マニラ飛行隊を帝都へ送つて空襲をさせ、或いはアクロン号の夜襲、北海道、青森県の占拠まで、可也の犠牲をかけて、日本艦隊の釣出しを試みたのであったが、わが聯合艦隊司令長官 大鳴門正彦 大將は無念の唇を噛み、悪口を耳より聞き流し、唯、決戦の最も有利な機会の来るのを待った。

そして、いよいよ其の日は近づいたのだ。布哇のパール軍港に集結していた敵艦隊の主力は、とうとう日本艦隊を待つている辛抱ができなくなり、ついウカウカと、有力な根拠地布哇を離れる気になった。斯うして太平洋上の二大艦隊は、相手を求めて刻一刻と、相互の距離を縮めて行つた。

「いよいよ、永年憧れていた恋人が、やって来たぞ」そういったのは、旗艦陸奥の士官室に、其の人ありと聞えた 剽軽な千手大尉であった。

「ほほう、どの位、近づいたのか」バットの煙を輪に吹きながら、戦略家の藤戸大尉が訊

ねた。

「主力の位置は、本日の唯今、北緯四十二度、東経百六十五度。北海道の真東、千八百キロというところだ」

「すると、敵艦隊は、今日になつて、進路を急に西の方へ、向け直したことになるぞ」

「藤戸の云うとおりだ」横から相槌を打つたのは、先刻から黙々として、探偵小説に読みふけていた紙洗大尉だった。「布哇から、ミッドウエーの東方沖合を、北西に進んでいた筈だから今日になつて、進路を真西に向けたとなると……」

「そりや、こうサ」藤戸大尉が即座に引取つて答えた。「いよいよ敵艦隊は、吾が艦隊と決戦を覚悟したのだ。これから敵艦隊は、南西へ下りて来るぞ。決戦の日の位置は北緯四十度東経百五十度附近と決つた」

「青森県の東方一千キロ足らずの海上ということになるね」紙洗大尉は、探偵小説を伏せて、いつの間にか、その代りに、海図を拡げ、その上にキャラメルの艦隊を動かしていた。「俺は大したことは望まんが」千手大尉は、ワザと神妙な顔をして云つた。「大航空母艦レキシントン、アルカンター、シルバニアの飛行甲板を、蜂の巣のように、孔をあけてやりたい」

「ウフ、それが大したことでなくて、何が大したことなんだ、あッはッはッ」
 「うわッはッはッ」

聞いていた二人の士官が、腹を抱えて笑い出した。

「何しろ相手は、リング・フォーメーション輪形陣だ、その中心の、そのまた中心にいる航空母艦だ。鳥ち渡よつと、手軽にはゆくまいな」

「輪形陣が、破れまいと、確信しているところが、こっちの附け目さ。ナニ構うことはないから、平気でドンドン、飛行機を進めて行くさ、輪形陣の中に、こっちが入って行けば自信を裏切られて吃驚する。そこへ、着弾百パーセントという特選爆弾を一発、軽巡けいじゆ奴んめに御馳走して、マスト飛び、大砲折れサ、ヤンキーが血を見て、いよいよ腰をぬかしている隙に、すき長駆ちやうく、大航空母艦の上に、五百キロ爆弾のウンコを落とす」

「うわーッ、千手せんじゆの奥の手が始まった。もう判った。やめイ」

「おい千手。それが本当なら、念のために、貴公きこうに先刻報告さつぎのあつた米國聯合艦隊の陣容を、教えといてやろう」紙洗大尉は笑いながら、ポケットから、ガリ版刷ばんずりの「哨戒しょうかい隊報告」を拡げて読み出した。

「第六哨戒艦報告」

「判つとる。俺も覚えていゝるよ」千手大尉が悲鳴をあげた。

「まあいい、聞け。——本艦搭載の偵察機を飛翔せしめ、赤外線写真を以て撮影せしめたる米國聯合艦隊の陣容を報告すべし。先ずメリーランド、コロラド、ウエスト・バージニア、セントルイス、ソルトレーキ以下二十隻の主力艦を中心に、その前方に、大航空母艦レキシントン、アルカンター、シルバニア、レンジアーの四隻、大巡洋艦のポートルンド、ニューオリアンス、イリノイ、フェニックス以下の八隻を配列し、又後方には多数の特務艦を従え、その周圍三十キロの円周海上は、四十キロの快速を持つ小航空母艦の感ある七千噸巡洋艦二十五隻を以て固め、更にその五キロの外輪を、二百隻の駆逐艦隊を配置し、別に八十隻の潜水艦を奇襲隊として引率し、又此の輪形陣の上空六千メートルの高度に於て、メーコン、ラオコンの両飛行船隊を浮べ、飛行機全台數二千機中六百台の偵察機は各母艦より飛翔して輪形陣の進航前方を、交互警戒し、時速三十キロにて北西に向い航行中なり……」

「それが本当なら、こつちも全く、戦い甲斐があるというものサ」千手大尉は、まだ減らず口を止めなかつた。

「敵機三台に対し、こつちは一台の割だな。敢えて恐れるわけではないけれど、數理に合

つているとは、考えられない」藤戸大尉は頭の中に数字を浮べているらしく、独りで呻つた。

「そりや訳があるのサ」又、千手大尉が勢を盛りかえして、籐椅子からスツクリ立上つた。「いいかね、敵機二千機、そりやいいサ。それが一時に飛上ろうとしたって飛び上れるものじゃない。いくら空が広いからって、ページェントじゃないから、蝗が飛ぶようなわけには行かない。まア精々三分の一の六百機だ。六百機が、飛び上つたとしても、彼等の着艦は、頗る困難になる。そういうことは、彼等がよく知っているから、自然尻込みをしてサ、實際現れる飛行機はそのまた三分の一で、二百機サ。ところが、我が飛行将校は、飛行甲板なり、カタパルトから飛び出すことは知っているが、着艦しようなどというケチ臭い根性は持ち合わせていない。二百機が飛び出せば、二百機がフルに働く。ボーイング機が如何に速くともカーチス機が如何に優れた性能を持つてににしても、最後の勝利はこつちのものだ」

「そりや、呑気すぎる説明じゃ」藤戸大尉が、本気になって反対した。

「俺に一説がある」紙洗大尉が、その後について云つた。「三対一の比率は、あまりに甚だしい。しかし軍令部が、見す見す負けるような計画を作る筈もない。そうかと云つて、

いくら吾が飛行機の優秀を見積り、兵員の技能を過信してもこの比率は、あまりに桁外れすぎる。そこで問題の解答は、こうだ。何かこう新兵器があつて、敵機の三分の二を充分に圧迫することの出来る見込みが立っているのだ、トナ」

「いよいよもつて、甘過ぎる話じゃ」藤戸大尉は慨歎した。「俺の考えを最後に附加えるところじゃ。空軍として一時に参加出来るのは六百機、乃ち我れと同数に過ぎぬ。しかし米国艦隊が日本沿岸何百キロの距離に近寄つたところで戦争をすると、日本の海岸警備隊や、陸軍機が、戦争に参加することとなる。それに対しても充分の圧倒が出来る台数をとるので、あの台数が出て来たのだ。又そうなると、日本の陸地の一部を占領することが出来れば、別に元の軍艦へ戻らなくてもいいわけサ。この辺に、三対一の比率が出ていると思う」

「成程ねエ——」

三人三様の議論が丁度一巡したところへ、後の扉がコツコツと鳴って、三等水兵の、真紅な顔が現れた。

「紙洗大尉どの、井筒副長どのが、至急お呼びであります」

「おお、そうか。直ぐに参りますと、そう御返事申上げて呉れい」

紙洗大尉は、傍かたわらの帽子掛けから、帽子と帶劍たいけんとを取ると、身繕つくろいをした。

「直ぐ帰つて来るからな、一服しとれよ」

そう云つて彼は敏捷びんしょうに、部屋から出て行つた。

だが其その紙洗大尉は、二十分経つても、三十分経つても、帰つて来なかつた。一時間の時間が流れても、彼の靴音は、聞えなかつたので、二人の同期の友人は、云い合わせたように立上つた。

「どれ、部屋へ帰つて、今のうちに、辞世じせでも考えて置こうかい」

「俺は、いまのうちに、たつぷり睡つて置こうと思うよ」

そこへ、紙洗大尉が、飛ぶようにして、帰つて来た。

「おいどうした」

「大いに深刻な顔をしているじゃないか」

紙洗大尉は、二人の友人の問を、其儘そのまま聞き流して、ジツと立っていた。

「おい、どうしたのかと云つたら！」

そういった友人の、情深い手は、紙洗大尉の肩にかけられた。

「うん、大したことでは無い」彼は遂ついに口を開いた。「唯ただ、天佑てんゆうというものが今度の場

合にも、お互たがいに必要なのだ。いずれ判るだろうがね」

「ははア、そんなことか」と、千手大尉。

「天佑は迷信ではない。忍耐と努力との極きよくち致いたじや」

藤戸大尉は、帯剣を釣る手を憩やすめて何か重大命令を受けて来たらしい僚友に、哲学じみたことを言った。

外へ出ると、大分風が出ていた。

雲間からヌツと顔を出した弦げん月の光に、高く盛りあがった濤なみ頭がしらが、夜目にも白々と映った。

僚艦も稍難航やなんこうの体で、十度ほど傾斜しながら、艦首から、ひどい浪を被っていた。

鹿島灘かしまなだの護りまも

いよいよ米国大空軍の来襲は、確かになった。

早ければ今夕、遅くとも明日の夕刻までには、敵影が鹿島灘かしまなだに現れることになろうと云うことであつた。これは全国一斉に、ラジオによつてアナウンスされた。新聞記者は、命懸けのテレヴィジョン送影機そうえいきを、モーターボートに積んで、沖合遙かに出て行つた。その後からはボコボコと、エンジンの音を立てて、幾百艘そとうとなく、うす汚れた和船わせんが、同じ方角に出ていったが、これには各々、防空監視員が乗りこんでいた。防空監視員と云つても、完全な男子は出征して国内には居なかつたので、四十過ぎの中老組か、二十歳以下の少年か、さもなければ、血氣盛んなる妙齡みょうれいの婦人達であつた。それは見るからに、重大任務をやりとげるのに充分な人達とは、お世辞にも、云えなかつたが、壮年男子は、予備後備よびこうびといわず補充兵役にあるものまでが召集され、北滿、極東方面に労農ロシア軍と戦い、或いはフィリッピン群島、東北地方北海道に、米国軍と対峙している今日、贅沢ぜいたくを云うわけにはゆかなかつた。

さて問題の、鹿島灘の、一番北の端に、磯節いそぶしで有名な三磯みいその一つ、磯崎町いそざきまちというところがあつた。ここは、家数が四五十しかない、至つて小さい町だつた。町というのが多くは漁師の家で、その外には、数年前からジュラルミン工場が建てられたので、その職工達の家と、それ等の人々のために存在しているような感のあるお湯や、郵便局、荒物屋あらものや、

味噌醬油酒みそしょうゆさけを売る店、米屋などが、一軒ずつ細々と暮しを立てているだけだった。その中で、最も新しい店の一つとして、小さなラジオ店が一軒あった。

「浩さんは、居なさらぬかな」そういつて、店先を覗きこんだのは、この小さな町の町長である吉田清左衛門よしだせいざえもんだった。

「あ、兄は先刻、平磯無線ひらいそまで、出掛けたんでございますよ」そう云いながら顔を出したのは、ここの店をやっている夏目浩なつめひろしの妹にあたる真弓という若い女だった。記憶のよい読者は、彼女が神田のキャバレ・イーグルで、そこがG・P・Uの秘密会合所と知らないで勤めているところを、団員を装よそおって入り込んでいた帆船探偵に助け出され、この国くに許との磯崎へ、送りかえしてもらったことを覚えていられるだろう。

「ああ、それでは——」と、町長の吉田老人は独りで合点がってんをしながら「防空監視哨の電話設備を、平磯無線へ借りにいつて下すつたのだね。いや、こんどは、浩さんが居なかつたら、わし等は、どうしてよいやら、途方に暮れることじゃった」

「いよいよ防空監視哨が出来るんですの」

「お国のために、やらなけりやならんことになりました哩わい。この磯崎は、鹿島灘の一番北の端を占め、しかも町全体が、ブーツと海の真中へ突き出ているから、監視哨には持つて

こいの土地ですよ」

「場所は、どこなんですよ」

「三ヶ所、作れというお達したつでナ、岬に一つ、磯崎いそぎ神社の林の中に一つ、それから磯いそあ合い寄よりに一つ、と都合三ヶ所、作りましたよ。作ったのはよいが、監視哨に立つ人が、足りないので、弱っていますわい哩」

「でも、ジュラルミン工場には、職工さん達が大勢いなさるから、一人や二人……」

「ところが、そうはならぬですよ。ジュラルミンの工場は、なんでも国防用の機械を全速力こしらで拵しらえていましてナ、こつちを手伝つて貰うことは、出来ないのですよ。監視哨をやつてもらふことにすると、それだけ軍需品の補充が遅れることになるそうじゃ」

「まあ、そうですよ。皆さん、案外のんきに呑気にやっついていらつしやるようですが」真弓は、あの工場の職工たちが、勤務時間中でも、その辺をウロウロして、自分の顔をジロリと覗きにくることを思い出して云つた。

「向うは何しろ軍需品工場ということだからこつちから無理に頼むことは出来ないのです
テ」

「じゃ、あたしが、監視哨になりましょうか」

「ええッ、貴女が……」町長が驚いて云った。「貴女がなって下されば、勤つとまると思いますが、実は兄さんにもお願いしてあつたのですが、むしろ貴女には、救護所の方でお手助けが願ねがひたいのです。この方には、貴女のような気き丈夫じやうぶな方が、是非必要です。監視哨は、高い櫓やぐらの上うへに、昼といわず夜といわず上あつて、眼と耳とを、十二分に働かしていなければならぬのです。誰たれかいい人を思おもい付つかれたら、どうか教えて下さい。では、兄さんにはよろしく」

そういつて町長は、帰かへつて行いつた。

(誰か、目と耳との鋭い人は居いないものかしら?)

真弓は、そのまま奥の間にも引込まず、店先で、ぼんやり考えていた。

すると、遠くで、自動車の警笛が聞きえた。聞くとともになしに聞きいていると、どうやら、こちへ近づかづいて来るらしい。この辺では、あまり見懸みけない自動車らしい音ね色いろだつた。

「ほーン、ほーン」

街道の砂煙まりを、パツと一時に、濛も々もと立ち昇あらせて、果はせるかな、立派たな幌ほろ型がた自動車じやうが、二台も続ついて、家の前を通とりすぎた。

「オヤ!!」

彼女は、首を振った。

「あれは、どうやら……」

そこへ、往來おうらいから、七つばかりの男の子が駆けこんできた。

「お母アちゃん。——」

「まあ、三吉。お前、どこで遊んでいたの。いまみたいな自動車が通るところへ、出ちや駄目よ」

「ああ、僕出ないよ。——それで、あの自動車、こんないいものを落としていったよ」

そう云つて三吉は、美しい外国製のチョコレートチョコレートの函を母親の前に見せびらかした。

「あら、そんなものを拾つてきちや、いけませんよ」

真弓は、チョコレートの箱を、子供の手から一旦とりあげたが、不図ふと気付いて、中をあけて検べた。中には、錫箔すずはくに包んだ丸いチョコレートが、たった一個、入っていたばかりだった。彼女は、その錫箔を剥はがしてみた。すると、錫箔の下に、栗色くりいろのチョコレートの無くて、白い紙でもう一重ひとえ、包んであった。その白い紙を剥はがして、皺しわを伸ばしてみると、果して其処そこには、鉛筆の走り書がしてあった。

「東京警備司令部付、帆村莊六氏へ、次のことを、至急電報して下さい。三三二六九

二七五、四三六八、四三二九、四八六九、四三二七、……紅子^{べにこ}」

「ああ、矢張り紅子さんだったんだ！」

真弓は頓^{とんきよう}狂^{きやう}な叫び声をあげて、その小さい紙片を握りしめた。さつき、自動車の幌^{ほろ}の裡^{うち}に、チラリと見せた片^{かた}面^{おも}が、どうも紅子に似ていると思ったが、矢張り^{やは}そうだったんだ。

「母アちゃん、紅子さんて、誰？」

「紅子さんて、母アちゃんのお友達なのよ」

真弓は、紅子から帆村へ宛てた、訳のわからぬ暗号めいたものに、自分でも可笑^{おか}しいほど、何だかイヤな気がしたが、次の瞬間、そんなものは何処かに吹きとばしていた。

ひよつとすると、帆村の探しているものが紅子の手に入った報^{しよ}せなのかも知れないと思つたので、紅子の頼みどおり、一時も早く、東京の帆村へ知らせてやらなくてはなるまいと思つた。

そこへ兄の浩が、フウフウ云いながら、帰ってきた。真弓は手短かに、一部始終を兄に話し、紅子の手紙を東京へ電報することを相談した。

「そりゃ訳はないよ」浩は云つた。

「丁度いま、磯崎の防空監視哨と東京の中央電話局との直通電話を架設して来たばかりだ。あれで話せば、直ぐ東京が出る」

「じゃ、あたし直ぐに行ってみますわ」

「うん」

真弓が外出の支度に、鳥渡帯を締め直していると、奥の間から、

「鳥渡、待ってくれんか」

と声をかけたのは、浩と真弓との父親だった。やがて、建てつけの悪い障子を、ガタガタと開いて、ぎごちない恰好で現れたのは、今年五十九歳になる、両眼の不自由な老父だった。

「お父さん、危いわよ」

真弓が立って、気の毒な父の手をとった。

「お祖父ちゃん。先刻、大きな自動車が二つも続いて通ったよ。そいでネ、綺麗な箱を、おっことして行つただけど、母アちゃんがいけないって、とっちゃったよ」

「おお、そうか、そうか」盲目の祖父は、三吉の声のする方へ手を伸ばした。「三坊、お祖父さんのお膝の上へおいで」

「お父さん、どうかしましたか」浩が怪訝な眼を見張って尋ねた。

「おお、浩も、真弓も、聞いて貰いたいことがあるんだ。外でもないが、いよいよアメリカの飛行機が、この浜の上へ沢山攻めてくるということだが、聞けば、監視に立つ人数が足りない、町長さんの話じゃ。何でも、防空監視哨というのは、眼と耳とが確かならば勤るそうじゃが、其処で考えたことがある。お前達も知っているとおり、わしは元、海軍工廠に勤めていたものの、不幸にもウインチが切れ、灼鉄が高い所から、工場の床にドツと墜ち、それが火花のように飛んで来て眼に入り、退職しなけりやならなくなつて、それからこつち、お前達にも、ひどい苦勞を嘗めさせた。おれはいつも濟まんと思つているよ」

「お父さん、愚痴なら、云わん方がいいですよ」浩が心配して口を挿んだ。

「いや、今日は愚痴ばかり並べるつもりじゃないのじゃ」老父は強く首を振つて云つた。

「そんなわけで、わしは、海軍工廠をやめたが、お国のために尽そうという気持は、更に變らないのじゃ。變らないばかりじゃ無い。先刻のように、折角大事の防空監視哨に立つ人が無いと聞くと、残念で仕方がないのじゃ。そこでわしは考えた。何とかして自分がお役に立つ方法はないものかと。わしは眼こそ見えないが、耳は人一倍に、よく聞こえる。

盲目になつてから、特によく聞こえるような氣持がするのじゃ。だがいくら耳が聞こえるからといって、盲目ではお役に立たない。そこでわしは、相談をするのじゃが、殊ことに真弓に考えて貰いたいと思うのじゃが、わしは孫の三吉を連れて監視哨の物見台へ上ろうと思ふのだよ」

「ああ、お父さん、そんなこと、いけないわ」

「なあに、わしのはことは、心配いらぬよ。こんな身体でお役に立てば死んでも本望ほんもろうだ。

ただ三吉を連れて行くのは、可哀想でもあるけれど、あれは案外平気で、行つて呉れるだろうと思う」

「そうだよ。お祖父じいちゃんとなら、どこへでも連れてつて貰うよ」無心の三吉が、嬉しそうな声をあげた。

「三吉は、まだ七つだけけれど、恐ろしく目のよく利く奴さ。三吉の目と、わしの耳とを一つにすると、一人前いちにんまえの若者よりも、もつといいお役に立つかと思う位だよ」

「三吉は、小さいときから、父親のない不幸な子だ。それを又ここで苦しめるのは、伯父として忍びないです」

「ああ、兄さんも、お父さんも、ありがとう。どつちも、三吉の身の上を、それぞれ思つ

ていて下さるのです。あたしは決心しました。三吉も、お祖父さんと行きたいと云っている位だから、あたしは母親として、それを許しますわ。今は、日本の国の、一つあっても二つあるとは考えられない非常時です。この磯崎では、一人の三吉を不憫ふびんがつていますけれど、あすこから電話線を伝つたつて行つたもう一つの端の東京には、三吉みたいな可愛い子供さんが何十万人と居て、同じようにアメリカの爆弾の下に怯おびえさせられようとしているんです。そのお子さん達の親たちは、お父さんも、あたしのような母親も、どんなにかせめて子供達だけにでも、空襲の恐怖から救つてやりたいと考えていらつしやるか知れないんです。あたしはそれを思うと、その大勢の同胞のために、喜んで三吉を、防空監視哨やぐらの櫓やぐらの上に送りたいと思います。いいでしょう、兄さん」

「それは立派な覚悟だ」浩は熱い眼めがしら頭こぶしぬぐを、拳こぶしぬぐで拭いながら返事をした。「建国二千六百年の日本が滅亡するか、それとも生きるかという重大の時機だ。私はお前の覚悟に感心をした。それと共に、年老いたお父さんの御決心にも頭が下るのを覚える。では、お父さん、三ちゃん、行つて下さいますか」

「よく判つてくれて、こんなに嬉しいことは無い」老父も流石さすがに、感極かんきわまって泣いていた。

「なア、三坊、お祖父さんと一緒に、日本の敵のやってくるのを張番はりばんしてやろうな」

「ウン、あの磯崎神社いそさきじんじやの傍わきやぐらの櫓やぐらなら、さつきよく見てきたよ。お祖父ちゃんと一緒に昇あれるのなら、僕、嬉しいな。アメリカの飛行機なんか、直ぐ見付けちゃうよ。ねえ、お祖父じいさん」

「おお、そうだ、そうだ」

三吉の無邪気な笑いに、一家は喜んだり、泣いたりした。

「真弓、もう時間もないことだ。さア急いでお前は、東京へ電話をかけるんだ。僕は町長さんのところへ行つて、お父さんと三ちゃんの志願のほどを伝えて来よう」

「そう、愚ぐずぐず愚ぐずぐずしてられないわねエ」

二人は、弾条仕掛ばねじかけのように、立上った。

太平洋の大海戦だいかいせん

正確にいうと、昭和十×年五月二十一日の午前十一時五十分日米両艦隊は、いよいよ真正面から衝突したのであった。地点は、正しく北緯四十度、東経百五十度附近の海上で、青森県を東へ行くこと九百キロのところだった。

主力の距離は、まだ五万メートルからあつて、火蓋を切るところまでは行かなかつたけれど、隊形は、米艦隊が飽くまで南西の進路を固執し、一挙鹿島灘から東京湾を突こうというのに対し、我が日本艦隊は真南から襲い懸つて、一艦一機を剩さず、太平洋の底に送り込もうというのであつた。

航空母艦から飛び出して、敵艦隊の動静を窺つていた両軍の偵察機隊が、定石通りぶつつかつて行つた。真先に火蓋を切つたのは、米軍軍だった。シャボン玉でも吹き出した様に、パツパツと、真白な機関銃の煙が空中を流れた。わが偵察機は、容易に応射の気配もなく、無神経に突入して行つた。

真下の海上では、米軍の偵察艦隊が漸く陣形をかえ、戦闘隊形へ移つて行く様子であつた。これに対して米軍の駆逐艦隊は可也高い波浪にひるんだものか、それとも長い航洋に疲れを見せたものか、ずっと側面に引返して行つた。

日本艦隊の加古、古鷹、衣笠以下の七千噸巡洋艦隊は、その快速を利用し、那智、

羽黒、足柄、高雄以下の一万噸巡洋艦隊と、並行の単縦陣型を作つて、刻々に敵艦隊の右側を覘つて突き進んだ。

その背後には、摩耶、霧島、榛名、比叡が竜城、鳳翔の両航空母艦を従え、これまた全速力で押し出し、その両側には、帝国海軍の奇襲隊の花形である潜水艦隊が十隻、大胆にも鯨の背のような上甲板を海上に現わしながら勇しく進撃してゆくのであつた。

そのまた左翼にやや遅れて、我が艦隊の誇るべき主力、旗艦陸奥以下長門、日向、伊勢、山城、扶桑が、千七百噸級の駆逐艦八隻と航空母艦加賀、赤城とを前隊として堂々たる陣を進めて行くのであつた。

別動隊の、大型駆逐艦隊は、やや右翼前方に独立して、米國潜水艦隊を警戒すると共に機会さえあれば、敵陣の真唯中へ、魚雷を叩きこもうとする気配を示していた。

艦数に於ては劣っているが、永年全世界の驚異の的である此の「怪物艦隊」は、待ちに待つたる決戦の日を迎え、艦も飛行機も兵員もはちきれような、元氣一杯に見えた。旗艦陸奥の檣頭高く「戦闘準備」の信号旗に並んで、もう一連の旗が、するすると上つて行つた。

「うむ」

「おお」

艦隊の戦士たちは、言葉もなく、潮風しおかぜにヒラヒラとひらめく信号旗の文句を、心の裡うちに幾度となく、繰返し読んだ。

「建国二千六百年のわが帝国の存亡そんぼうこ此の一戦に懸る。各兵員夫れ奮闘せよ」

おお、やろうぜ！

さア、闘おうぞ！

大和民族の腕に覚えのほどを見せてやろう。

一死報国！

猪口才ちよこさいなりメリケン艦隊！

——各艦の主砲は、一齐にグングン仰角ぎょうかくを上げて行つた。

弾薬庫は開かれ、砲塔の内部には、水兵の背丈ほどある巨弾が、あとからあとへと、ギツシリ鼻面はなづらを並べた。

カタパルトの上には、攻撃機が、今にも飛び出しそうな姿勢で、海面を睨にらんでいた。艦橋の上に、器用に足を踏まえている信号兵は、目にも止まらぬ速さで、手旗を振って

いた。

高い檣ほはしらの上からは、戦隊と戦隊との連絡をとるために、秘密の光線電話が、目に見えない光を送っていた。

ぶるん、ぶるん、ぶりぶりぶり——

航空母艦の飛行甲板からは、一台又一台と、殆んど垂直の急角度で、戦闘機が舞い上つてゆくのであった。灰かいはくしよく白色の機翼に大きく描かれた真赤な日の丸の印が、グングン小さく、そして遠くなつて行つた。

一隊又一隊と、空中では何時いつの間にか、三機、五機、七機と見事な編隊ととのを整え、敵の空中目指して突入して行つた。

遥はるか後方からは、爆撃機の一隊が、千メートル、千二百メートルと、だんだん高度を高めて行くのが見えた。厚いフロートのついた大きな飛行艇は、やっと波浪の高い海面から離れ、主力艦の列とすれすれに飛んでいた。

一秒一秒と、両軍の陣形は、目に見えて著いちじるしい変化を示して行つた。息づまるような緊張が、兵員たちの胸を、ビシビシと圧しつけて行つた。

ぱッ、ぱッ、ぱッ、ぱッ——

敵軍の偵察艦隊から、殆んど同時に、真黄色な煙が上った。十門宛の八吋砲が、一斉に火蓋を切ったのだった。

ど、ど、ど、どーン。

ぐわーん、

加古、古鷹、青葉、衣笠の艦列から千メートル手前に、真白な、見上げるように背の高い水煙が、さーつと、奔騰した。どれもこれも、一定の間隔を保って、見事に整列していた。もう千メートルほど、近かつたら、我が軍の精鋭なる巡洋艦隊は、可也大きい損傷を蒙る筈であった。

五秒、十秒、十五秒、煙りが、斜横に、静かにずれて行った。

シカゴ、ルイズヴィル、ハウストン、イリノイ、フェニックスの砲口は、次の射撃に備えるために、じわじわと仰角をあげて行くのが見えた。

司令艦衣笠の司令塔からは、全艦へ向つて急遽命令が伝達された。

「全速力三十六節！」

驚くべき命令が発せられた。

給油管は全開となり、唧筒はウーーンと重苦しい呻りをあげ激しい勢いで重油がエン

ジンに噴きこまれて行つた。ビューンとタービンは、甲高い響をあげて速力を増した。機関室の温度計の赤いアルコール柱はグングン騰つて行つた。

途端に、艦列を斜めに外れて、又一連の水煙りが上つた。二度目の砲弾が降つて来たのだった。照準は、最初よりも狂いがひどく入つて来たので、敵艦隊は、明かに狼狽の色を見せはじめた。

「取舵一杯」

司令艦の衣笠から青葉、古鷹という順序で見る見るうちに、艦首が左へ、ググツと曲つて行つた。

キリキリキリー

それに応じて、六門の主砲が、右舷の方へ旋回して行つた。

測距儀に喰い下つている士官は、忙しく数字を怒鳴っていた。砲術長は、高声器から、射撃命令を受けると腕時計を見守りながら電気発火装置の主桿を、ぐツと握りしめた。

(もうあと、五秒、四秒、三秒、二秒……)

もう一秒だツ。

「そこだツ！」

うーんと主桿を倒した瞬間に、くらツくらツと眩むような閃光が煌々と、続いてずしーんと司令塔が真二つに裂けるような、音とも振動ともつかない大衝動が起った。

「うう、見事に命中！ おお、シカゴは、弾薬庫をやられて、爆発を始めたぞオ」

「うわーッ、万歳」

「万歳はまだ早い。止めの一弾を、早く用意せいッ」

主砲係りの兵員は、火薬の煙に吹かれた真黒な顔の中から、キリリと白い齒列を見せて、一弾又一弾と、重い砲弾を装填していった。

敵の最前列を占めていた巡洋艦隊は、次第に列を乱して行つた。

その隙を目懸けて、摩耶を司令艦とする高雄、足柄、羽黒などの一万噸巡洋艦は、グングン接近して行つた。的と覗うは、レキシントン級の、大航空母艦であつた。

しかし、米国の誇りとする軽巡洋航空母艦隊は逸早くその企てを知つて、ますます空中に数を増す空軍の中から、快速力と爆撃力とに優れたカーチスの攻撃機隊の六隊四十二機に命令して、那智、羽黒の艦上に襲いかからしめた。

これを見て取つた我が竜城に属する三六式戦闘機隊は、二十四機が翼を揃えて、見る見る裡にカーチス機隊の上空を指して急行した。

敵のボーイング機隊が、北方に流れる浮雲の中から現われて、これを圧迫する態度を示した。

その隙に大航空船メーコン号、ラオコン号の側面に我が飛行艇隊が近づいて行つた。メーコンとラオコンとの艦腹に開く強力なる機関砲は、鼻を並べて、殷々たる砲撃を開始した。

日米両艦隊の戦鬪は、いまや順序を捨て、予測を裏切り、いずれが進むか退くか、俄かに計り知ることの出来ない疑問符号に包まれた。

胸をふさぐような煙硝の臭い、叫び声をあげて擦り脱ける砲弾、悪魔が大口を開いたような砲弾の炸裂、甲板に飛び散る真紅な鮮血と肉塊、白煙を長く残して海中に墜落してゆく飛行機、波浪に吞まれて沈没してゆく艦艇から立昇る真黒な重油の煙、鼓膜に錐を刺し透すような砲声、壁のように眼界を遮る真黄色の煙幕、——戦鬪は刻々に狂乱の度を加えて行つた。

その頃、米國艦隊の主力は、十六隻の単横陣を作り、最も後方にいたが、漸く三万五千メートルの射程に入ろうとして、専ら注意力を、前方に送っていた。

旗艦セントルイスの司令塔の奥深く、聯合艦隊司令長官ブラック提督は、移りゆく戦

況を、主要なる艦艇から送られているテレヴィジョンによって、注目していた。

「戦況を、五分五分に保ち得ているところを考えると、最後の勝利は、わがアメリカに在ることが明瞭じゃ」提督は静かに幕僚を顧みて云った。

「同感申しあげます、我等の閣下」

「わが空軍の活躍は、アクロン号、いや、こいつは、間違った——ロスアンゼルス、バタビウス、サンタバーバラの飛行船隊と合することによりて、絶頂に達することじゃろう。

この空軍だけでも日本全土を、征服してしまうことは、訳のないことじゃ。艦隊の主力たる我が艦列の、彼に勝ること一倍半なることは、此後の戦況に、大発展を予約しているものじゃ。要するに日本海軍というも、日本人というも、栄養不良のヒステリー見たいなものだ。布哇ハワイを見い。あれだけの日本人が居つてグウの音も出ないじゃないか。尤も我が米軍の警戒も、完全にやっているせいもあるが、そこへ持つてきて、此の海戦地点たるや日本の海岸を去る七百キロという近さじゃ。ちよいと手を伸ばせば、日本の本土に手が届く。艦上機も、着艦の心配は無用じゃ、一と思いに、日本の飛行場を占領して降りればよい」

「ですが、閣下、日本の飛行場は、到底我等の飛行機全部を収容しきれんだろうと考えますが……。例えばハネダ飛行場にしましても……」

ここまで喋^{しゃべ}ってきたとき、けたたましいベルが鳴り渡ると共に、コロラドと書いた名札の下に、赤いパイロット・ランプが点いて、専属高声器が、周章^{あわ}てふためいた人声を発した。

「提督閣下^{ていとくかつか}。わがコロラドは、急速に沈下しつつあります。機雷に懸ったものか、魚雷を受けたものか、附近の兵員からの報告がありませんので、目下取調べ中であります」

「なに、コロラドが、沈没を始めた。何を油断していたのじゃ」

そこへまた、チリリリとベルが、鳴って、其の隣のウエスト・バージニアのところに、赤いランプがついた。

「こちらは、ウエスト・バージニアです。唯今潜水艦から、魚雷を喰ったようであります。直ぐに救援隊を御派遣ねがいたい」

「莫迦^{ばか}な奴じゃ」提督は、いよいよ苦^{にが}虫^{むし}を噛んだような顔をした。演習ではあるまいし、救援が出来るものか。それにしても潜水艦とは、可笑^{おか}しいな、敵の潜水艦は、先刻からみているが始めの位置を動いたのは、一^{いっ}隻^{せき}も居ない筈^{はず}じゃが……

提督が、不審顔で、頤^{あご}に手を当てた其の瞬間だった。

めり、めり、めりッ——

司令塔が、馬の背から振り落されでもしたかのように、ひどい傾斜と共に、ガラガラと器物が転落を始めた。

「ど、どうしたッ」提督は、思わず椅子の上から突立つて、サツと顔色を変えた。

「日本の潜水艦だッ」

「もう二分と経たない間に沈んでしまうぞ」同室の将校達は、奇声をあげて、非常梯子の滑り金棒に飛びつく^{すべ}と吾勝ち^{われが}に、第一甲板^{かんばん}の方を目懸けて、降りて行った。

提督は一人残されてしまった。高声器が間に合う筈だったのに、今日に限って、ウンともスンとも鳴らない。彼は覚悟^{かくご}を極めて、安全硝子の貼^{ガラス}つてある窓の傍に駈けつけた。そのとき下から、三等水兵が、真赤な顔をして上ってきた。

「閣下、本艦は日本潜水艦に、舵器^{だき}を半数破壊されました。従^{したが}って速力が半分に減じまするから、至急、隣に居りますソルトレーキへ御移りを願います」

「なに、本当に潜水艦か！ おお、あすこの水面へ浮び上った。呀^あッ、イ型一〇一号^{!!}!!
すると曩^{さき}にカリフォルニアの沖合で、襲来した自由艦隊の生き残りじやな。あのととき一〇

一号は射ち止めたと思つたのに……」

「閣下、お早くねがいます」

「莫迦ぼかなことを云え。砲術長は何をしているのじゃ。あの潜水艦を、何故早く射撃しないのじゃ。あれがマゴマゴしている裡うちに、旗艦移乗きかんいじようなんて、どうして出来るものか」

司令塔の外へ出てみると、混乱は更にひどかった。主力艦の列を、背後から不意に、まったく勘定に入れてなかった幽霊潜水艦隊から攻撃をうけたものであるから、驚くのも無理ではなかった。

ひよつくり現れた伊号一〇一潜水艦は、大胆不敵にも、大混乱を始めている主力艦の後方に浮び上り、永らく中絶していた味方の艦隊との連絡をつけるために、搭載とうさいしていた飛行機を送り出すと、手際てぎわも鮮あざやかに、再び水底深く潜航して行った。

潜水艦から離れた艦上機の操縦席については、別人ならぬ花川戸はなかわどの鼻緒問屋はなおどんやの二番息子の直二なおじであった。前に戦死と認知にんちされて、死亡通知の発せられた幽霊人ゆうれいじんだつた。しかし彼は傷きずいた艦と共に、辛苦を分かち、墨西哥メキシコの某港ぼうこうによつて秘かに艦の修理に従事し、その完成を待つて、再び太平洋の海底にもぐり、僚艦と一緒に、秘密の行動についていたのであつた。

直二と先任将校の乗っている艦上機は、予定通り、近所を航進中の、駆逐艦山風やまかぜに救い上げられた。山風は直ちに隊列を離れて、旗艦陸奥きかんむつに向けて急航して行った。やがて彼

等は、大鳴門司令長官の前に立つて、米艦隊の退路を絶つ機雷の敷設状況と、なお布哇攻略の機が如何に熟しているかを、審さに報告することであろう。

それは後のこととして、主力艦を瞬時の裡に、三隻までも失った米艦隊は、やつと東洋遠征に誤算のあったことを気付いた。と云つて、此処まで来て引上げることが許されないことであつた。ブラック提督は、海軍の敗戦を、何とかして、空軍の強襲によつて、取戻そうと決心した。

彼は嚴然たる威容を、とりもどして、即時全空軍に命令を発した。

「今より吾が米國聯合艦隊所屬の空軍二千機は、一機をも剩すところなく直ちに艦上を離れ、空中に於て強行戦闘隊形を整え日本艦隊及びそれに屬する空軍とを撃破し、以て吾が艦隊の不利なる戦績を救済すべし。尚余力あるに於ては、長駆カシマ灘よりトキーヨー湾に進撃し、首都トキーヨー及びヨコハマの重要地点を攻撃すべし。ブラック提督」この一大決心を含めた命令が各隊に伝わると、飛行隊の将卒は、非常なる感激に打たれた。六対十の比率に安心していたのも空しく、今自分達が出て奮戦しないと、この儘懐しい故郷へ帰れないことになるらしいのであつた。残された唯一つのチャンスを掴むことについて、不熱心になるものは誰一人として無かつた。

「さア、ジャップの奴を、のしてしまえ」

「行こう、行こう。メリーのために」

忽ち米艦隊の真上には、蜜蜂みつばちの巣を突いたように、二千台の戦鬪、偵察、攻撃、爆撃のあらゆる種類を集めた飛行機が一齐に飛び上った。天日は俄かに暗くなった。

これに対して、精銳を謳うたわれた皇軍の飛行機は、三百台ばかりが飛んでいたが敵の大空軍に較べて、なんと見窄みすぼしく見えたことであつたか。流星さすがに沈着剛毅な海軍軍人たちもこの明かな数量の上の不釣合に重苦しい圧力を感じずにはいられなかつた。

勝敗は、何処いずこへ行く？

愛国者よ頑張がんばれ

千葉県を横断して、茨城県に通ずる幅の広い県道を、風を截きつて驀進ばくしんする一台の幌自動車があつた。スピード・メーターの指度は四十哩マイルと四十五哩との間に揺めゆらめているほど

の恐ろしい高速度であった。

「もう水戸が見える筈だ」そう云つたのは、賊を追つて、お茶の水の濠傍から、戸波研究所の地下道を突撃して行つたことで顔馴染の、参謀草津大尉であった。

「まだ飛行機は見えないようですな」張り付けられるような窓外へ首を出したのは、例の私立探偵帆村莊六に外ならなかつた。

「ねえ帆村さん」もう一つの声が、隅ツ子のクツションから聞こえた。大きな図体の男、それは戸波博士の用心棒だつた筈の山名山太郎であつた。「先生は、大丈夫でしょうな」「なんとも云えない」帆村は、唇を僅かに綻ばして云つた。「なにしろ用心棒の山名山太郎氏が傍にいないものだからネ」

「もうそいつは言いつこなしにしましょう」

山太郎は極りわるそうに頭を抱えた。

どうやら一行の目的は、国宝の科学者戸波博士を捜し出そうということにあるらしい。

「茨城県磯崎に『狼』の巢を見付け出したのは、何といても驚嘆すべきお手柄だ」草津大尉は、前方を注視しながら、独言のように云つた。

「いやそれは二人の女性の手柄なんです。一人は危険を覚悟で『狼』の身辺につきま

っている紅子べにこというモダン娘、もう一人は、紅子の密書を拾って逸いち早く僕のところへ通報して寄越した真弓まゆみという若い女」

「ほほう、密書を拾って通報したのは女性なのかい。すっかりした女だなア」

「……」探偵は無言で微笑びくしやうをした。「僕は結局大した働きもありませんでしたよ。磯いそ

崎きのジュラルミン工場のオヤジが、狼ウルフであることを偶然発見したこと位です」

「あれは特筆すべきお手柄だったが、よく判ったものだね」

「草津大尉どの。太平洋戦争の其後の模様はどうになりました？」

「偵察機隊が火蓋を切ったそうさ。海軍の策戦さくせんが凶に当って、敵軍は稍やや疲れが見える

そうさ。しかし勝敗はまだどこへ行くとも判っていない。だが少くとも戸波博士を、ここ

一二時間の裡うちに奪還できない限り、帝国の勝算は覚おぼ束つかない」

「先生を悪人が殺すようなことは、無ねえでしようか」

山太郎が又心配した。

このとき前方に注目していた帆村探偵が、突然叫んだ。

「草津さん、妙なものが、向うからやって来ますぞッ」

「ほほう、ありや牛乳運搬自動車らしいな」

「ところが大尉どの、御覽なさい、牛乳車の癖に莫迦ぼかにスピードを出していますよ」
「五十哩マイルは出していますよ」運転手が云った。「すこし危いですが、この調子でつっぱしらせてようございますか」

「構わん、やれツ」

「承知しましたツ」運転手は巧みに把手ハンドルを操あやつった。彼の頸筋くびすじには、脂あぶら汗あせが浮んで臙やがてタラタラ流れ出した。

距離はだんだん迫つて来た。

二千メートル、千メートル、五百メートル……。

「呀ツ、『狼』ウルフの奴だ！」帆村が躍りあがつて叫んだ。

「なに、ウルフかつ」大尉は叫んだ。「後藤、力一杯ブレーキをかけて左側の水田すいでんの中へ自動車を入れるツ」

そう命令すると、大尉は座席の横から一抱かかえもある鎖くさりを、車外しゃがいに抛ほうり出した。途端に、車体はぐぐつと曲つた。そして、大きな水煙りをあげると、どすんと水田の中に、急停車した。

「それツ、皆、飛び出せツ」

出てみると、そこから三百メートルと距^{へだ}つていないところに「狼^{ウルフ}」の乗っていた牛乳自動車が車輪に釘^{くぎ}の出ている鎖^{くさり}を擲^くせ水田の中に頭部を突入して動かなくなっていた。

駈^うけつけてゆく裡^{うち}に、牛乳車の函^{はこ}車^{くるま}が内からパクリと開いて牛乳缶の代りに、四五人の怪漢が、ドツと飛び出して来た。言わずと知れた「狼^{ウルフ}」の配下の者だった。

「狼^{ウルフ}」も運転台から、泥まみれになつて降りて来た。その手には、ブローニング拳銃^{ピストル}を握^{にら}つて、こつちを睨^{にら}んで立つた。

こつちには、後藤運転手の手に、軽機関銃^{けいきかんじゅう}が握^{にら}られていた。

「手をあげろッ」大尉は怒鳴^{どな}つた。

いくら大胆不敵な者^{ものども}共であつても、機関銃には叶^{かな}う筈^{はず}が無かつた。彼等は、静かに手をあげた。

「オイ狼^{ウルフ}」大尉は降服者の前に立つた。「いよいよお気の毒な運命になつたネ。ところで戸波博士を渡して貰^{もら}いたい」

「戸波博士は亡^なくなられた」狼^{ウルフ}が沈痛な面持をして答えた。

「えッ、博士は亡^なくなられたというのか。帝国の運命は、遂^{つい}にああ……」

「莫迦^{むか}を云うなッ、卑劣漢^{ひれつかん}」狼^{ウルフ}のうしろから帆村が怒鳴^{どな}つた。

「大尉どの、博士は健在です。牛乳車の奥に、監禁されていましたぞオ」

「なに、博士が……」

なるほど頤髯あごひげに見覚えみおぼのある戸波博士が、帆村の手によって牛乳車の中から助け出されていた。

「やッ」どこに隙間すきまを見出したのか、「狼」は大尉の脇の下をくぐって、猛然と博士の方へ飛び掛った。

「なにをツ」山太郎が横合いからムズと組付いた。

この機会を外はずしてはというので「狼ウルフ」の配下は、一度に反抗してきた。最早もはや機関銃もピストルも間に合わなかった。敵味方は肉体を以て相手の上に迫って行った。

乱闘、又また、大乱闘。

どこから飛んで来たのか、乱闘の現場に近く、一台の偵察機が、低く舞まい下さがって来た。誰も気付かぬ裡うちに、機体からスルスルと、繩梯子なわばしごが下ろされ、やがて飛行服に身を固めた人が、機上から姿を現わすと、一段一段と、梯子を下りて行った。とうとう一番下の段まで来たときに、上を向いて合図をした。

この不思議な飛行機は、宙乗りの人物を釣り下げた儘、乱闘の真唯中まっただなかを目懸けて、い

よいよ低く舞い下ってきた。プロペラを急に停めたのは、速度を下げるためだと思われたが、何という大胆な振舞ふるまいであろう。一体、何をしようというのか。

敵も味方も、突然飛びこんで来た怪物に、ソレと気がついて遡たじろいだ。

「呀あッ」

という瞬間に、宙乗りの人物は、右手めてを横にグツと伸ばすと、戸波博士をヤツと抱きあげた。博士の両足は、地上を離れた。

それを合図のように、飛行機は、又漠々ぼくぼくたるプロペラの響をあげ、呆気あつけにとられている「狼ウルフ」の一団を尻目に、悠々と空中へ舞い上っていった。

「これで、祖国は救われたッ」

草津大尉が、沈痛な声を発して、ハラハラと涙を流した。

「さア、これで安心して、やつつけてやるぞオ」山太郎が「狼ウルフ」の腕をねじあげた。

「大尉どの、磯崎へ急ぎませう。どんなものを拵こしらえているか、心配です」そういったのは帆村探偵だった。

陸軍偵察機の繩梯子の上では、戸波博士と警備司令部の快漢塩原参謀とが、感激の色を浮べて、挨拶かを交わしていた。

くうしゆうそうそうきよく
空襲葬送曲

磯崎神社前の海辺に組立てられた高さ五十尺の櫓の上には、薄汚れた一枚の座布団を敷いて、祖父と孫とが、抱き合っていた。

「三ちゃんや、まだ何にも見えないかい」眼の不自由な老人が、優しく尋ねた。

「うん、まあだ、何にも見えないよ。おじいちゃんのお耳にはまだ飛行機の音は聞えないの」

三吉は大きな黒眼をグルグル動かして、下から祖父の顔を見上げた。

「飛行機の音はしないけれどネ、大砲の音はだんだん近くなつて来たよ。プロペラの音は小さいから、飛んでいても中々区別がつかないのだよ。三ちゃん、見落さないように、左から右へと、ソロソロ見廻わしているのだよ」

「ああ、いいよ。僕、早く見付けて、伯父さんの拵えたこの電話機でネ、東京に住んでい

る人と話をしたいの」

「そうか、そうか」

「さつき僕と話をした東京の人は、お姉ちゃんだったよ」

「電話局の交換手さんだからネ、交換手はお姉ちゃんに極きままっているのだよ」

「そのお姉ちゃんに僕、訊きいてみたの。お姉ちゃんには、お母ちゃんと、せいからお父ちゃんもいるのツて尋たずねたらネ……」

「うん」

「お父ちゃんも、お母ちゃんも居る筈なんだけれどネ、アメリカの飛行機が爆弾を落とすと、お家を焼いちやつたもんだからネ、どこへ行つちやつたか、判らないのツて云つてたよ。可かわい哀そう想だねーエ」

「——オヤ、これは……。おう、プロペラの音が聞こえる」

「ああ、見える、見える。一つ、二つ、三つ……」

「方角は、真ま東ひがし。おや、こつちの方にも聞こえる。三ちゃん。船神磯せんじんいその方には、何か見えないかい」

「船神磯の方？ ああ、来たよ来たよ。飛行船が三つ——随分高く飛んでいるよ。おじい

ちゃん、電話を懸けていい！」

「そうじゃ、そうじゃ。間違うといけないから、落着いて掛けるのだよ」

やぐらうえ

櫓の上に、リリリリンと、可愛い呼鈴よびりんの音がした。盲目の老人と、幼い子供の協力

によつて、警報は発せられた。真東から襲いかかるは、太平洋戦崩れくずの、爆撃隊であろう。

北の方から、しずしずと下つて来るのは、アラスカを通つてきた飛行船隊に違いない。磯

そとぎみさき

崎岬の、この可憐なる防空監視哨は、思い懸けない大手柄を樹たてた。少くとも三百万

の帝都人は、直ちに、避難と防毒の手配に着手することができた。所ところざわ沢たちかわと立川との

飛行聯隊、霞ヶ浦かすみうらと追浜おつばまの海軍航空隊、それから東京愛国防空隊の二十機は、一斉に飛

行場から空高く舞い上つた。

はくじつ もと

白日の下の大空襲！

二千機に余る精鋭なる米国空軍の襲来！

十五万キロ瓦の爆弾を抱えた悪魔空中艦隊！

この大空襲の報を耳にした帝都の住民の顔色は、其の場に紙の如く青褪あおざめたであろうか。

いな 否！ 否！

先の空襲で、全市に互わる爆撃をうけたときは、覚悟していた以上の惨害さんがいを蒙こうむつたので、

一時は気が変になつたほどだった。しかし、自分の懐かしい家は無くなり、美しい背広も、丹精した盆栽も、振りなれたラケットもすべて赤い焼灰に変わってしまったことがハッキリ頭に入ると、反つて不思議にも胆力が据つてきた。

こうなつたら、非戦闘員も、戦闘員もあるものか。男も女も無い。子供も老人もない。障害者も病人もない。銃の引金を引く力の残っている者は、銃をとつて前線に出ろ！ 防毒薬のバケツを下げる力のある者は、救護班に参加しろ！

——こうして、第一回の空襲によつて大和魂を取戻した市民たちは、眼の寄るところへ玉の比喩で、だんだんと集り、義勇隊を組織して行つた。それには出征に、取残された男は勿論のこと、女もあれば、老人もあつた。帝都の秩序は、平時以上に恢復した。涙を流している者は、一人も見当らなかつた。皆が皆、燃えるような愛国心、鉄のような忍耐力を持つて兇暴な敵の空襲に立ち向つたのであつた。

国民のこの盛んなる意気は、敵艦敵機を向うに廻して奮戦している太平洋上のわが兵員の上にも、響いていつた。

攻撃力の弱い旧型駆逐艦の如きは、敵の航空母艦に撃沈されるのは覚悟の上で、それでも万一天佑があつて撃沈までの時間が伸びるようだったら、その機を外さず、下瀬火

薬のギツシリ填った魚雷を敵艦の胴中に叩き込もうと、突進して行つた。

潜水艦の機関兵員は、熱気に蒸された真赤な裸身に疲労も識らず、エンジンに全速力をあげさせ、鱧のように敏捷な運動を操りながら、五度六度と、敵の艦底を潜航し、沈着な水雷手に都合のよい射撃の機会を与えたのだつた。

砲煩の前へ、ノコノコ現われて、敵弾から受けた損傷の程度を調べに行つた水兵があつた。

一番砲手も、二番砲手も、皆倒れてしまうと、その後から信号兵が一人現れて、不慣れた砲撃を続けたという話もあつた。

だが、どうにもならなくなつたのは、敵の空軍の圧倒的偉力だつた。

敵艦を沈没させるのは自信があつたが、敵機を射ち落すことは、中々うまくゆかなかつた。そのうちに、味方の飛行隊の隙を覘つて押し寄せた爆撃隊から、多量の爆弾が切つて落されると、偉力を誇る十六吋砲も、鉛のように曲つてしまつた。

この調子が永く続くと、敵艦隊を圧迫した我が艦隊は、遂に反対の悲運に陥らなければなるまいと思われた。

「見ちゃいられんな」陸奥の艦上三千メートルの上空に、戦闘機を操縦し、防戦につとめ

ている千手大尉が舌打ちした。

「いまいましいメリケン空軍の奴やつぱら原だ」

その慄ひよかん悍かんなる敵機の一隊は、目標を旗艦陸奥むつに向けて、突入してきた。

「やってきたなツ。吾輩の射撃の腕前を知らないと見えるな」

千手大尉は、照準を敵機の司令機の重油タンクの附近につけた。出来るなら、陸奥の艦上から、敵機を離したいと思つたが、それは反かえつて容易に、敵の爆撃に委まかせるようなものであつた。万一のことを思うと、鳥渡ちよつと、慄然りつぜんとしないわけに行かなかつた。

(旗艦陸奥きかんむつが、爆沈されたらば、わが艦隊の士気は、どんなに喪うしなわれることだろう!) 楽天家の大尉も、今日ばかりは、不安に思わずにはいられなかつた。

だが、事ここに至つて、躊躇ちゆうちよはいけない。

「戦闘用意!」大尉は、僚機の方へ、手を振つて合図をした。

「戦闘始めイツ!」

エンジンを全開にして、宙返りの用意を整ととのえながら、全速力で敵機へ突入した。

敵は早くも機首を下げて、襲撃の形を示した。

そのとき、極めて不思議なことが起つた。まだ二聯装れんそうの機関銃の引金を引かないのに、

向つてきた敵機は、爆弾でも叩きつけられたかのように、機翼全体に拡がる真赤な火焰に裹つまれ、木の葉のように、海上目懸けて、墜落して行つた。大尉は、まるで狐につままれのような気がした。始めて気がついて、すこし遠くの空間を見廻わすと、これはどうしたというのだろう。あちらでもこちらでも、まるで松たいまつぎ明ぎょうれつ行列を見るように、米軍の大小の飛行機が、火焰に包まれ、真黒な煙を蒙もうもつ々と空中に噴き出しながら、海面へ向けて、落ちて行くのが見えた。

途端に――

「ぶわーッ」

大尉は機胴きじょうに、恐ろしい衝動を感じた。

「やられたかッ」

大尉は、それでも、反射的に水すい平へい舵だを引いた。

「おお、あれはメーコン号だッ」

覚悟をした大尉の戦闘機は、何の苦もなく平へい衡こうをとりかえし、何事も無かつた。

大尉を驚かせたのは、米艦隊の最さいしやう上じやうの空に、守まもり神がみのように端たん然ぜんと游ゆう泳えいをつづ

けていたメーコン号が、一団の火焰となつて、焼け墜ちてゆくのを発見したことだつた。

「うん、判ったぞ才。これは怪力線かいりよくせんに違ちがいがない。噂うわさに聞いた怪力線の出現。ああ、そうだ。紙洗大尉の奴、井筒副長から何か言われてたつけが、あれが『天佑てんゆう』の正しょうた体たいなんだな」

真下を見ると、陸奥の艦橋かんきように、何だか見慣れない奇妙な形の器械が、クルクルと廻転しているのが見えた。そうだ。佐世保軍港で、得態えたいの知れぬ兵器を搬入はんいゆうしたことがあつたが、あれに違ちがいがない。

ああ、新兵器、怪力線！

皇国こうこくは美事に救すくわれた。

怪力線の発明者は誰だ。

千手大尉せんじゆは、旗艦陸奥を呼ぶために、短波のラジオ受信機のスイッチを入れた。するとどうした具合であつたか、感激に満ちた若い女性の声が聞えて来た。

「おや、この戦争の真唯まただな中なかだというのに、婦人が一体何を放送しているのだろう？」

人一倍、呑気のんきものの千手大尉は、それをよく聞いてみるつもりで、ダイヤルをグツと廻した。厚い飛行帽の中にとりつけられた受話器には、手に取るような、その女性の言葉が聞えてきたのだつた。

「——皆さん、わが帝国は、遂に勝ちました。さしも世界に誇った米国の太平洋大西洋の聯合艦隊も、わが海軍の沈着な戦闘によつて、半数は、太平洋の海底深く沈み、残りの半数は戦闘力を失い、或は白旗をあげて降服いたしました。遠く北滿ではわが精鋭なる陸軍の奮戦によりまして労農ロシア軍を、興安嶺の彼方遠く撃退することが出来ました。それから、米国の大艦隊に従い、日本へ攻め寄せて来た二千台の大空軍はどうなつたでしょうか。又アラスカ半島から襲来して参りました大飛行船隊はどうなつたでございましょうか。それは、わが陸海軍の航空隊と、私達の持つて居ります愛国防空隊との活躍によつて多大の損傷を与えることが出来ましたが、しかし最後の一戦を挑んで帝都へ押寄せて来ました飛行船飛行機の数は、無慮一千五百機。これを撃破するには、あまりに手薄いわが空軍の勢力でございました。ところが、皆さんが唯今帝都の上空に於て、親しく御覧になりましたとおり、あの巨人のようなロスアンゼルス以下の飛行船も、ボーイング、カーチスの優秀飛行機も、ボール紙が燃えるように一瞬の間に焼け落ちてしまつたのでございます。ああ、これは何という奇蹟でございましょう。しかし皆さん、これは奇蹟などという馬鹿げたものではございません。これこそ吾が科学界の明星、戸波博士の御発明になる怪力線の偉力でございます。しかし博士は謙遜されて申されません。怪力線はほんの

お手伝いをしたのに過ぎない。本当に外敵がいてきを撃退し得た力は、伝統を誇るわが陸海軍々人の勇敢なる戦闘力と、その背後に控えた国民の覚悟と協力、ことに防空問題についての理解と準備とが十二分に行われた結果であると申されます。その辺の判断は、皆さんのお心こころ委まかせとし、いまや太平洋を征服し、東洋民族の盟主めいしゅとして仰がれることになりました。新日本の光輝こうきある黎明れいめいを迎えるに当り、その尊とうとき犠牲となつたわが戦士と不幸な市民たちを弔とむらひ、又アメリカ主義に患わずらわされて西太平洋の鬼となつた米軍の空襲勇士たちのために、前に聞かせて頂いた空襲葬送曲を、唯ただいま今放送を以て、遠く米國本土にまで、お返ししようと思うのでございます。——」

シヨパンの、腸はらわたを断つような、悲痛なメロデーに充ちた葬送行進曲が、ピアノの鍵盤キーの上から、静かに響いて来た。

涙をソツと押さえてJ O A Kのスタディオに弾だんずるのは、奇しい運命の下に活躍した紅ベ子こだった。僅わずか一旬いちじゆんのうちに、弦三と素六の兄弟と、優しい母と姉とを喪うしなつた彼女は、この次の、父の誕生日に集るであろうところの、僅か半数になつた家族のことを想つて、胸のせまるのを覚えた。

しかし戦死したと思つた伊号一〇一乗組の、紅子の大好きな直二なおじ兄が、無事な姿をひよ

つくり現わすだろうことを思えば、
いつとはなしに微笑ほほえまれて来るのであった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「朝日」

1932（昭和7）年5月～9月号

入力：tatsuki

校正：kazuishii

2007年1月5日作成

2007年9月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

空襲葬送曲

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>